

# 国文学研究資料館蔵田安德川家旧蔵入木道伝書 解題（持明院家篇）

海 野 圭 介  
金 子 馨

## \*キーワード

入木道伝書・書論・持明院家・田安德川家・森尹祥

## はじめに

国文学研究資料館田安德川家資料（田藩文庫に所蔵される入木道伝書）の解題を報告する。すでに、前稿「国文学研究資料館蔵田安德川家旧蔵入木道伝書 解題（世尊寺家篇）」として、同資料群のうち世尊寺家に分類される入木道伝書の解題報告をした。<sup>1)</sup>そこで、本稿では、前稿に引き続き、持明院家の伝書として伝わる百十七点（合写等により通し番号は百十四）を取り上げ、資料の解題と画像を掲載する。

田安德川家は、八代將軍徳川吉宗（一六八四～一七五二）の二男宗武（一七一五～一七七二）を祖とする家で、一橋家・清水家とともに御三卿と呼ばれる家系の一つである。宗武は、江戸時代中期の歌人・国学者で、舞楽・有職故実を中心に古典研究に力を注いだ人物である。田安德

川家旧蔵の約二百点の入木道伝書は、世尊寺家五十点・持明院家百十七点・その他三十九点からなる。『田藩文庫目録と研究』<sup>2)</sup>に於いて、資料の略書誌は掲載されるが、入木道伝書は同書名の資料や同内容の異書名などがあり、書名だけでは内容が不明なものも少なくない。そこで、本稿では書誌の紹介に留まらず、内容に関する言及を試みた。

入木道伝書の内容は様々で、書式や心得などを記した理論書と色紙形や散らし書きなどの雛形（見本帳や手控え）とに大きく分けられるが、持明院家の伝書は、世尊寺家の伝書に比べて雛形を書き留めるものが多く残る。

さて、持明院家は、藤原行成（九七二～一〇二七）を祖とする世尊寺家が十七代行季（一四七六～一五三二）で断絶するが、世尊寺家より書法を伝授された持明院基春（一四五三～一五三五）をはじめ、基規（一四九二～一五五二）・基孝（一二二〇～一六一一）と入木道が相伝され江

戸時代まで宮廷の書き役を担う<sup>(3)</sup>。また、本資料の伝来ともかわるよう  
に、持明院流の流れを汲む森矩章・尹祥親子が関与していることが指摘  
できる<sup>(4)</sup>。

本文の書誌情報は一部重複するが、索引も兼ねて全体が一目でわかる  
ように本稿末尾に一覧の形で掲載した。また、同内容で書名の異なる資  
料も多いことから完全ではないが、「日本古典籍総合目録データベース」<sup>(5)</sup>  
などを参照して、可能な限り伝本の所蔵状況や研究状況なども反映した。  
力量不足による過誤も多いと思うが、ご批正を乞う次第である。

(金子)

#### 〔凡例〕

(1) 【解題】として書名(よみ)、伝書の内容、表紙、料紙、外題・内  
題、奥書等を記し、末尾に備考として伝本所蔵状況や翻刻・伝本  
研究などの現状を示した。また、後掲の「田安德川家旧蔵入木  
道伝書一覧」には、寸法、丁数、印記、請求番号、目録番号(『田  
藩文庫目録と研究』などの書誌情報を集約した)。

(2) 本解題を作成するにあたって、奥書などは可能な限り原本に忠実  
に翻刻するようにつとめたが、読みやすさへの配慮から次のよう  
な処置をとった。

ア. 平仮名・片仮名は、現行の字体に統一した。繰り返し記号(踊り  
字)は、平仮名は「ゝ」、漢字は「々」、それぞれ二字以上の繰り返し  
返しは「／」で統一した。

イ. 割書はへゝで括り、割書中の改行は「／」で示した。  
ウ. 奥書など長文の場合は、私に句読点を付したものもある。

#### 〔主要蔵書印〕(印記)



A「田藩文庫」



C「献英楼図書記」



B「田安府芸台印」

【解題】

1 短尺形古三十六人歌合

(たんざくがたこさんじゅうろくにんうたあわせ)

持明院一

半丁に三枚ずつ短冊形の罫線をひき、藤原公任撰『三十六人撰』をもとに短冊に様々なバリエーション(散らし書き)で書いた雛形(あるいは手控え)。短冊に古歌を書く場合、作者名を省略することが多いが、「左柿本人麿」「右紀貫之」というように、本雛形では短冊上部に歌題のように記しているものが多い。

写本一冊。表紙は山吹色地に鞠のような文様と糸を着彩で描いた紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は、「短尺形<sup>古三十六哥合</sup> 持明院一」と表紙左肩に直書きされる。内題は、題簽の形に罫線をひき、中に「短尺形<sup>古三十六哥合</sup> 参巻」(扉題)と記される。奥書等はない。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥する限りなく、孤本と思しい。



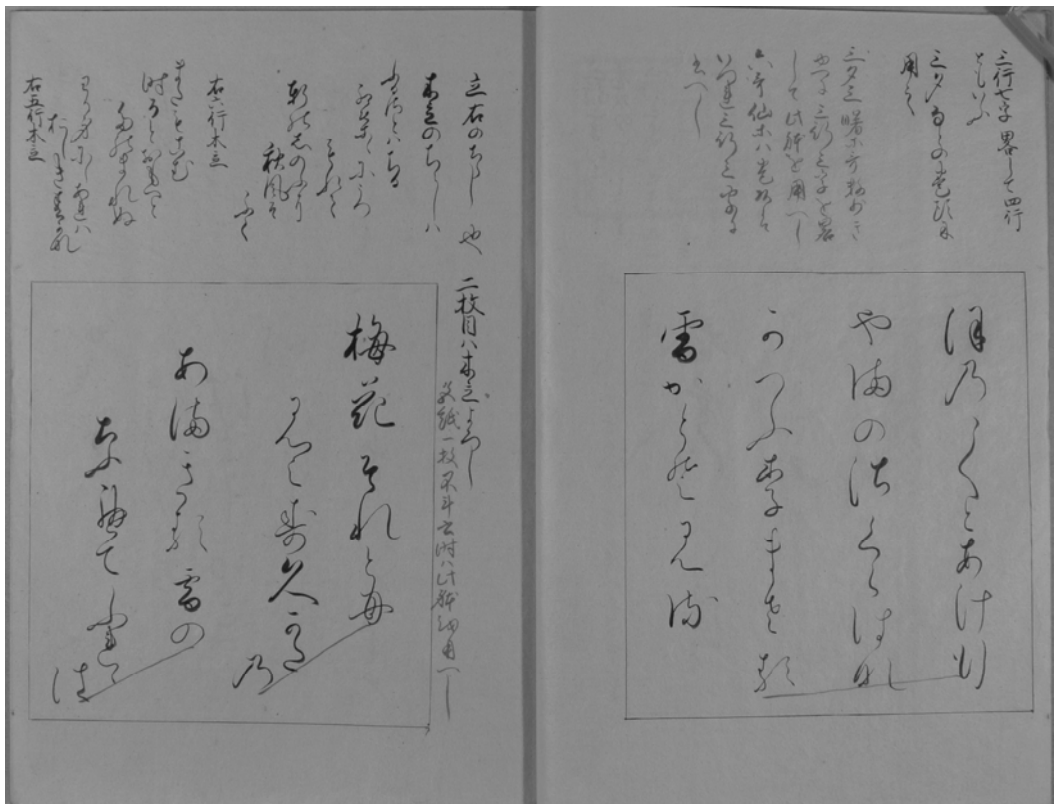
2 色紙形（しきしがた）

持明院二

世尊寺家十二代・行尹（一二八六～一三五〇）の著作と伝わる入木道伝書。半丁に一枚ずつ色紙形の罫線をひき、二十二種の散らし書きの形式を示した雛形。どのような時にどのような散らし書きをすべきかが記される他、頭注部や色紙の脇に、墨や朱で散らし形に関する言及が細かに記される。

写本一冊。表紙は山吹色地に蝶を着彩（型紙を用いて）で描いた紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は、「色紙形」持明院二と表紙左肩に直書きされる。内題は、「色紙形 一二（扉題）」と記される。巻尾に「右色紙散しかたは世尊寺行尹卿の口傳也、くはしく傳へ侍る、穴賢寛永十一年仲春 基定」持明院前大納言 行成卿十一代目 伊豫高祖父／森九郎兵衛へ」との奥書が記される。

奥書の後に、持明院基定より宗時（尹祥ノ師）までの持明院流の系図を書き添える。伝本は、祐徳稻荷神社中川文庫に、「詩歌色紙形」との書名で所蔵が確認できる。







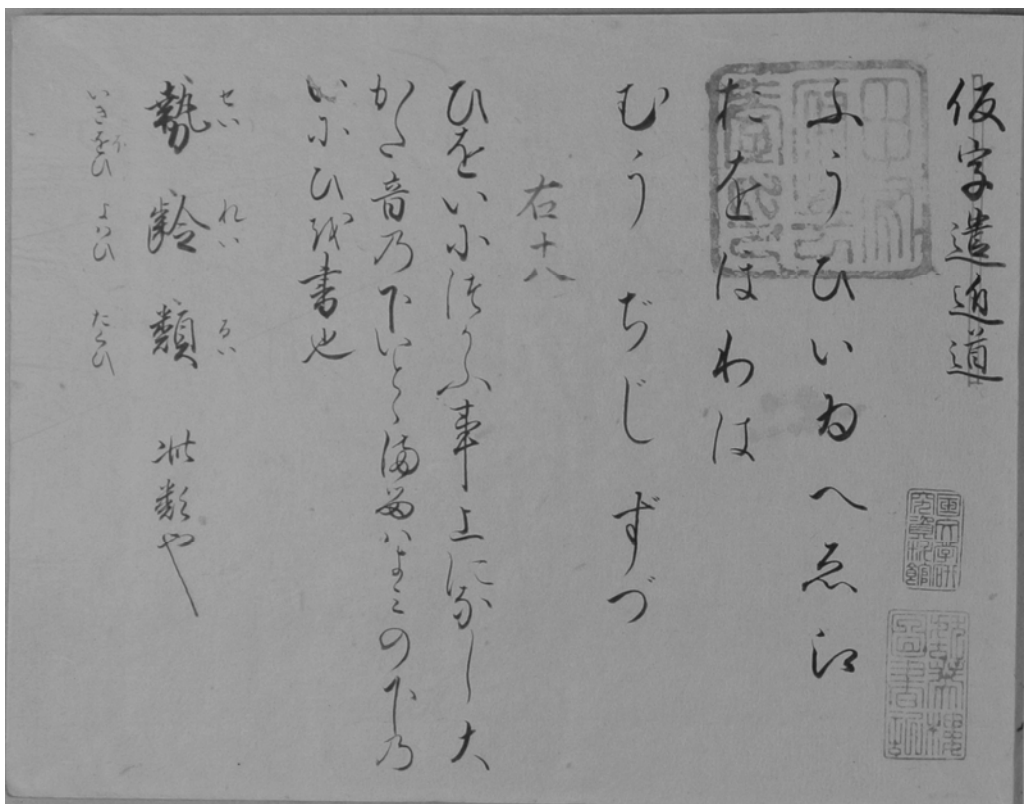
4 仮字遣近道（かなづかいちかみち）

持明院四

寛永二年（一六二五）に江戸時代前期の歌人・公卿の三条西実条（一五七五～一六四〇）が著したとされる仮名遣いに関する伝書。別名を「仮字遣近道抄」とする。本書には、「丹抄かなづかひ」「仮字遣近道略歌」も収められる。

写本一冊。表紙は白茶色の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は、「持明院 假字遣 近道抄 四」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「持明院 四」（扉題）、二丁表に「仮字遣近道」（巻首題）、九丁表に「丹抄かなづかひ」と記される。本文末尾に「凡是にて一切の仮字の埒あきまうす事にてか字によりて仮字のしれさるは定家の仮字とて摺本有、凡是にしるせり、其外 韻経を可被見候、乍去何乃書物も此傳受なくては用に立事あるましく候、可秘々々穴賢 寛永二年七月日実條へ西三條殿／前右大臣」 久脩侍従とのへ」と、巻尾に「右一卷能書家秘伝書尔松山羽林君奉伝授畢 寛政六年十二月 日尹祥」とそれぞれ奥書が記される。本書は、「仮字遣近道」のほかに、「丹抄かなづかひ」「仮字遣近道略歌」を収録する。

伝本は、京都大学、九州大学、東北大学狩野文庫などに所蔵される。今井真二氏『仮名遣書論攷』などに論考や翻刻がある<sup>⑥</sup>。



5 悠紀主基御屏風本文 悠紀主基御屏風色紙和歌

(ゆきすきこびようぶほんもん ゆきすきこびようぶしきしわか)

持明院五

天明七年(一七八七)の光格天皇の大嘗祭に際して、持明院宗時によって揮毫された悠紀・主基御屏に貼付された色紙形の雛形(写し)。どのように貼付されたか、その配置までは不明ながら、各紙の料紙の色は色紙形上部に記される。なお、「悠紀主基御屏風本文」は菅原為徳撰、「悠紀主基御屏風色紙和歌」は日野資矩詠。天明七年の大嘗会については、「天明七年大嘗會私記」(天理大学蔵)などの史料も確認される。

写本二冊。表紙は上冊(①)が白茶色の水玉文様の紙表紙、下冊(②)

が藍色地無紋の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は、①

「悠紀主基御屏風本文」七ヶ條極秘之内 五上と、②「悠紀主基御屏風色紙和歌」七ヶ條極秘之内 五下

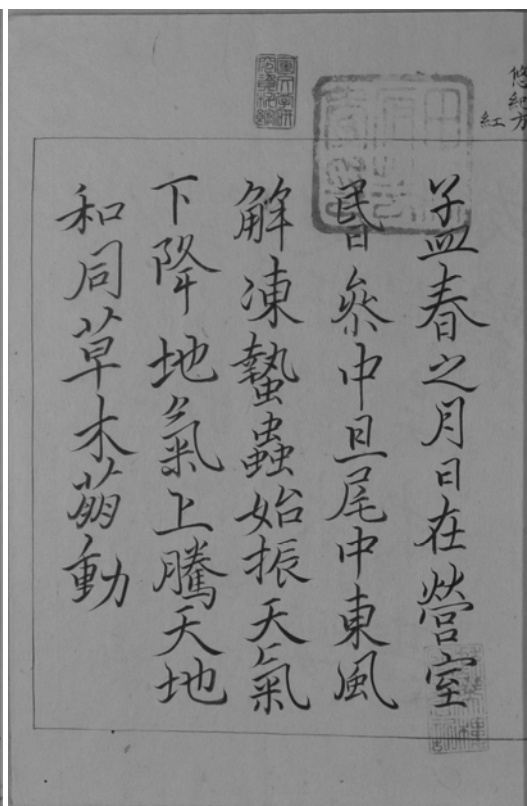
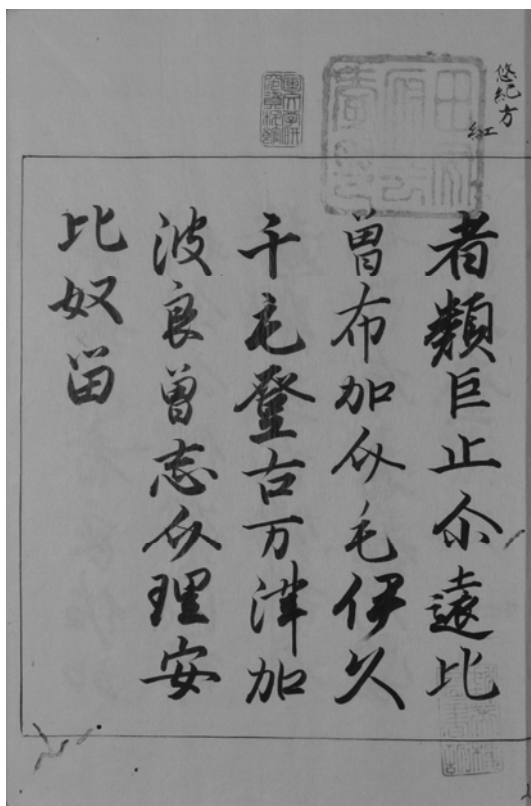
とそれぞれ表紙左肩に直書きされる。内題は、題簽

の形に罫線をひき、中に①「悠紀主基御屏風本文」(扉題)と、②「悠紀主基御屏風和歌」第五(扉題)とそれぞれ記される。奥書等はない。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥する限り孤本と思

しいが、「大嘗会悠紀主基御屏風和歌」(無窮会図書館)などの書目も確

認される。



6 男女詠草（なんによえいそう）

持明院六・七

詠草の書き方を男・女（女房）別に、見本（雛形）を示しながら注意書きを記したもの（指南書）。様々な場が想定され、例が示されている。

写本一冊。表紙は藍色地無紋の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。

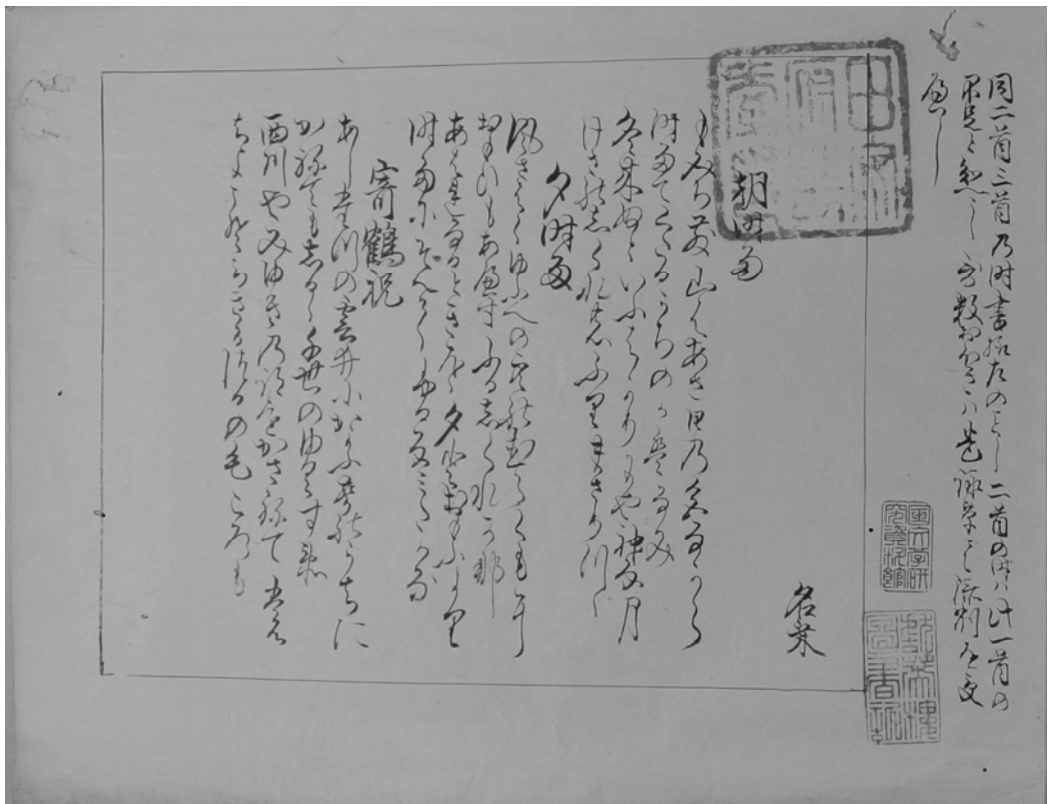
外題は、紫の打曇料紙の題簽に「持明院男女詠草 六七」と墨書され、表紙

左肩に貼付される。内題は、「持明院男女詠草 六七」（扉題）と記される。

巻尾に「右一卷尔松山少将君奉傳之畢 寛政八／仲夏 日尹祥」

との本奥書が記される。本書の外題・内題に「六七」と記されるが、二書の内容が収められるわけではない。通し番号の意図については今後の研究がまたれる。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥する限り孤本と思しい。

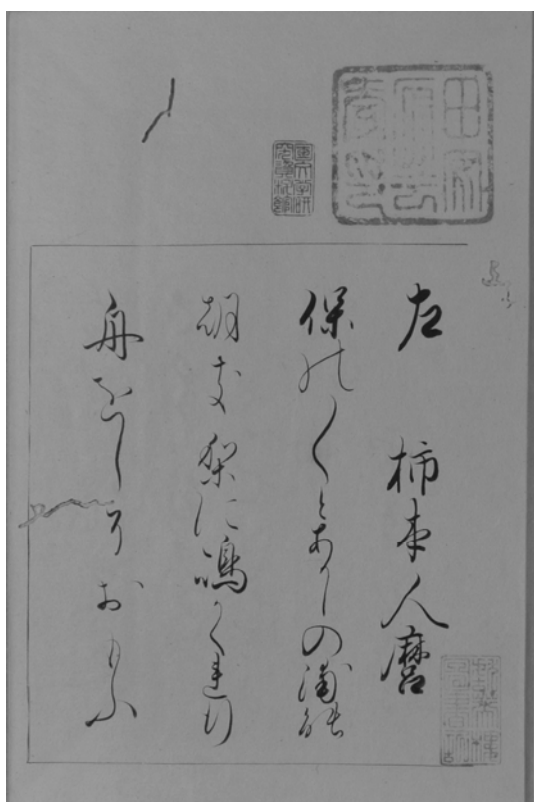


7 三十六人歌合（さんじゅうろくにんうたあわせ）

持明院八

『三十六人歌合』を題材にした色紙形の雛型。色紙形の型が縁取りされ、様々な散らし形を示している。

写本一冊。表紙は浅葱色地に舞樂の楽器や舞台を着彩（型紙）で描いた紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は、「三十六人歌合<sup>無繪書</sup>」（扉題）と記される。巻尾に「此一巻無繪時之書<sup>書</sup>也、令傳授畢<sup>持明院</sup> 天正八年南呂中納言藤原草名」との本奥書が記される。

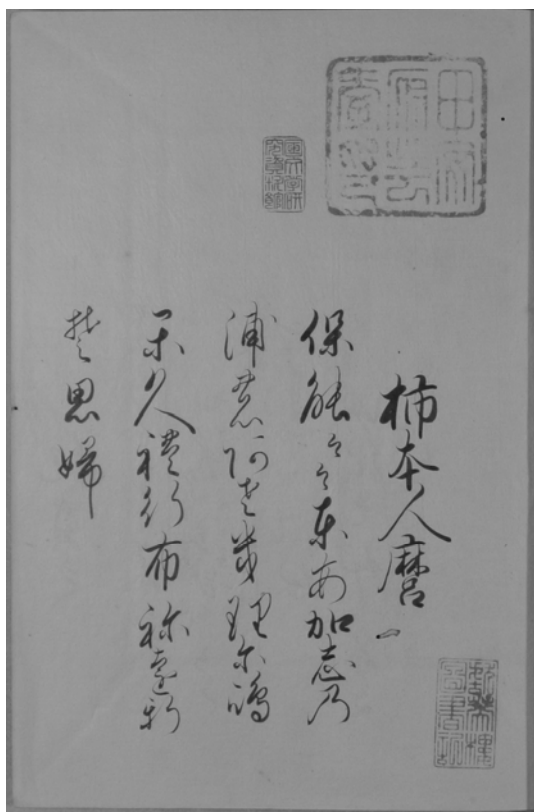


8 三十六人歌合（さんじゅうろくにんうたあわせ）

持明院九

『三十六人歌合』を題材にした雛型で、色紙形の散らし形を示す。色紙形の枠野はない。巻尾の奥書より世尊寺家十六代・行高（一四一二〜七八）の手による色紙形の写しと思われる。

写本一冊。表紙は紺色地に舞樂の楽器を着彩（型紙）で描いた紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は、「三十六人歌合<sup>無繪書</sup>」（扉題）と記される。巻尾に「右一巻者能書家之秘事也、従行高卿令傳授畢<sup>書</sup> 藤原草名」との本奥書が記される。

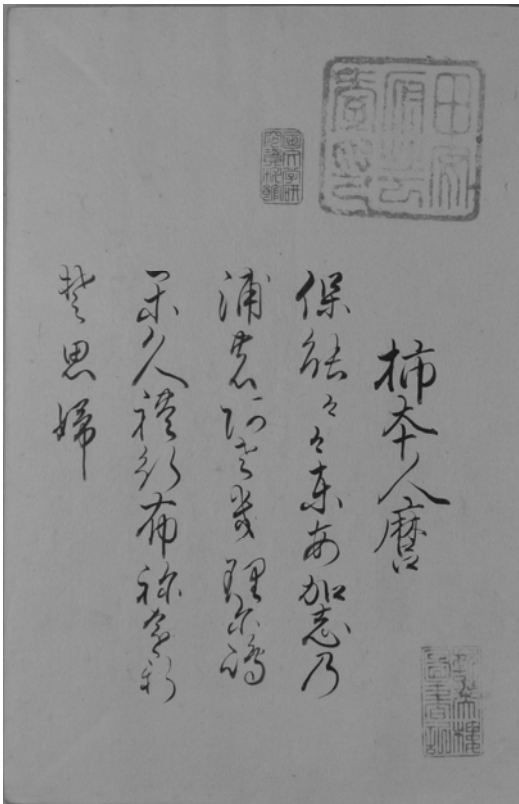


9 三十六人歌合（さんじゅうろくにんうたあわせ）

持明院十

持明院九と全く同じ散らし形を写す色紙形の雛型。尹祥の奥書が付され、一部配列が異なる箇所が確認される。

写本一冊。表紙は縹色無紋の布目（紙漉きの際の布目）の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は、「持明院三十六人哥合 十」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「持明院へ三十六人／哥合」 十（扉題）と記される。巻尾に「右一卷者能書家之秘事也、従行高卿令傳授畢藤原草名」との本奥書が記される他、別筆で「右一卷尔松山少将君奉傳之畢 寛政七年三月 日尹祥」との奥書も確認される。

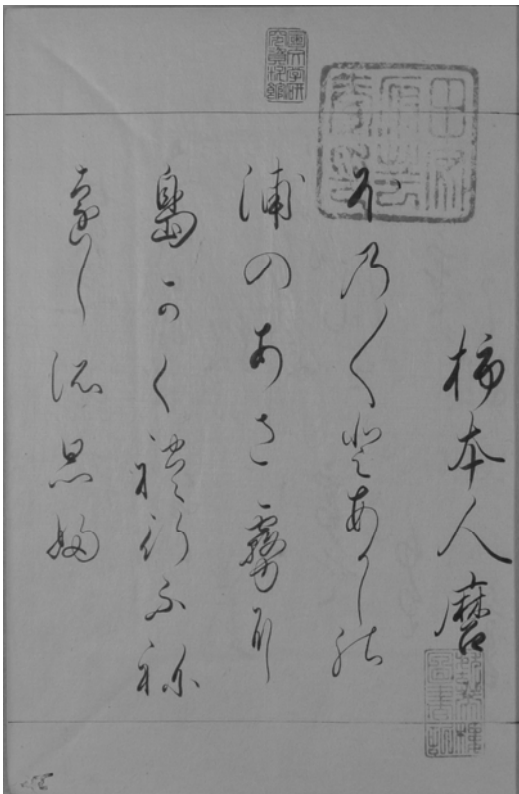


10 三十六人歌合（さんじゅうろくにんうたあわせ）

持明院十一

持明院八・九・十と同種の「三十六人歌合」の色紙形の雛形。尹祥の奥書より、世尊寺家七代・伊経の筆によるものとする。

写本一冊。表紙は紺色地に团扇散らし（团扇には花鳥絵が描かれる）を着彩（ステンシル）で描いた紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は、藍の打曇料紙に「持明院<sup>三十六人哥合無繪書鉢</sup> 十一」と墨書された題簽が、表紙左肩に貼付される。内題は、「三十六人哥合<sup>無繪書鉢</sup> 十一」（扉題）と記される。巻尾に「尹祥謹て考るに明月記に定家卿新勅撰の清書見苦といへと書之、外題伊経書之とあり、此清書も伊経卿散形うたかふへからす 源尹祥誌之」との識語が記される。

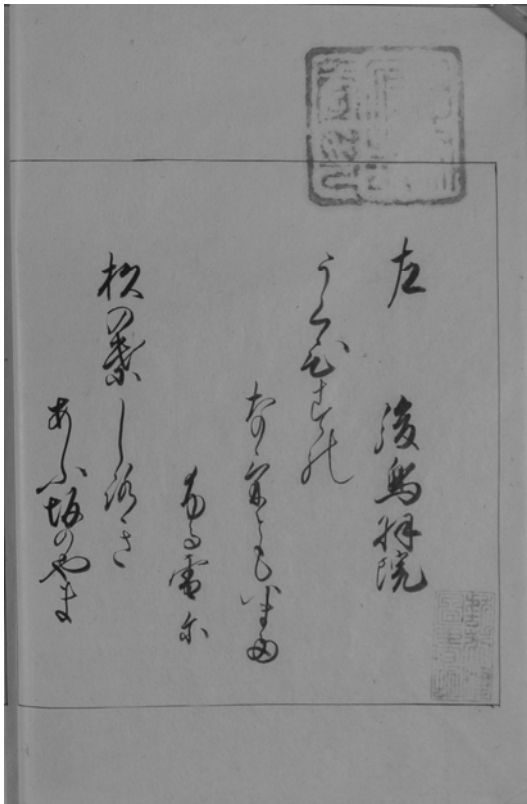


11 中古三十六人歌合（ちゅうこさんじゅうろくにんうたあわせ）

持明院十二

後鳥羽院撰『中古三十六人歌合』を題材に、色紙形の型を縁取り、散らし形を示した雛形。奥書によれば持明院基定の真蹟を写したものとす。  
写本一冊。表紙は紺色地に扇面散らし（扇面には花鳥絵が描かれる）を着彩（型紙）で描いた紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は、藍の打曇料紙に「中古三十六人哥合<sup>巻頭ちらし</sup> 持明院 十二」と墨書された題簽が、表紙左肩に貼付される。内題は、「三十六人哥合 十二」（扉題）と記される。巻尾に「右一卷以前垂塊基定卿真跡令臨写畢 天明三年五月日」と本奥書が記される。

宮内庁書陵部に同様の雛形が確認されるが、散らし形が異なる。

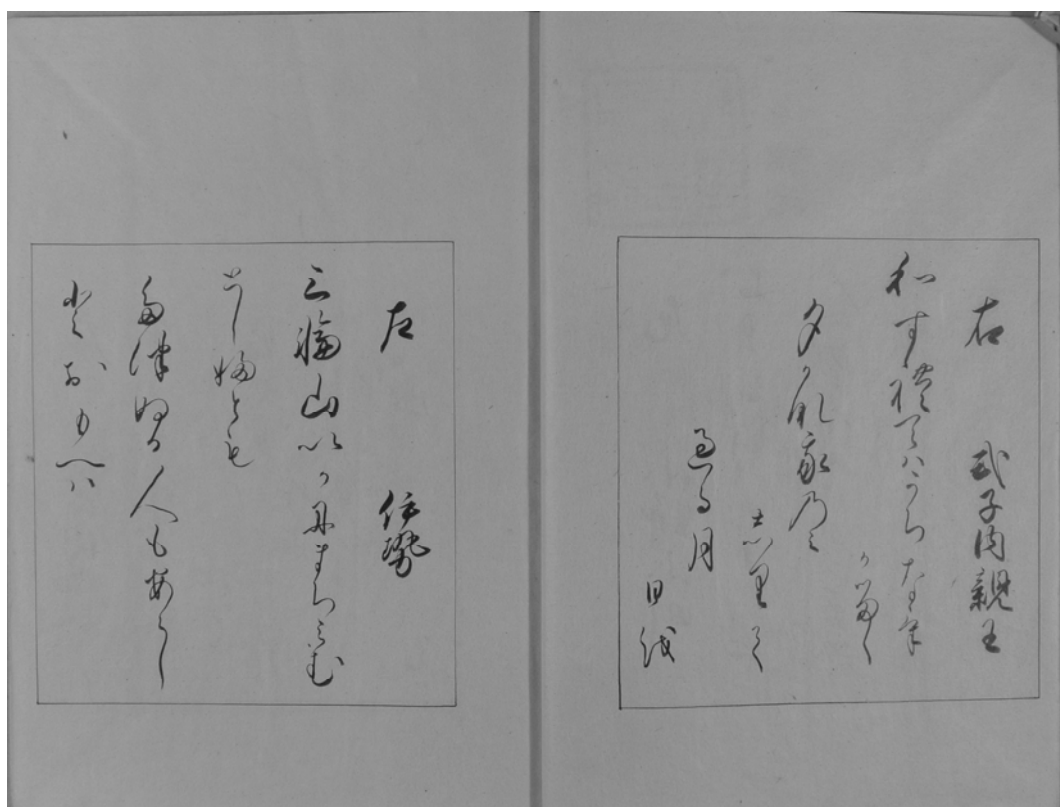


12 女房三十六人歌合（にようぼうさんじゅうろくにんうたあわせ）

持明院十三

色紙形の型をとり、『女房三十六人歌合』を記した色紙形の雛形で、尹祥の奥書より持明院家より中院家へ相伝された由が記される。

写本一冊。表紙は紺色地に団扇散らし（団扇には花鳥絵が描かれる）を着彩（型紙）で描いた紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は、藍の打曇料紙に「女房三十六人歌合<sup>持明院</sup> 十三」と墨書された題簽が、表紙左肩に貼付される。内題は、「女房三十六人哥合 十三」（扉題）と記される。巻尾に「這散し形一帖は持明院家より中院家へつたへらるゝ處也、師家の傳書なるゆへにうつしをき侍る 天明六年後十月源尹祥」との本奥書の他、「日野、烏丸、中院其外名家人々元和之頃ヨリ宝永、正徳ノ頃マテハ入木道ハ皆師家ノ門人也」との注記が添えられる。テキストの伝本はあるものの、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥する限り雛形は孤本と思しい。

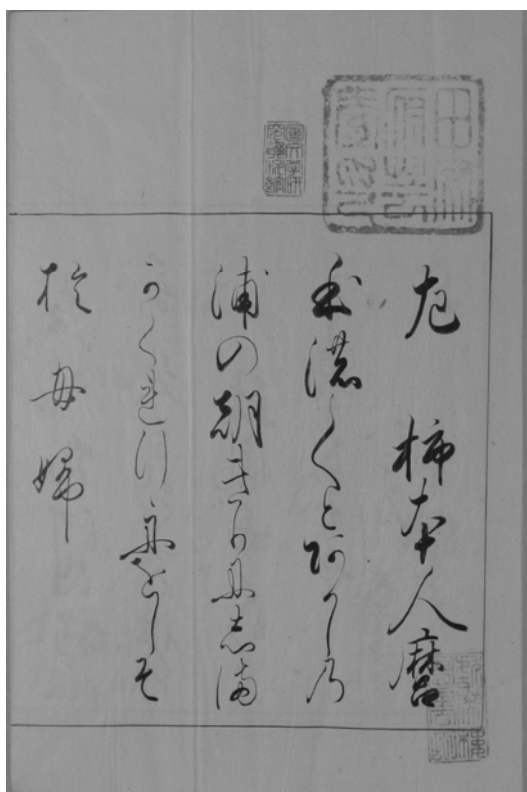


13 屏風色紙形（びょうぶしきがた）

持明院十四

持明院十五と同書名であるが、内容は『三十六人歌合』を題材とする色紙形の雛形で、奥書から持明院家十五代・基規の手によるものと見られる。

写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「屏風色紙形 持明院十四」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「屏風色紙形 十四」（扉題）と記される。巻尾に「這色紙形屏風一雙左右ヲ分テ押法也、是又一種ノ牀也 権中納言藤基規」と本奥書が記される。伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥する限り孤本と思しいが、国会図書館に同書名の資料が確認できる。



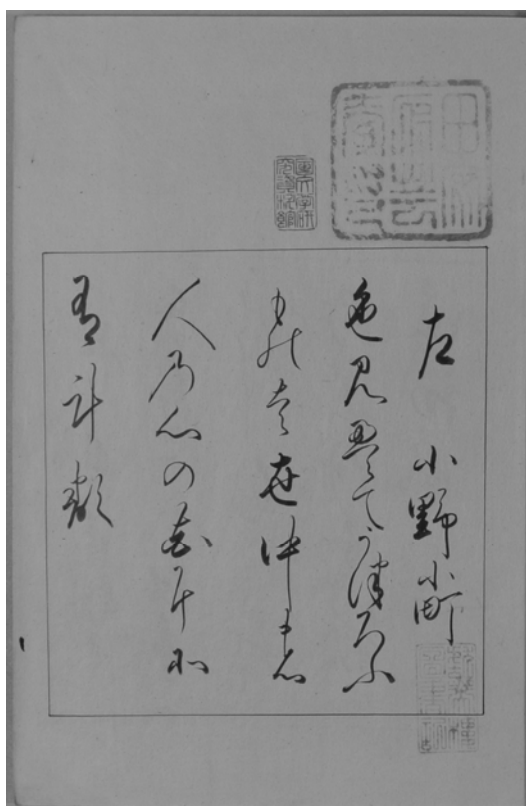


14 屏風色紙形（びようぶしきがた）

持明院十五

持明院十四と同書名であるが、本書は『女房三十六人歌合』を題材とした雛形である。「女房三十六人哥合」（持明院十三）もあるが、散らし形が異なるほか、歌人の組み合わせも異同が確認される。

写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「屏風色紙形<sup>持明院</sup> 十五」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「屏風色紙形<sup>女房</sup> 十四」（扉題）と記される。奥書等はなし。

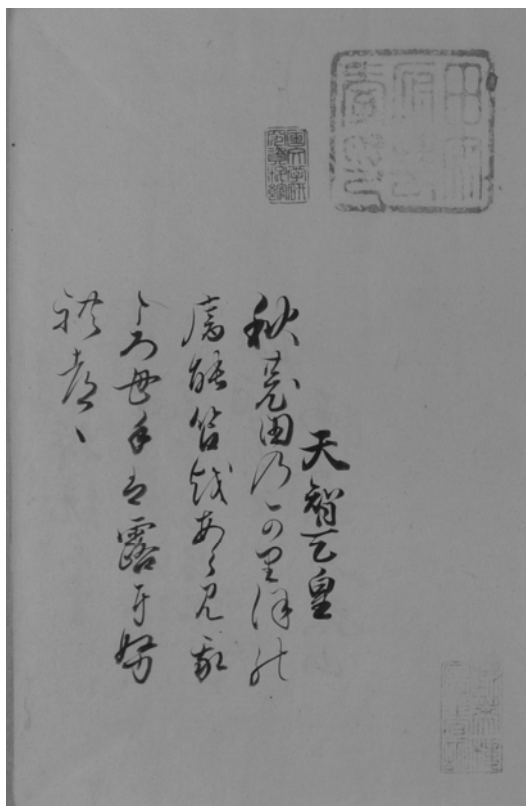


15 百駄色紙形（ひやくたいしきがた）

持明院十六

『百人一首』を色紙形に記した雛形。持明院十七・十八・十九と同書名であるが、いずれも散らし形は異なる。本書は奥書より持明院基輔の手によるものとされる。別書名を「百人一首色紙形」と呼ぶ。

写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「百駄色紙形<sup>持明院</sup> 十六」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「百駄色紙形 十六」（扉題）と記される。巻尾に「百人一首色紙形 持明院中納言基輔卿の筆也、入木家の式紙形なるかゆへに一字をたかへすうつつけ侍りぬ 入木後学道（花押）」と本奥書が記される。



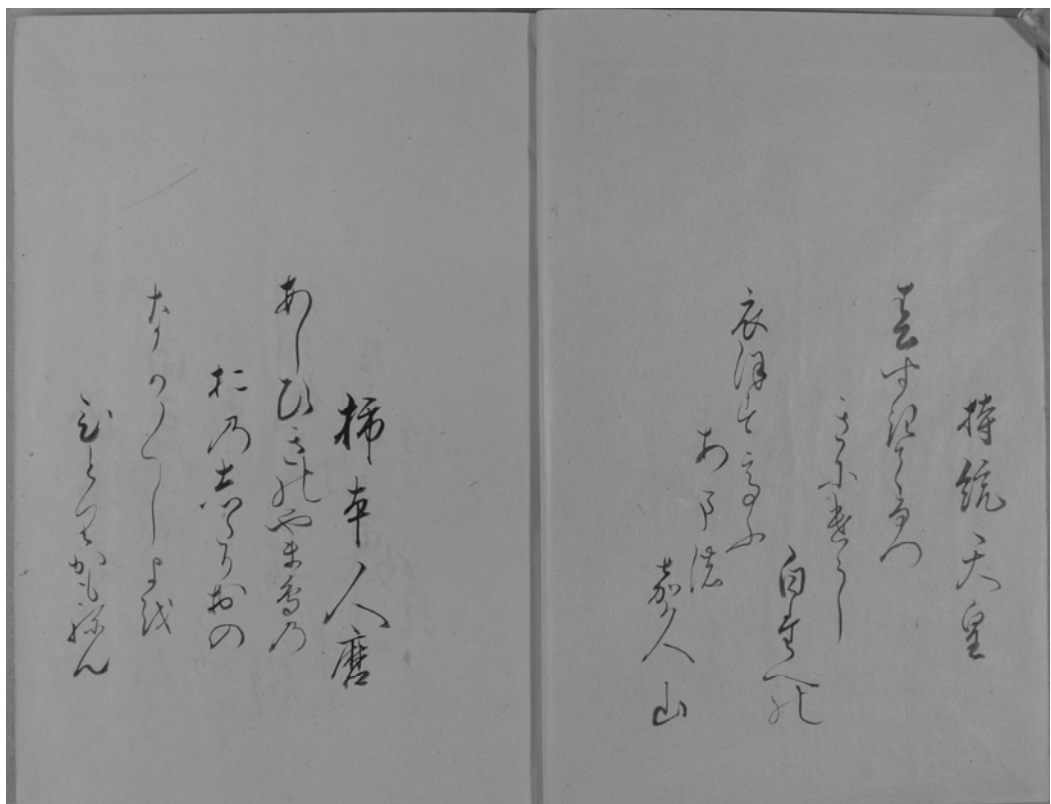
16 百牀色紙形（ひゃくたいしきしがた）

持明院十七

『百人一首』を色紙形に記した雛形。持明院十六・十八・十九と同書名であるが、いずれも散らし形は異なる。本書は奥書より、大猷院・徳川家光の所望により中院通村が調進し、青蓮院流の尊純法親王が揮毫したものの写しと思しい。

写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「百牀色紙形」<sup>持明院</sup>十七」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「百牀色紙形 十七」（扉題）と記される。巻尾に「右色紙形小倉山之百首大猷院相國散様依所望中院前内大臣通村被調進之畢、雖為家傳之秘事依惘望不淺、以件正本寫之令相傳之者也 青蓮院二品親王尊純御筆也 萬治四曆仲春日寫之（花押）」、「如本書写之令傳附畢 入木末資大僧都惠賢」<sup>從基時卿名傳受</sup>高階真人経房」との奥書が記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥する限り孤本と思しいが、別書名で同書も多いため、注意が必要である。

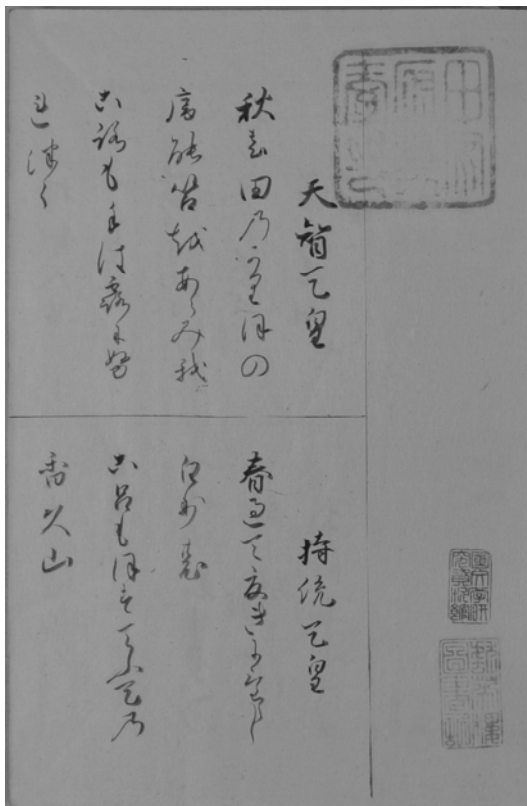


17 百駄色紙形（ひやくたいしきがた）

持明院十八

『百人一首』を色紙形に記した雛形。持明院十六・十七・十九と同書名であるが、いずれも散らし形は異なる。本書は、半丁を上下に分け、色紙形の型をとり散らし形を示す。持明院基孝の本奥書より、当家（持明院）の散らし書きの姿を伝えるとする。

写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「百駄色紙形<sup>持明院</sup> 十八」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「百駄色紙形<sup>古傳</sup> 十八」（扉題）と記される。巻尾に「右百體散形當家之傳書也、不可成猥者歟 天正十六年仲夏中納言藤原基孝」との本奥書が記される。伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥する限り孤本と思いが、別書名で同書も多いため、注意が必要である。

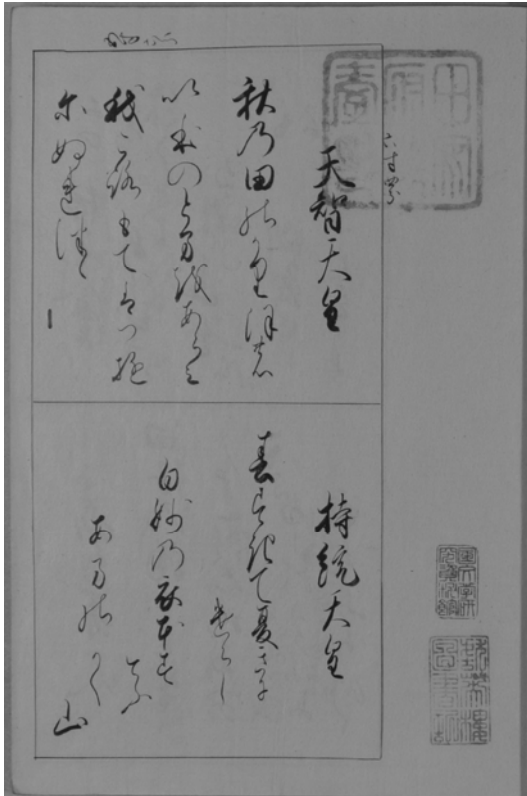


18 百駄色紙形（ひやくたいしきがた）

持明院十九

『百人一首』を色紙形に記した雛形。持明院十六・十七・十八と同書名であるが、いずれも散らし形は異なる。本書は持明院十八と同様に、半丁を上下に割り、色紙形の型をとった上で散らし形を示す。奥書より、畠山匠作の所望により持明院基俊が染筆したことがわかる。

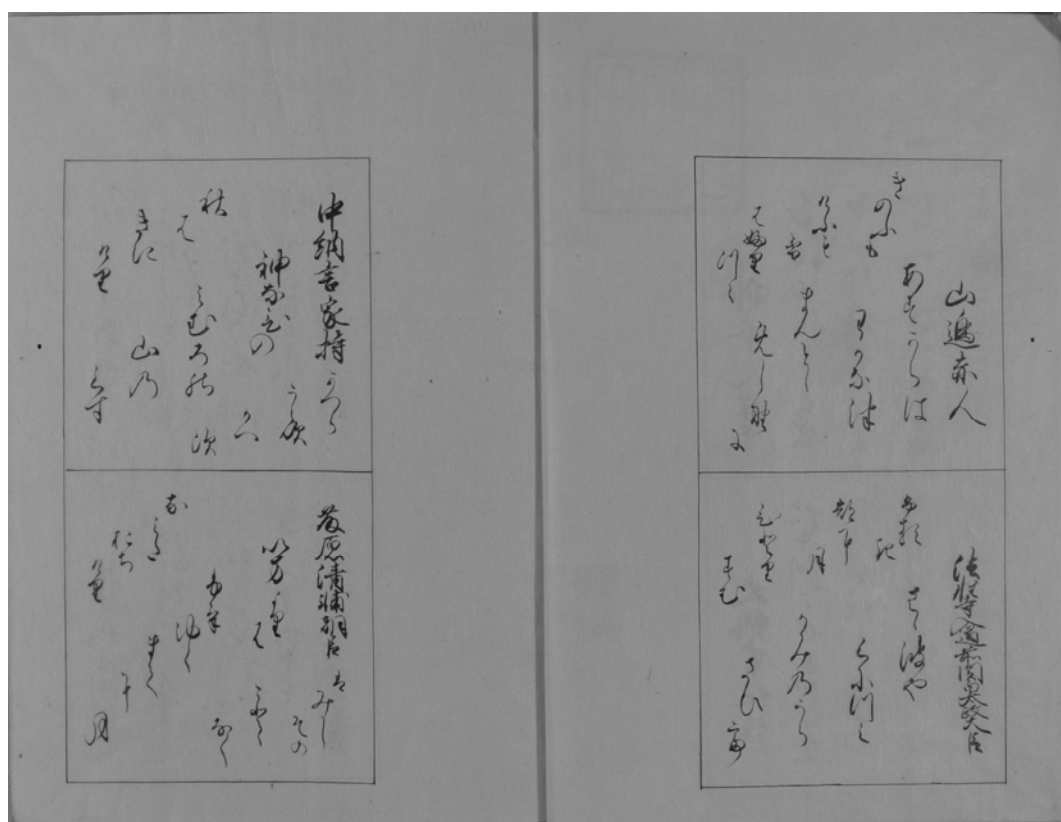
写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「百駄色紙形<sup>持明院</sup> 十九」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「百駄色紙形 十九」（扉題）と記される。巻尾に「入木道色紙形依畠山匠作御所望令染筆者也 参議藤（花押）」と本奥書が記される。伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥する限り孤本と思いが、別書名で同書も多いため、注意が必要である。



後鳥羽院撰『時代不同歌合』を題材に、半丁を上下に分け、色紙形の型をとった上で散らし形を示す雛形。中院通茂の写したものをさらに写していることが奥書よりわかるが、もとは天正十五年（一五八七）に三条西実枝が書写したものと思しい。

写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「時代相違色紙形 持明院 二十」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「時代相違色紙かた 二十」（扉題）と記される。末尾の色紙形四枚分に跋文のような形式で、「つれ／＼なるその日くらししつけき雨のうちにつく／＼と硯にむかひてふることともみ侍し中に時代不同の哥合とかいひて後鳥羽上皇のかきつかはせ給しものをみ出し三首つゝ侍る哥の中をかたはしつゝかきいたせり、まことに人丸赤人のたかき世より貫之、躬恒などかしこき跡経信、匡房などいへることにたへたる人のことのはかの御代の定家、家隆こときまてかきのせられたる事時代の風上古、中昔うつりかはれる世のよのすかたまでもみそなはずへきもてあそひ物ならし 時に天正十五年五月六日前拾遺黄門」と記される。その他、巻尾に「前拾遺黄門は三光院内大臣實枝公也、可珍重之一巻也」「此一冊中院垂相本書写於寫本者鳥子小本（以堺ノ記之）也 延寶六年九月下旬（花押）」などの識語が記される。

伝本は、「時代不同歌合色紙形」との書名で、宮内庁書陵部に所蔵が確認されるが、同内容かは定かでない。



20 絵様色紙形（えようしきしがた）

持明院二十一

色紙形や扇面、団扇に揮毫されたものの写し（雛形）。歌仙絵のほか、下絵なども写しており、墨だけでなく、朱や黄の彩色を用いて描くものも散見される。内容は多岐にわたり、一貫性は見られない。

写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「繪様<sup>持明院</sup>しきし形 廿一」と表紙左肩に直書きされる。

内題は、「持明院繪様しきしかた 二十二」（扉題）と記される。奥書等はない。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥する限り孤本と思しい。



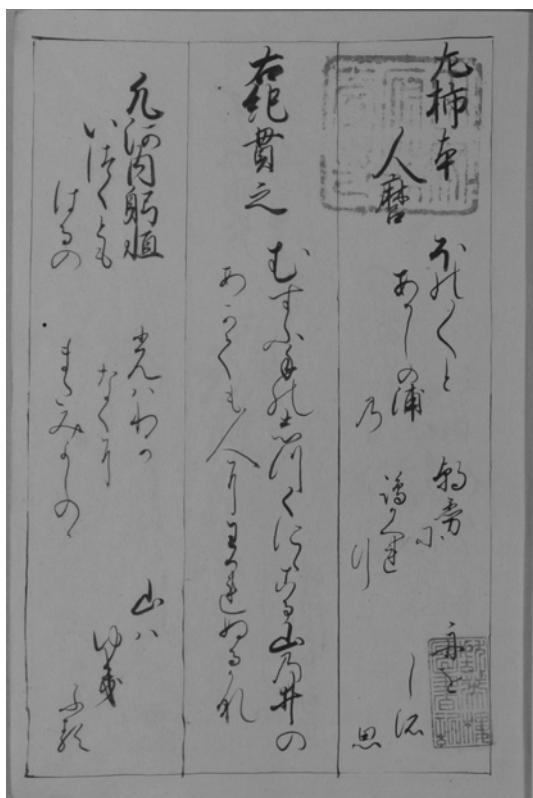
21 短冊知良志（たんざくちらし）

持明院二十二

「短尺形古三十六人歌合」（持明院一）と同じように、半丁に三枚ずつ短冊形の型をとり、藤原公任撰『三十六人歌合』を様々なバリエーションで書いた雛形（あるいは手控え）。古歌の場合、作者名を省略することが多いが、「左柿本人麿」「右紀貫之」と、題のように記す。字の形や崩し方は異なるが、持明院一と散らし形はほぼ一致する。

写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「短冊知良志<sup>持明院</sup> 廿二」と表紙左肩に直書きされる。

内題は、題簽のような罫線をひいた中に「短冊知良志 廿二（中）」（扉題）と記される。奥書等はない。



22 短冊散(たんざくちらし)

持明院二十三

「短尺形古三十六人歌合」(持明院一)や「短冊知良志」(持明院二十二)と同じような雛形(あるいは手控え)。半丁に三枚ずつ短冊形の型をとり、藤原公任撰『三十六人歌合』を様々なバリエーションで記している。しかし、前掲書とは異なる散らし形で書かれている。扉題の表記・内容から、元は「短冊知良志」(持明院二十二)・「短冊ちらし」(持明院二十四)とで一まとまりであった可能性もあろうか。

写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「短冊散」持明院 廿三と表紙左肩に直書きされる。内題は、題簽のような罫線をひいた中に「短冊散」廿三上(扉題)と記される。奥書等はない。

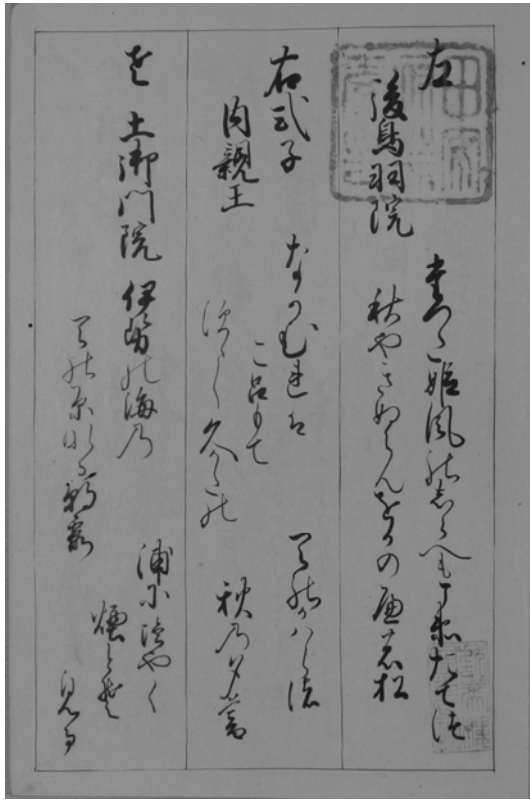


23 短冊散(たんざくちらし)

持明院二十四

「短尺形古三十六人歌合」(持明院一)や「短冊散」(持明院二十三)と同じような雛形(あるいは手控え)。だが、三十六人の内容が異なる。半丁に三枚ずつ短冊形の罫線をひき、後鳥羽院・式子内親王から釈阿・西行までの三十六人を様々なバリエーションで記す。扉題の表記・内容から、元は「短冊知良志」(持明院二十二)・「短冊散」(持明院二十三)とで一まとまりであった可能性もあろうか。

写本一冊。表紙は墨色地の水玉文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「短冊ちらし」持明院 廿四上と表紙左肩に直書きされる。内題は、題簽のような罫線をひいた中に「短冊散」廿四下(扉題)と記される。奥書等はない。



24 持明院三十六人歌合絵短冊散形

(じみょういんさんじゅうろくにんうたあわせえたんざくちらしがた)

持明院二十四下

「短尺形古三十六人歌合」(持明院一)や「短冊散」(持明院二十三)と同じような雛形(あるいは手控え)であるが、下部に白描の歌仙絵を描いたもの。半丁に三枚ずつ短冊形の型をとり、藤原公任撰『三十六人歌合』を様々な散らし形を記す。他の雛形と異なり、歌人名は、冒頭ではなく歌仙絵の近くに記される。外題・内題の内容から「短冊散」(持明院二十四)とで一まとまりとされる。

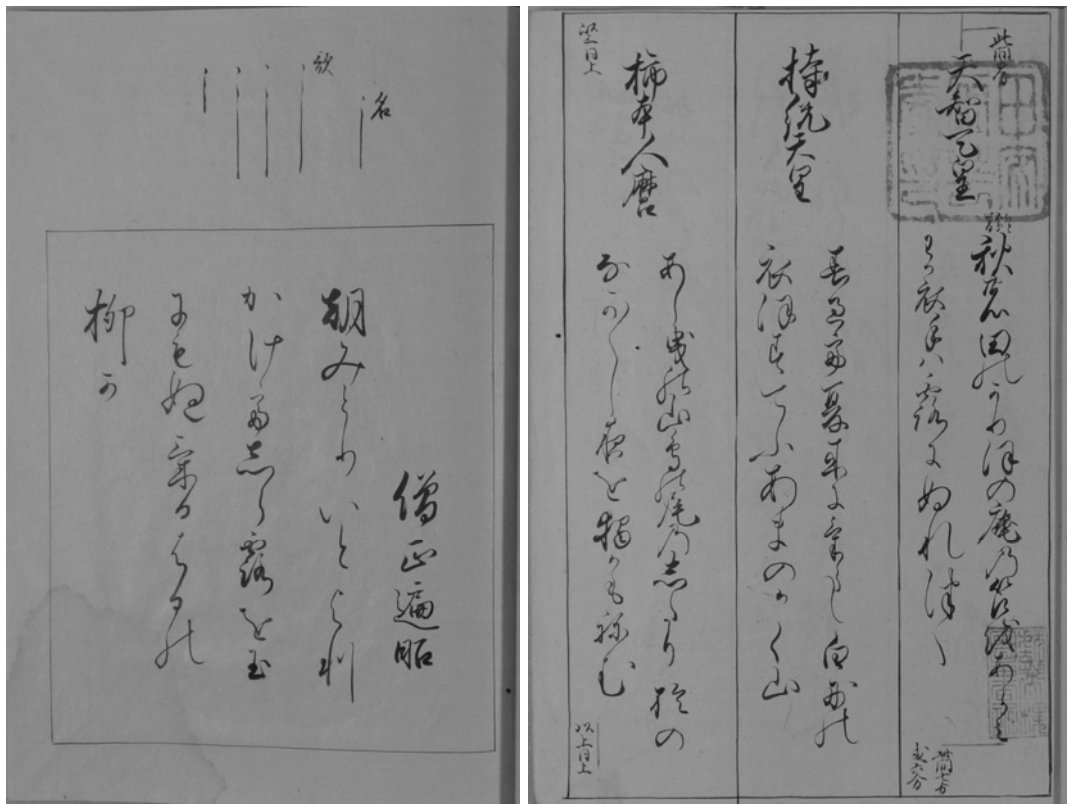
写本一冊。表紙は白色地に南天の実と葉を緑と朱で色刷りにした紙表紙、見返しは楮紙(表紙と同じ)、料紙は薄様。外題は紫の打疊料紙に「持明院へ三十六人哥合／繪短冊散形」 廿四下」と墨書した題簽が、表紙左肩に貼付される。内題は、「持明院 廿四下」(扉題)と記される。巻尾に「右一巻尔松山少将君奉傳之畢 寛政八年八月良辰尹祥」との本奥書が記される。



『百人一首』を題材とした短冊の雛形で、半丁に三枚ずつ短冊形の型をとり、様々な散らし形を記した雛形（手控え）。注意事項等、墨や朱で小書きされるため、単純な雛形とも言い切れない。短冊の雛形の後に、色紙形の雛形も収載する。

写本一冊。表紙は墨色地の水玉文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「短冊百人一首 廿五」と表紙左肩に直書きされる。内題は、題簽のような罫線をひいた中に「短冊百人一首 廿五」（扉題）と記される。「短冊百人一首」の末尾に「此書未練之族勿傳之矣」「基時卿門弟山本源右衛門弟子<sup>加州之人</sup>高木猪助正春成寫道筑に傳へし百牀、安永九年九月廿二日成寫和鼎より密にみせらるゝ書法一同也」との本奥書と識語が記される。その他、巻尾には、「右一卷依懇望令相傳者也 正保二年九月七日（花押）」との基定の本奥書が確認される。

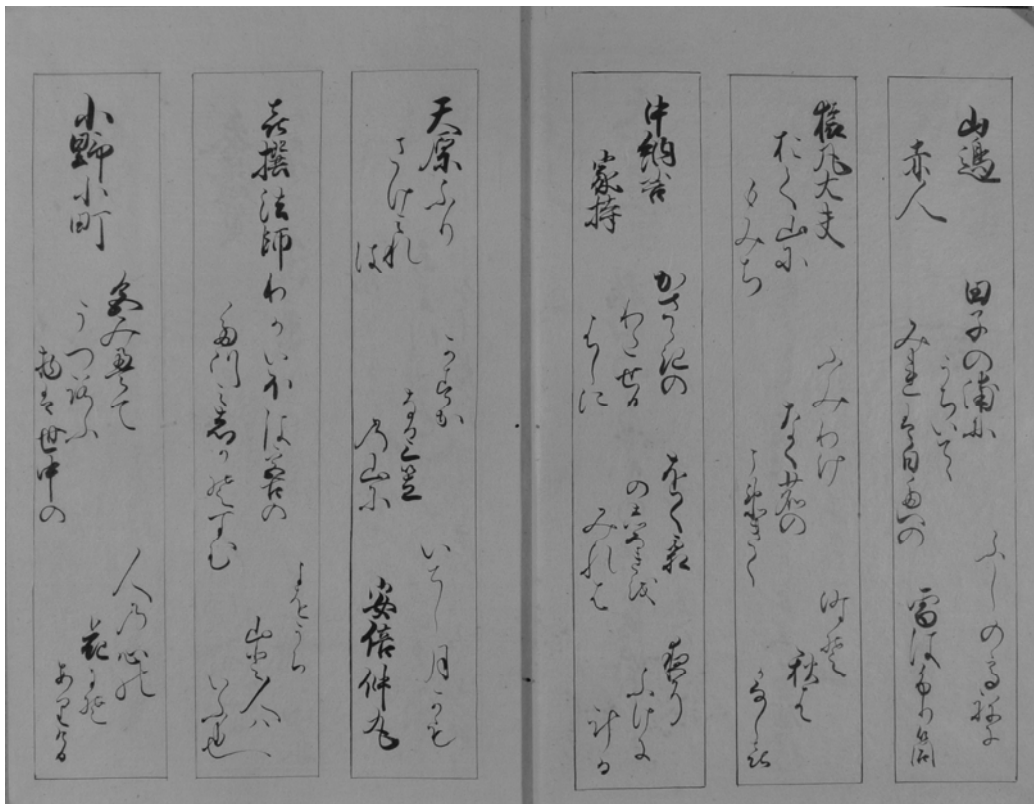
伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。





「短冊百人一首」(持明院二十五)と同じように『百人一首』を題材とした短冊の雛形であるが、散らし形は異なる。半丁に三枚ずつ、短冊の型をとり、様々な散らし形を示す。持明院二十五のように注や色紙形の雛形は付載されていない。持明院基孝の本奥書に、「能書家の秘事」とある。

写本一冊。表紙は深緑色の吹きつけ染め地に雅楽の楽器や舞台が着色(ステンシル)で描かれた紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「短冊ちらし」持明院家 廿六上と表紙左肩に直書きされる。内題は、題簽のような罫線をひいた中に「短冊ちらし」持明院家 廿六(扉題)と記される。巻尾に「此百體短尺散形能書家の秘事也、右之中芦手之散者百鉢之外猥不可書之、可守先師教戒、穴賢 慶長八年九月日中納言藤原基孝」  
「這一巻従持明院前大納言基定卿尹祥高祖父源重章奉相傳之秘書也、曾不可出書窓之外 入木道相承源尹祥誌」と二種の奥書が記される。

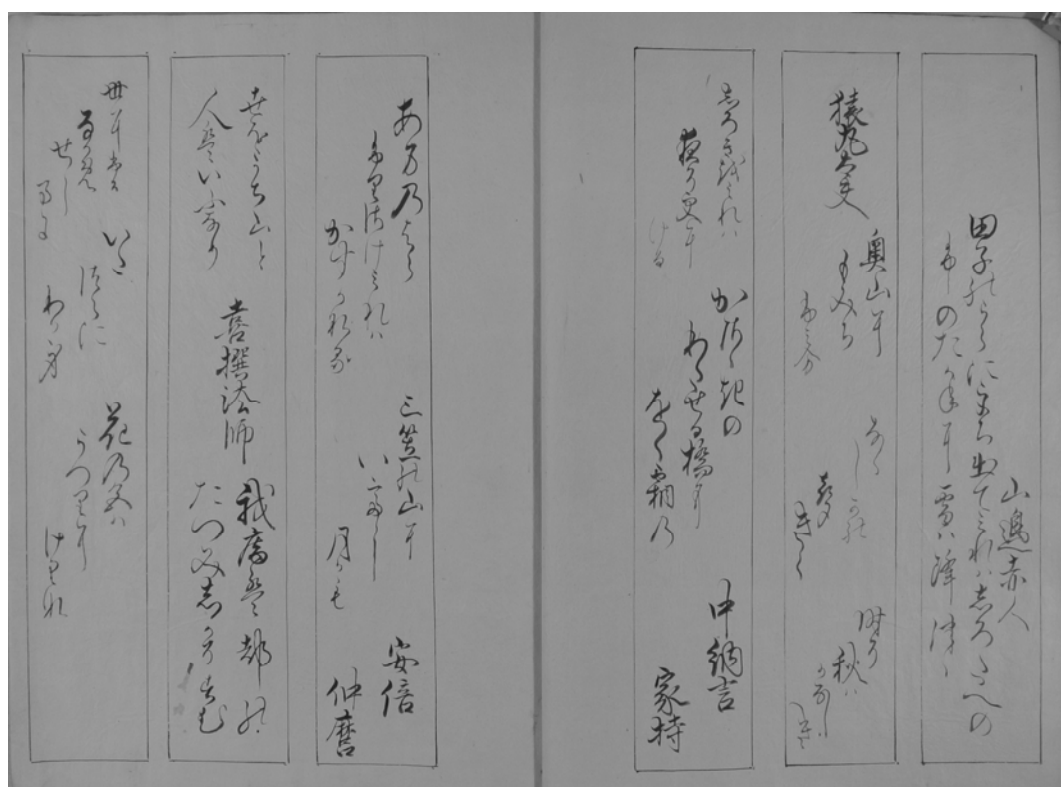


27 持明院百体短冊（じみよういんひやくたいたんざく）

持明院二十六下

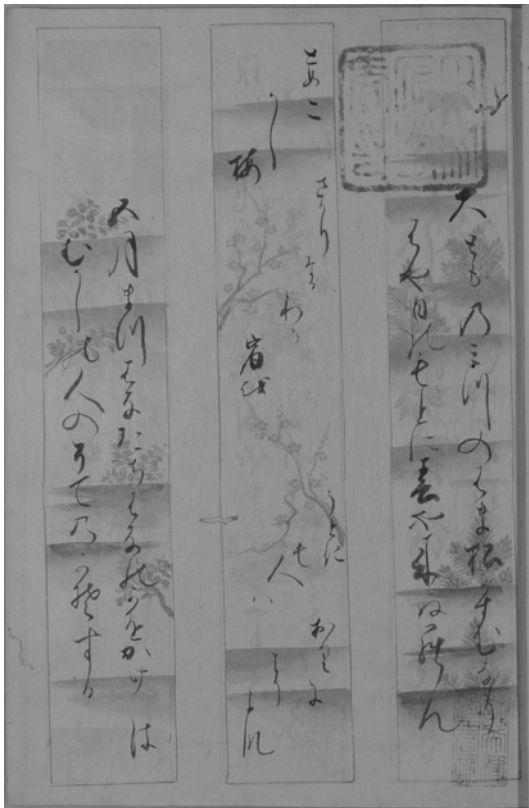
「短冊百人一首」（持明院二十五）や「短冊ちらし」（持明院二十六上）と同じように、『百人一首』を題材とした短冊の雛形であるが、散らし形は異なる。半丁に三枚ずつ、短冊の型をとり、様々な散らし形を示す。持明院二十五のように注や色紙形の雛形は付載されていない。

写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱の墨流し文様を施した紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「持明院<sup>百体短冊</sup> 廿六下」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「持明院<sup>百体短冊</sup> 廿六下」（扉題）と記される。巻尾に「右一卷尔松山少将君奉傳之畢 寛政八年八月良辰尹祥」との本奥書が記される。



28 絵よう短さく（えようたんざく）

持明院二十七上

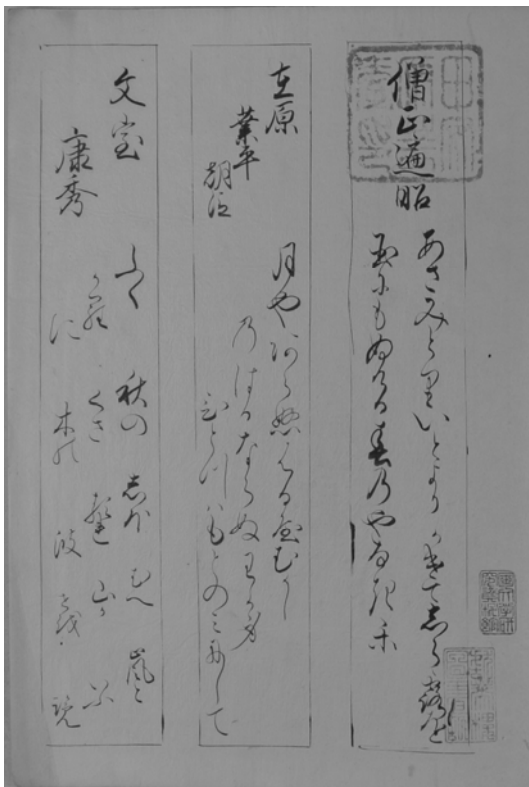


半丁に三枚ずつ、短冊の型をとり散らし形を示した雛形（写し）。散らし形だけではなく、下絵や歌仙絵も写している。下絵は金銀泥等を用いて彩色豊かに表現している。短冊の脇に筆者名が記されている。  
写本一冊。表紙は深緑色の吹きつけ染め地に銀泥で格子を描き、扇面散らしを着彩（型紙、扇面には季節の草木が描かれる）で描いた紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「<sup>繪</sup>やう短さく 二十七上」と表紙左肩に直書きされる。内題は、題簽のような罫線をひいた中に「絵やう短さく 二十七上」（扉題）と記される。奥書等はない。

29 持明院六歌仙短尺ちらし

（じみよういんろつかせんたんざくちらし）

持明院二十七下



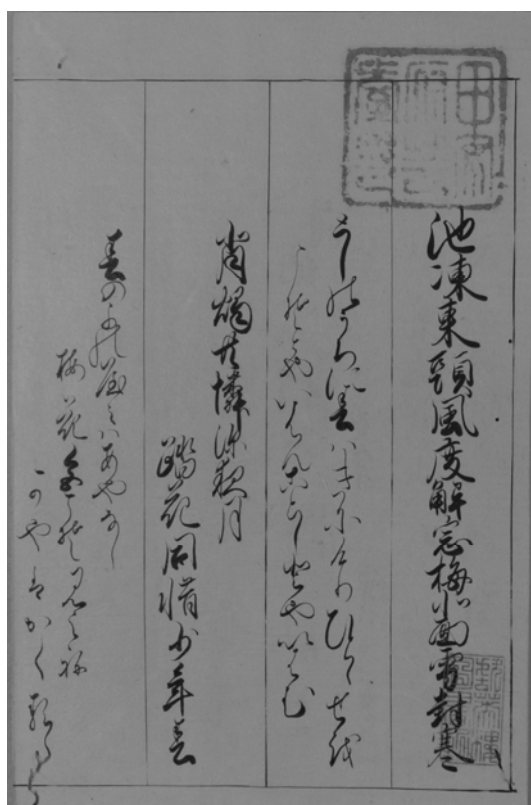
半丁に三枚ずつ短冊の型をとり、「六歌仙」を題材に散らし形を示した雛形。バリエーション豊かに散らし形を示す。  
写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱・金の墨流し文様を施した紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「持明院 六歌仙短尺ちらし 廿七下」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「持明院 六哥仙たん／さくちらし」廿七下（扉題）と記される。巻尾に「右一卷尔松山少将君奉傳之畢 寛政八年仲夏日尹祥」との本奥書が記される。  
伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。

30 持明院詩歌短冊知良志（じみょういんしかたんざくちらし）

持明院二十八

半丁に四枚ずつ、短冊の型をとり詩歌の散らし形（二部行書きも含む）を示した雛形。

写本一冊。表紙は深緑色の吹きつけ染め地に銀泥で格子を描き、扇面散らしを着彩（型紙、扇面には季節の草木が描かれる）で描いた紙表紙、見返しは楮紙（二丁目は共紙）、料紙は薄様（二丁目以降）。外題は「詩歌短冊知良志 廿八」と表紙左肩に直書きされる。内題は、題簽のような罫線をひいた中に「詩哥短冊知良志 二十八」（扉題）と記される。奥書等はない。

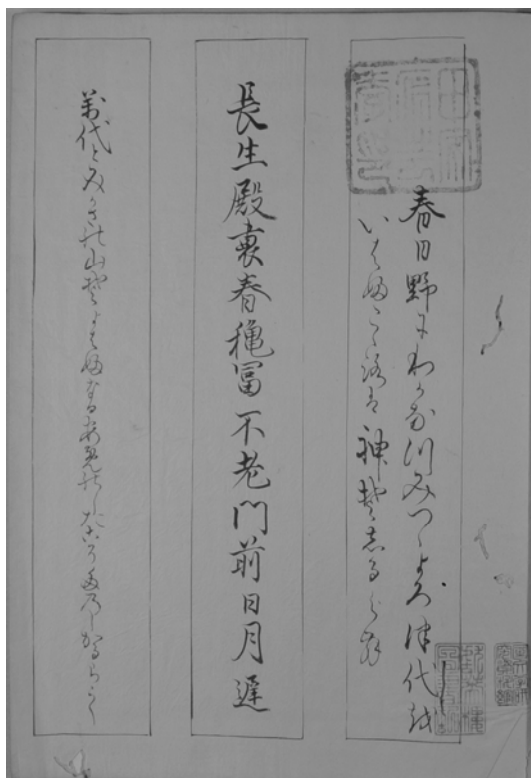


31 持明院数の短さく（じみょういんかずのたんざく） 持明院二十九

半丁に三枚ずつ短冊の型をとり、詩歌の散らし形を示した雛形。題材は「数の短さく」として、四季や六歌仙、九品や十二ヶ月など、様々な詩歌が取り上げられている。

写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱・金の墨流し文様を施した紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「持明院数の短さく 廿九」と表紙左肩に直書きされる。内題はなし。巻尾に「右一卷尔松山少将君奉傳之畢 寛政九年十月良辰尹祥（花押）」との本奥書が記される。

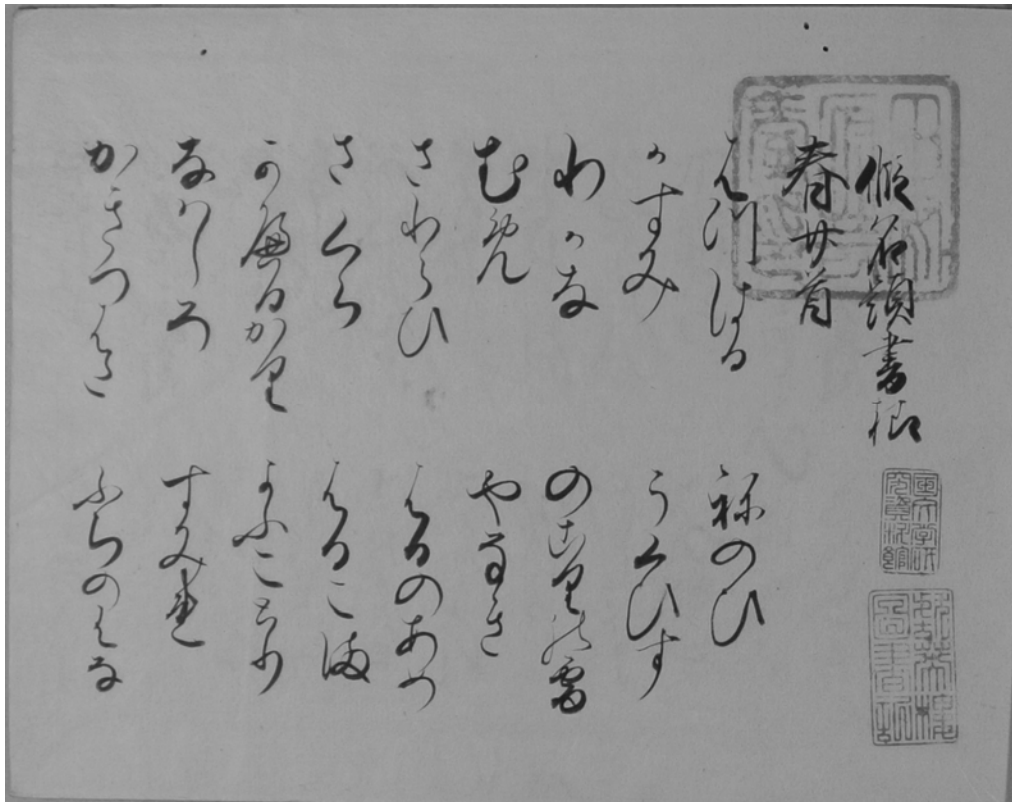
伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。



仮名の句題を列記したもの。内容は春二十首、夏十五首、秋二十首、冬十五首、恋十首、雑二十首の歌題を載せる。冷泉為久・為村著に『仮名句題』があるが、該書は「柿本詠三十首」で始まる上、「後鳥羽院御製二十首」を載せるため、全くの異本。内題や内容から題の書き方（見本）を示している。

写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「持明院 仮名句題 三十」と表紙左肩に直書きされる。内題は、一丁表に「持明院 仮名句題 三拾」（扉題）と、二丁表に「持明院 仮名題書様」（巻首題）とそれぞれ記される。巻尾に「右師家口傳の趣短筆にしるし付侍ぬ 源尹祥」との本奥書が記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。



33 持明院六人歌仙并十牛

(じみょういんろくにんかせんならびにじゅうぎゅう) 持明院三十一

『六歌仙』『新六歌仙』『十牛』の雛形(写し)。詩歌の散らし形だけではなく、歌仙絵や十牛図も写す。十牛図の一図(人牛俱忘)を欠くが、細密に原本を写していることを想像させる。

写本一冊。表紙は深緑色の吹きつけ染め地に銀泥で格子を描き、団扇散らしを着彩(型紙、扇面には季節の草木が描かれる)で描いた紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「<sup>持明院</sup>六人歌仙并十牛 三十一」と表紙左肩に直書きされる。内題は「六人歌仙并十牛 三十一(扉題)」と記される。奥書等はない。



34 持明院十二月花鳥和歌（じみょういんじゅうにがつかちようわか）

持明院三十二

藤原定家『十二月花鳥和歌』を題材にした散らし形の雛形で、挿絵等はない。奥書より、持明院基時の直筆を写したものと思しい。

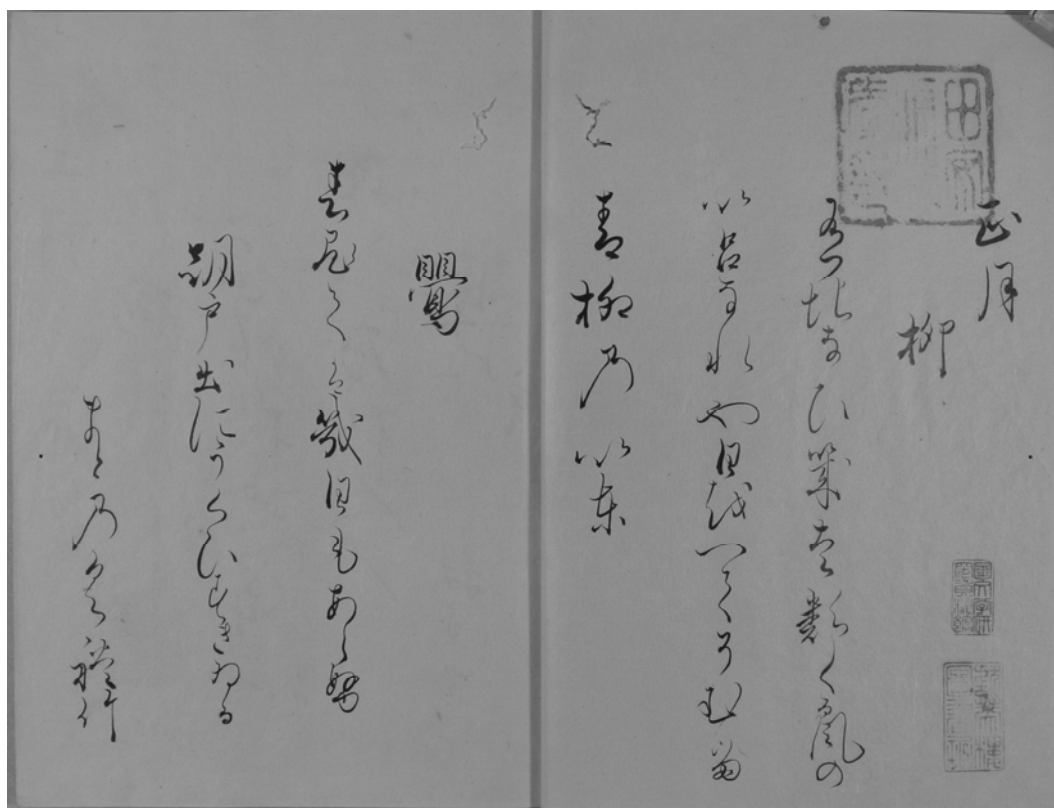
写本一冊。表紙は深緑色の吹きつけ染め地に銀泥で格子を描き、団扇散らしを着彩（型紙吹きつけ、扇面には季節の草木が描かれる）で描いた紙表紙、見返しは楮紙（一丁目は共紙）、料紙は薄様（二丁目以降）。

外題は「<sup>持明院</sup>十二月花鳥和歌 三十二」と表紙左肩に直書きされる。内題

は題簽のような罫線をひいた中に「十二月花鳥和歌 三十二（扉題）」と記される。巻尾に「右一卷持明院大納言基時卿以直筆写之者也 元

禄十三年二月廿五日 高階曲肱軒流静 於京都書之 径（花押）」との

本奥書と、「這十二月花鳥和歌巻物書寫之時以二筆書之法也、當家令相傳者天明六年正月廿二日於お玉ヶ池令焼失、雖然同本高階氏為所持之間得借用同四月三日凌晨病苦令再写畢 源尹祥誌之」との識語が記される。



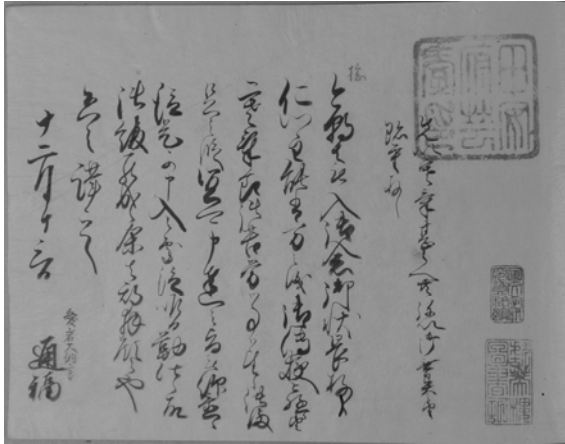
35 師家への書翰 宣胤卿記指物額

(しかへのしよかん のぶたねきようきさしものがく)

持明院三十三・三十四

「師家への書翰」(持明院三十三)と「宣胤卿記指物額」(持明院三十四)を一冊にまとめたもの。「師家への書翰」は通福、輝光、宣顕、通條、綱平、頼重、実陳、惟庸、共方、量時から持明院家へ宛てた書翰が収められる。

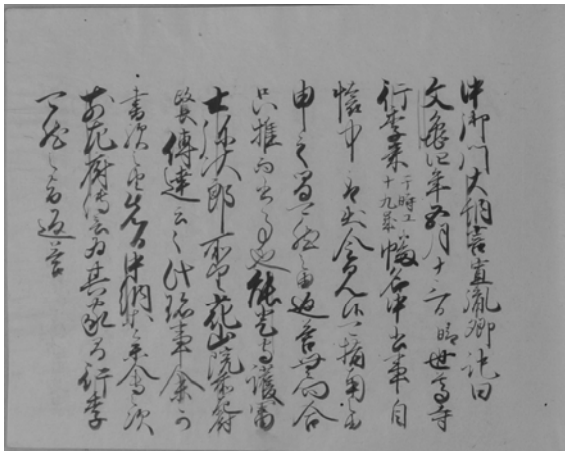
写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「師家への書翰 持明院 三十三／宣胤卿記指物題 三十四」



師家への書翰 (持明院三十三)

と表紙左肩に直書きされる。内題は、「師家への書翰 三十三／宣胤卿記指物額 三十四 持」(扉題)と記される。「師家への書翰」の末尾に「以上之三通者東叡山中堂瑠璃殿之御額 靈元院御法調之砌之一件也、右御額造文字土代者持明院前中納言基時卿也、八月十九日禁中江被迎候而廿日京出九月二日江戸着也、可貴重事也 源尹祥」と、巻尾(「宣胤卿記指物額」の末尾)に「入木道之嚴重成事如右、曾而猥執行不可有之、於堂上此道被貴重事于諸門人為令知之所編集如件 天明元年(壬／寅)八月日 源尹祥」との本奥書がそれぞれ記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。



宣胤卿記指物額 (持明院三十四)



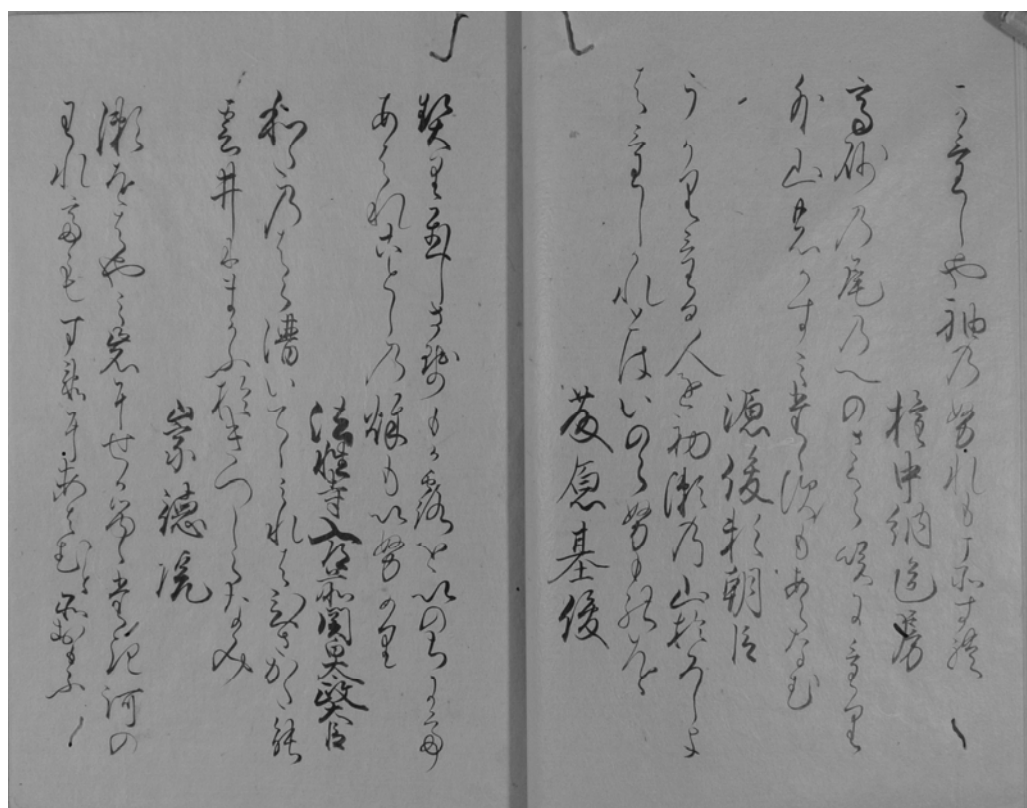
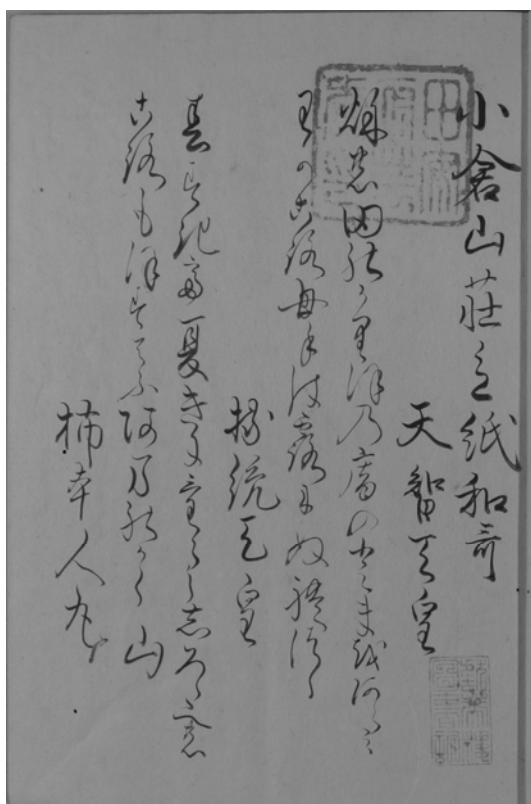
36 持明院百人一首草子書

(じみょういんひやくにんいつしゅそうしがき)

持明院三十五

『百人一首』の写本。書名に「草子書」とあることから、写本の雛形といえようか。一首二行に記される。

写本一冊。表紙は藍色地無紋(紙漉きの際の布目あり)の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「持明院百人一首<sup>草子書</sup> 三十五」と表紙左肩に直書きされる。内題は、一丁表に「持明院<sup>百人一首草子書</sup> 三十五」(扉題)と、二丁表に「小倉山莊紙和哥」(巻首題)と記される。奥書等はない。

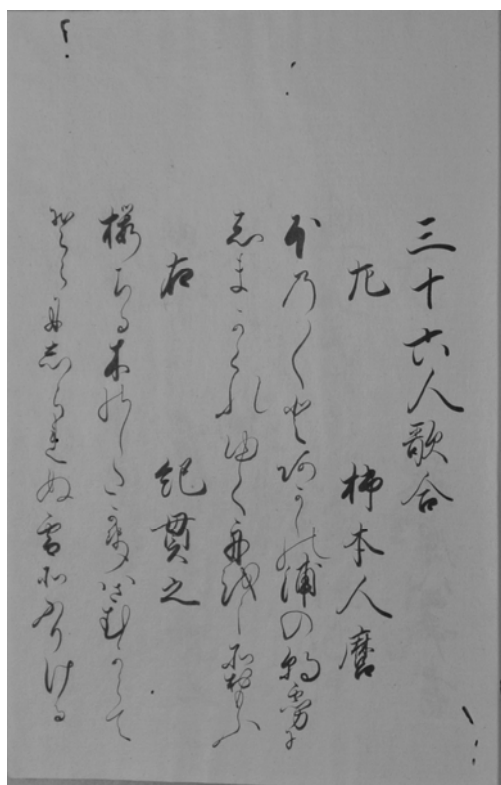
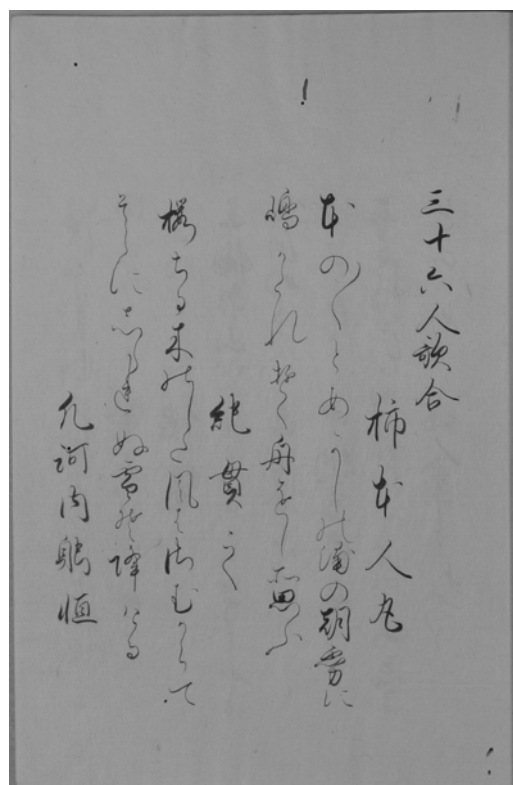
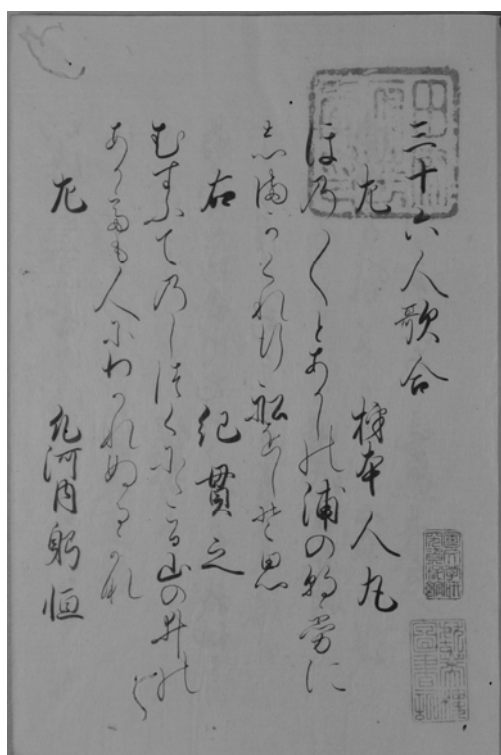


37 草子書三十六人歌合（そうしがきさんじゅうろくにんうたあわせ）

持明院三十六

持明院三十五同様に、『三十六人歌合』の草子の写し。『三十六人歌合』三種（一種は中途）のほか、『女房三十六人歌合』を一部書写する。

写本一冊。表紙は墨色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「三十六人歌合」草子書と表紙左肩に直書きされる。内題は、一丁表に「三十六人うた合 三十六」（扉題）と、二丁表ほかに「三十六人歌合」と記される。巻尾に「正徳五年二月十二日書持明院家門人也藤谷三位為茂親衛中郎将實積」や「女房三十六人歌合」と元の本の奥書や題簽を転記する。その他、「右何も草子へかくの法也、行の数下草等可翫味者歟」との本奥書を記す。

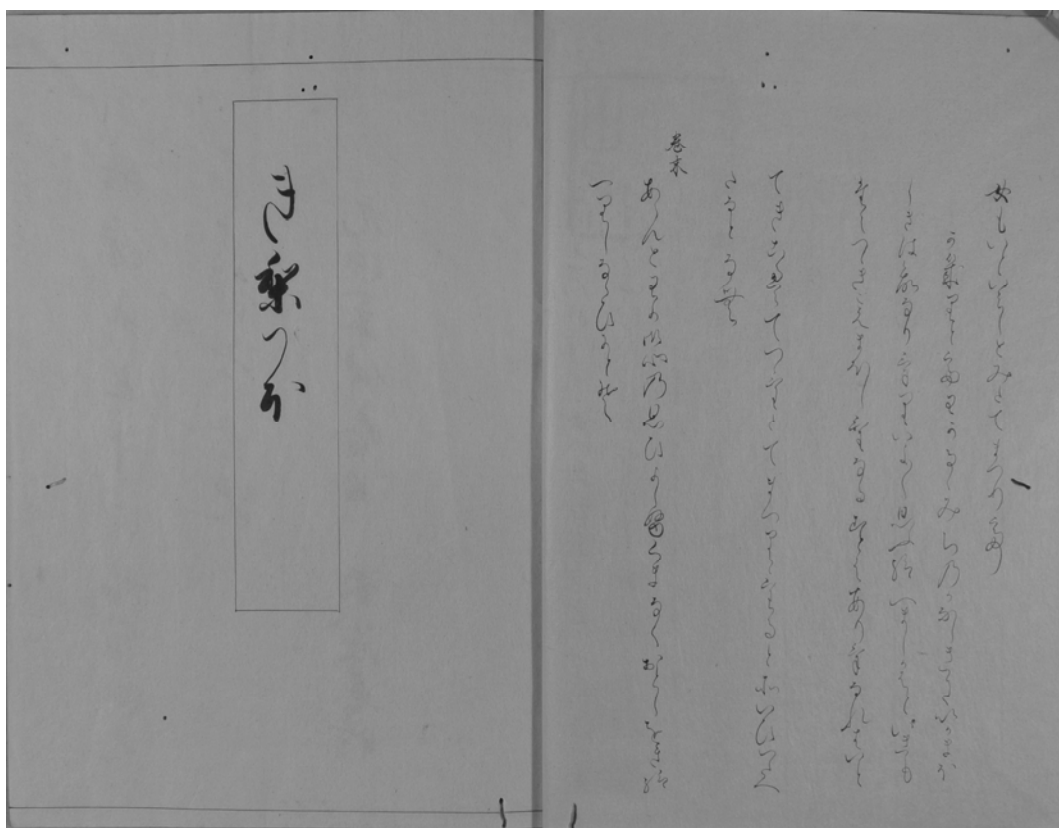
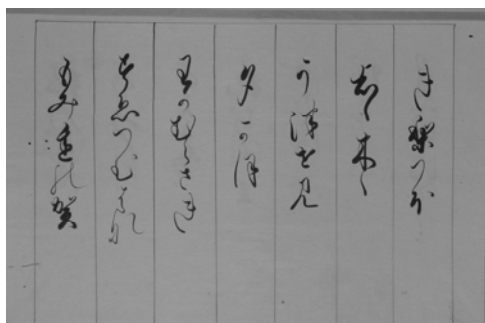


38 源氏物語書法（げんじものがたりしょほう）

持明院三十七

『源氏物語』の草子の雛形。草子の型をとり、初丁や奥書の書き方を示すほか、題簽の書き方や表紙に貼付する位置を示す。その他、各巻の題簽の雛形を記す。

写本一冊。表紙は墨色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「源氏物語書法 持明院三十七」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「源氏物語書法 三十七」（扉題）と記される。巻尾に「物語書法料紙おもてより書出行数偶を用て八行也言葉と哥とのつゝき本のことし夢のうきはし言葉の止所もと草子なし 傳書之赴不違毫末可貴重者也 伊勢物語之外諸物語語皆如斯 尹祥誌之」との本奥書が記されるほか、「此源氏五十四帖官暇之節令染筆者也 元禄二年仲春日 前八座基時」と原本の奥書や題簽を雛形として転記する。

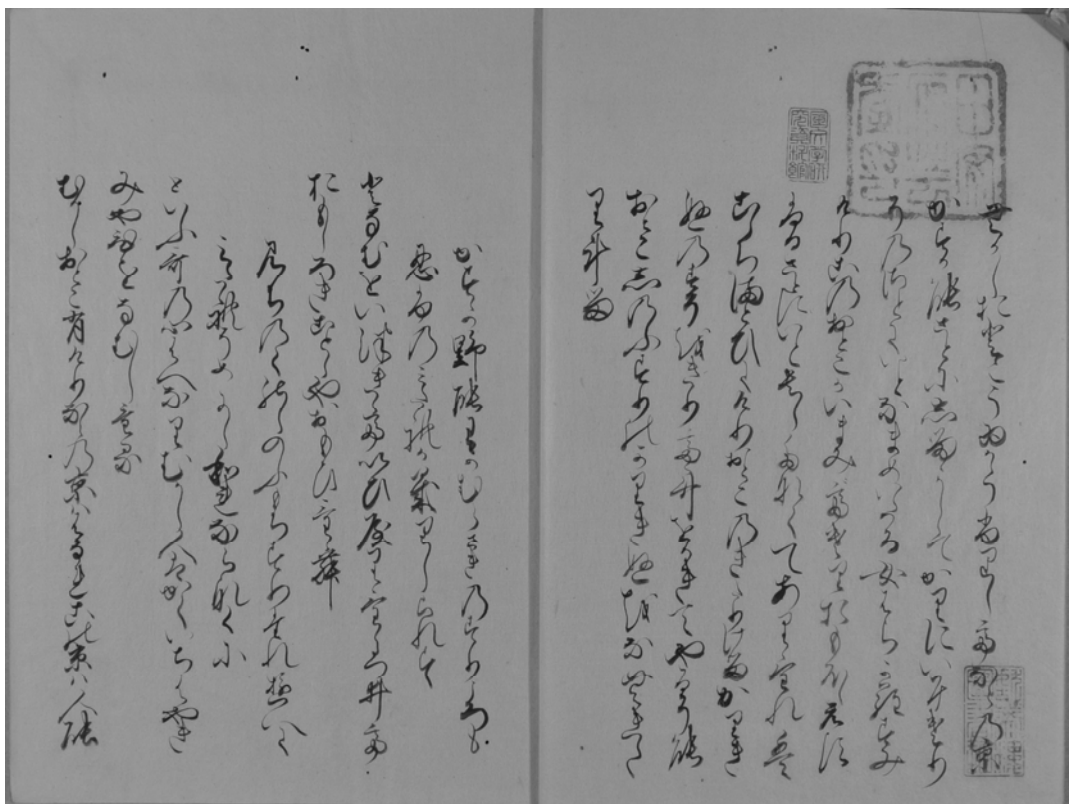


持明院基時の書写した『伊勢物語』の、本文（一部）・奥書・題簽等を雛形（手控え）のために写したもの。巻尾に題簽や書き出し、行数などについて言及している。

写本一冊。表紙は墨色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「伊勢物語」持明院 三十八と表紙左肩に直書きされる。

内題は、「伊勢物語」持明院 卅八（扉題）と記される。巻尾に「傳へて曰伊勢物語にかきり外題は物語の法にをし書出行数等は勅撰の本のとをり但下草には及ふましき哉と云々 此四本何も基時真跡也、可考見」

との識語が記される他、「元禄二年十月日 前八座基時」、「此一冊雖持愚筆難遁依所望令染筆者也 元禄九仲冬日 前中納言基時」、「這伊勢物語故西相基時卿之芳翰也、依所望加奥書畢 寶永元年長月 前參議基輔」と元の本の奥書や題簽が転記される。



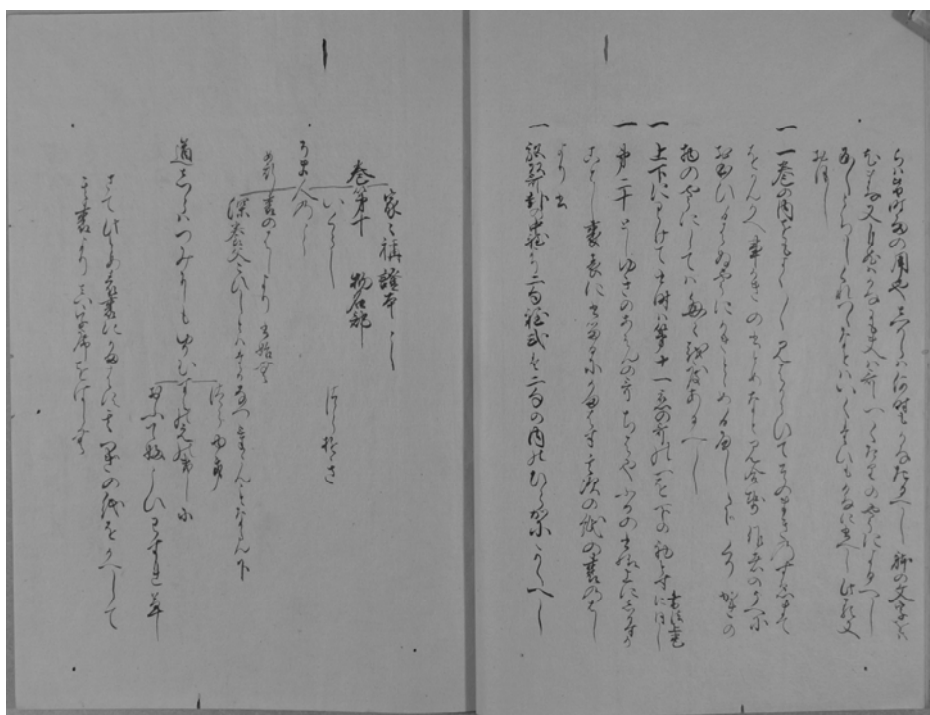
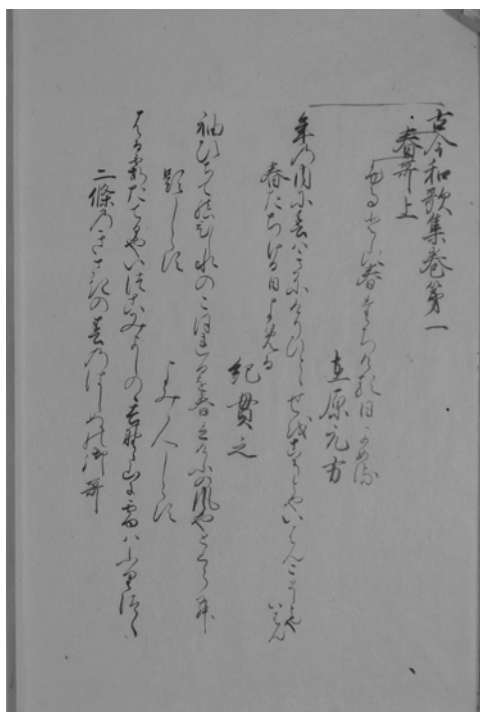
40 勅撰之法（ちよくせんのほう）

持明院三十九

勅撰集の書き方について記した伝書。持明院基定の伝書とされる。

写本一冊。表紙は藍色の吹きつけ染め地に銀泥で格子を描き団扇散らし（型紙吹きつけ、団扇には季節の草木を描く）を描いた紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「勅撰之法」<sup>持明院</sup>三十九」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「勅撰之法 三十九」（扉題）と記されるほか、二丁裏に「古今和歌集巻第一」と元の本の内題が転記される。巻尾に「寛永十八年九月初三日從基定卿奉傳受之 源重章 明和改元上巳前日再寫之 源繁衆」との本奥書が記される。

伝本は、同書名では所蔵はなく異書名で岩瀬文庫等に所蔵される。



41 後柏原院宸筆古今集御書法当流書法（ごかしわばらいんしんびつこ

きんしゅうごしよほうとうりゅうしよほう）

持明院四十

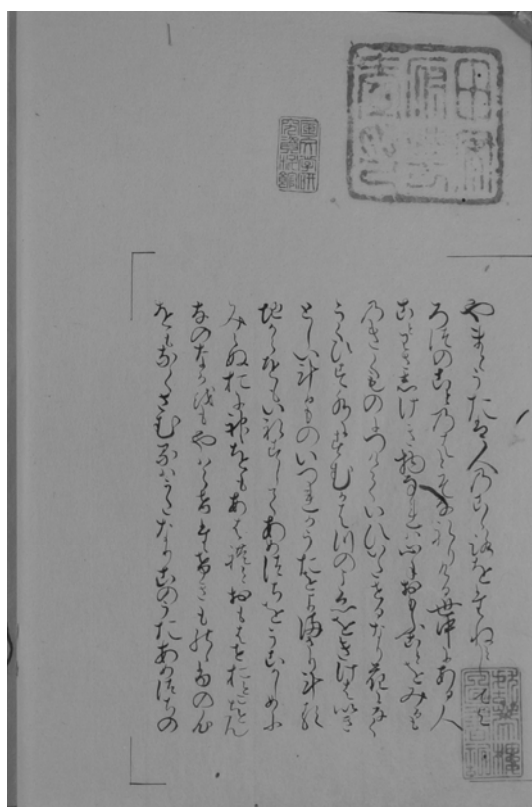
後柏原天皇の書写した『古今和歌集』の書き出し等、歌集書法の雛形として書き写されたもの。少し書写のポイントが記される。

写本一冊。表紙は白茶色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、

料紙は薄様。外題は「古今集御書法<sup>後柏原院宸筆</sup> 四十」と表紙左肩に直書きされ

る。内題は、「古今集御書法<sup>後柏原院宸筆</sup> 四十」（扉題）と記される。奥書等は

ない。



42 二十一代集表題（にじゅういちだいしゅうひょううだい）

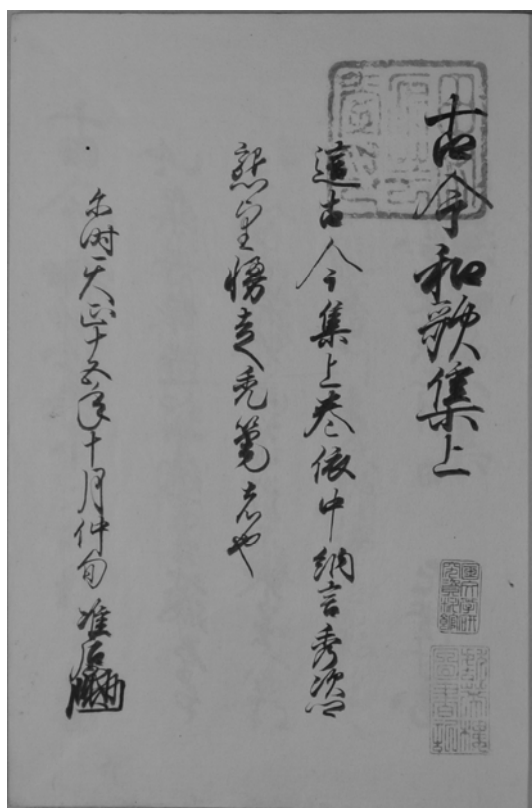
持明院四十一

勅撰集の草子を書く際の雛形として、天正十五年（一五八七）から十八年（一五九〇）に書写された二十一代集（勅撰集）の表題、および奥書を転写したもの。

写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料

紙は薄様。外題は「二十一代集表題<sup>持明院</sup> 四十一」と表紙左肩に直書きさ

れる。内題はない。本書の奥書はない。

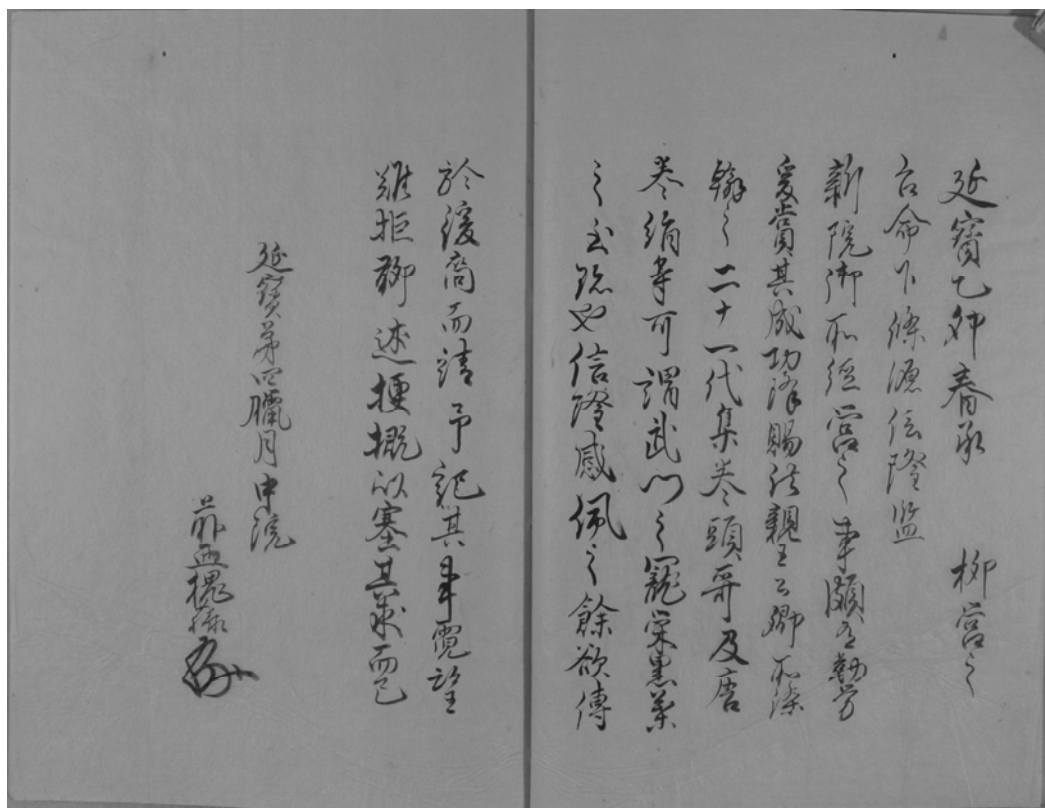
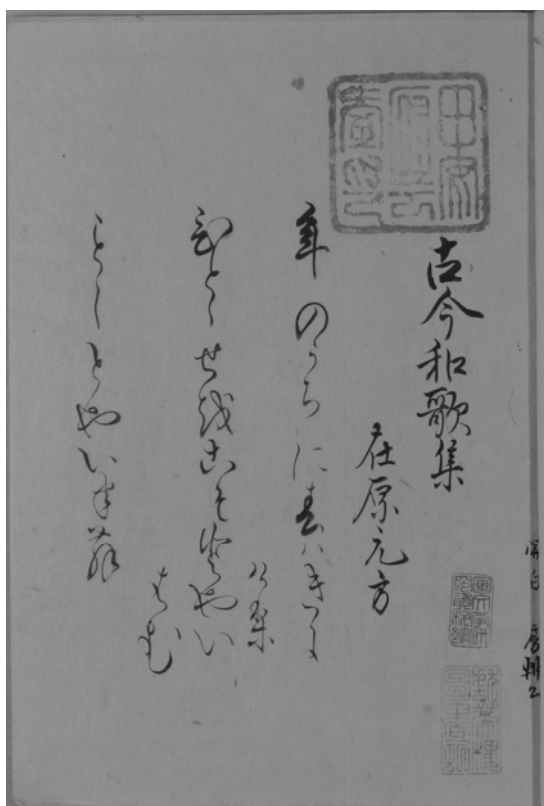


43 二十一代集巻頭和歌伝書合書

(にじゅういちだいしゅうかんとわかでんしよあいがき)

持明院四十二

二十一代集の冒頭の各一首を散らし書きした雛型。ノドの部分に名前が記されていることから元は寄合書きされた色紙形の雛型であることがわかる。写本一冊。表紙は白色地に天地藍の打曇文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「二十一代集巻頭和歌傳書合書」持明院 四十二と表紙左肩に直書きされる。内題は、「二十一代集巻頭和哥傳書合書」(扉題し、「二十一代集巻頭和哥」(尾題)と記される。尾題前に「延寶第四臘月中浣 前亜槐藤(花押)」、巻尾に「右以當家極秘々傳書依 勅命殿下蓬府月卿所被染翰也、但巻頭及へ小大君、為定卿貫之、為世卿」の哥書法少々有替事、可為 勅命者也、為後證記之畢」と二種の本奥書が記される。



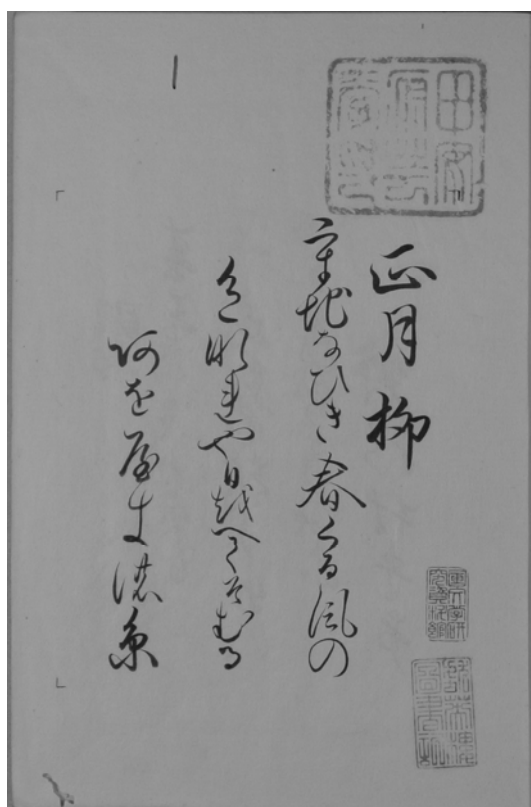
44 十二月花鳥手鑑和歌色紙形

(じゅうにがつかちようてかがみわかししがた) 持明院四十三

持明院三十四同様に、藤原定家『十二月花鳥和歌』を書写したもの。

しかし、本書は寄合書きされた色紙形を書写している様子が巻尾の目録によつて確認できる。書は鷹司政熙をはじめとする十二名が各月を記しており、画は鶴澤派・吉田元陳が描いたとする。ただし絵の写しはない。

写本一冊。表紙は朱色地に水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「十二月花鳥手鑑和歌色紙形 四十三」と表紙左肩に直書きされる。内題はない。奥書等もない。



45 堯空御筆写八景和歌色紙形従持明院家到来(ぎようくうおんひつ

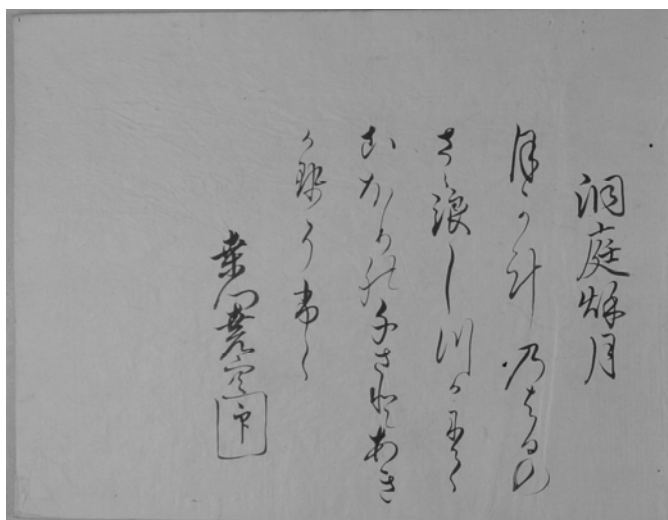
しゃはつけいわかししがたじみよういんけよりとうらい)

持明院四十四

三条西実隆の書写した瀟湘八景和歌を転写したもの。

写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「八景和歌色紙形 四十四」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「八景和歌色紙形 持明院家到来」と記される。

奥書等はない。

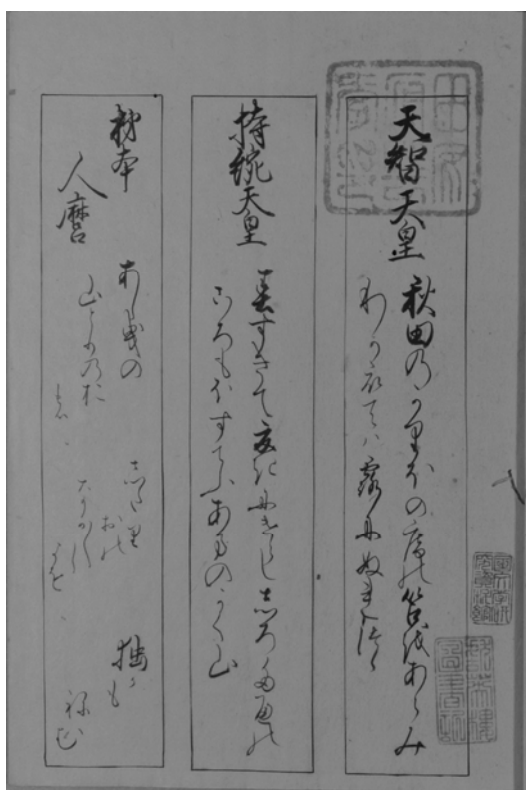




46 百体短冊散形（ひやくたいたんぎくちらしがた） 持明院四十五

持明院二十五・二十六等と同種の短冊の雛形。半丁三枚ずつ、短冊の型をとり、『百人一首』を各首散らし書きするが他本とは異なる。奥書より持明院基孝の手によるものの写しと思しい。

写本一冊。表紙は白色地に天地藍の打曇文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「百体短尺散形」持明院四十五」と表紙左肩に直書きされる（書き誤りか、整理番号は別紙墨書が貼付される）。内題はない。巻尾に「此百體短尺散形能書家之秘事也、右之中芦手之散者百体之外狼不可書之、可守先師教戒、穴賢 慶長八年九月日中納言藤原基孝」、「這一巻從持明院前大納言基定卿尹祥高祖父源重章奉相傳之秘書也曾不可出書窓之外 入木道相承源尹祥誌」と二種の本奥書が記される。

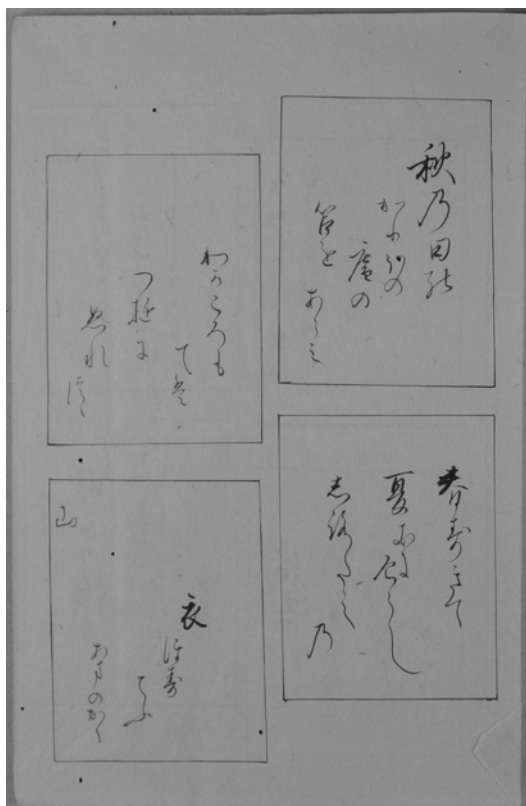


47 百人一首歌加留多烏丸光広卿書（ひやくにんいつしゅうたがるとか  
らすまるみつひろきょうしよ） 持明院四十七

『百人一首』かるたの雛形。上の句・下の句に分け各首散らし書きされるが、挿絵等はない。札だけではなく、古筆了伴の極札も転写されており、それによれば烏丸光広の筆跡とする。

写本一冊。表紙は白色地に藍の摺り出し文様（月と雲）を施した紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「百人一首歌加留多」烏丸光広卿書四十七」と表紙左肩に直書きされる。内題はない。奥書等はない。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。





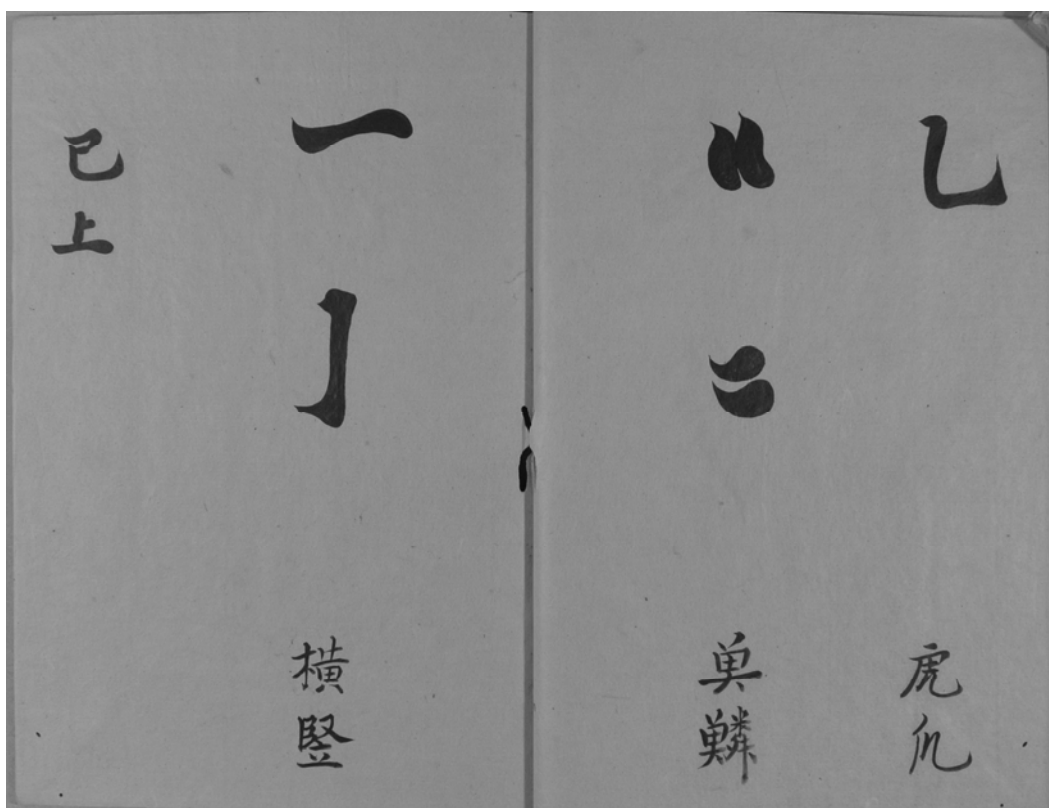
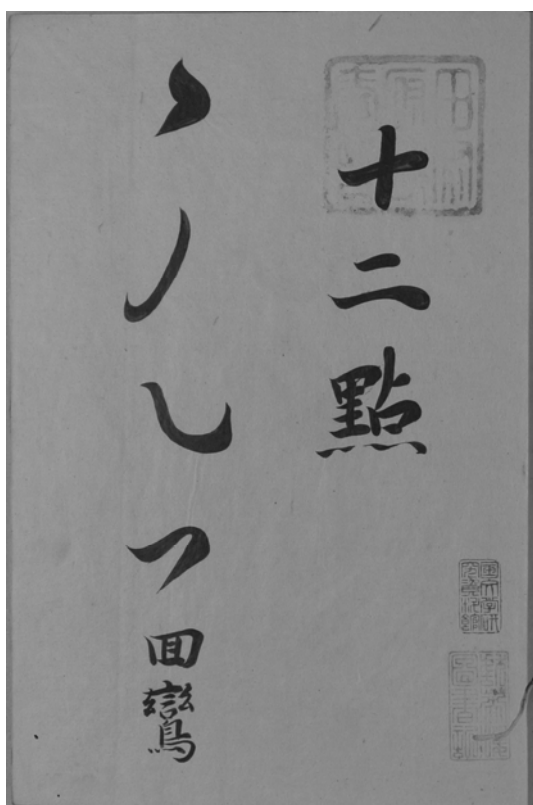
49 十二点使筆法（じゅうにてんしひつほう）

持明院四十九

点画十二点を示したもの。内題の注記によって、持明院基時卿の書写  
 と思しい。

写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱・金の墨流し文様の紙表紙、見  
 返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「十二点使筆法 持明院四十九」と表  
 紙左肩に直書きされる。内題は、「十二点使筆法 持明院基時卿筆寫」（扉題）  
 と記される。奥書等はない。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。



50 世尊寺家入木道伝来持明院家誓約写附女誓約并鷹事

(せそんじけじゅほくどうでんらいじみょういんけせいやくのうつ  
しつけたりおんなせいやくならびにたかのこと)

書法相伝の誓約書を転写したもの。

持明院五十

写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱・金の墨流し文様の紙表紙、見

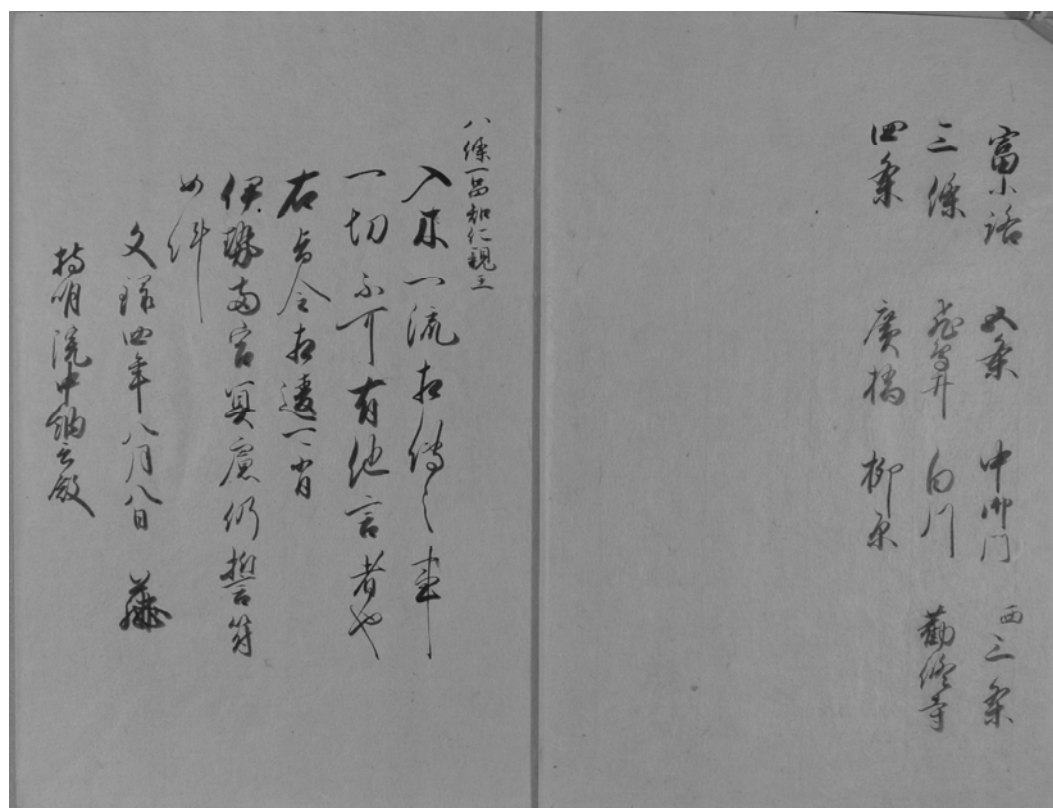
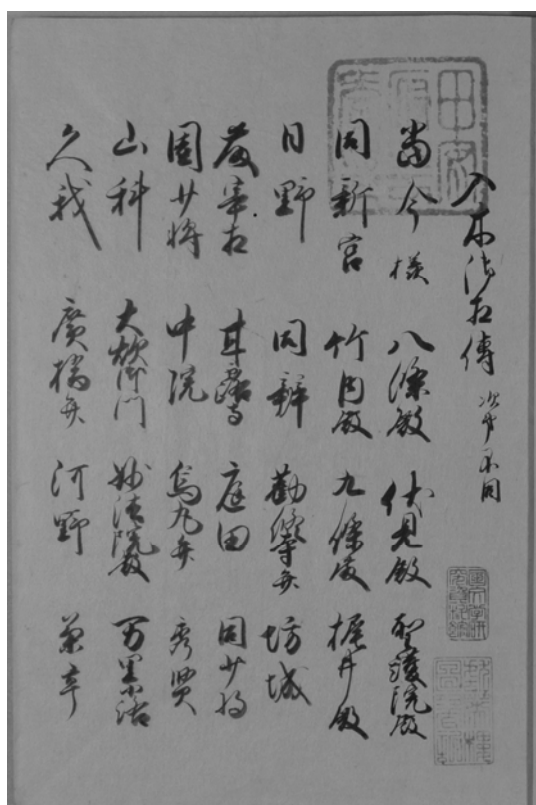
返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「持明院家誓約寫 世尊寺家入木道傳來 附女誓約并鷹事 五十」

と表紙左肩に直書きされる。内題は、「持明院家誓約寫 世尊寺家入木道傳來 附女誓約并鷹事」(扉題)

と記されるほか、二丁表に「入木御相傳」(巻首題)。巻尾に「右誓約文

數通持明院殿以本紙令書写畢 橘経亮」と橘本経亮の本奥書が記され

る。



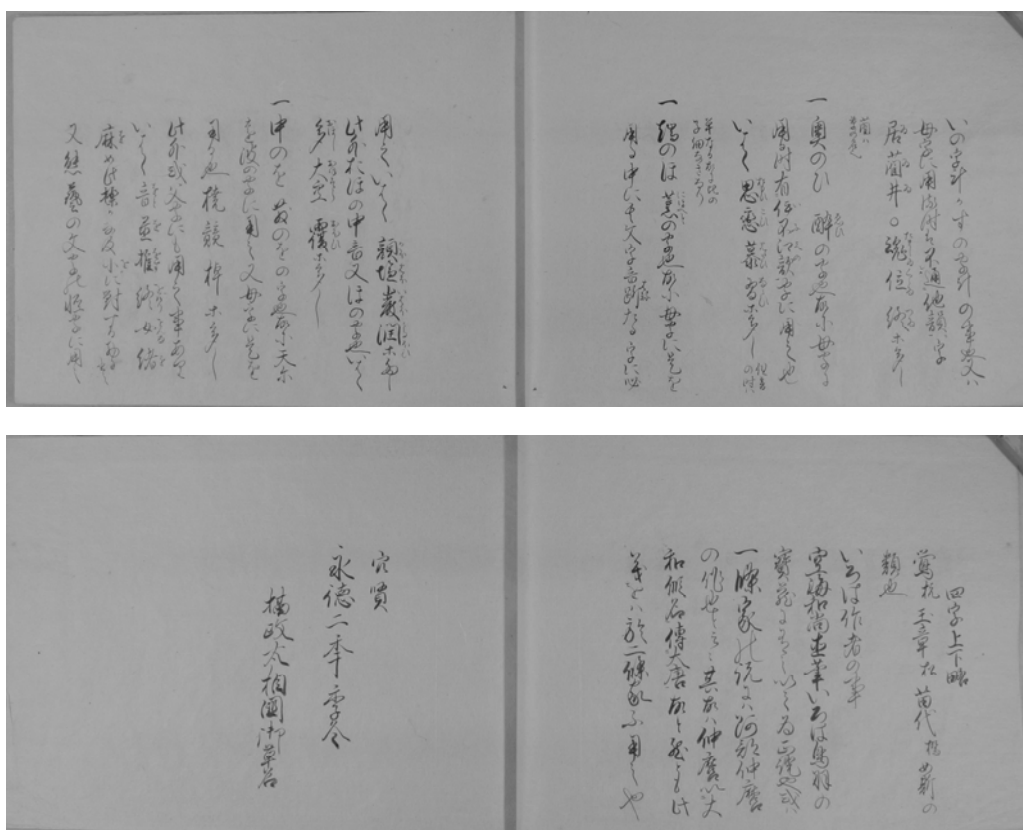
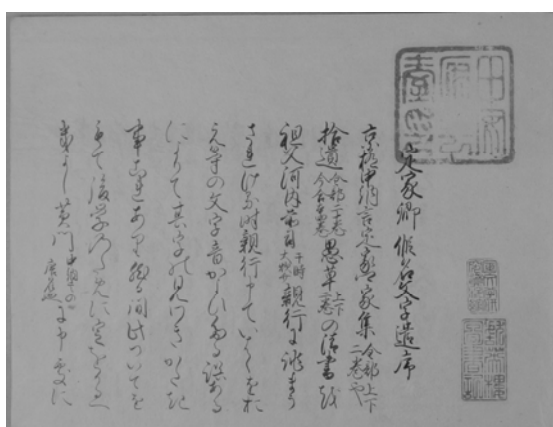
51 後普光院御抄（こふこういんみしう）

持明院五十一

『定家卿假名文字遣』の写し。伝本は数種あるが、宮内庁書陵部蔵本（206・889）と近似する。

写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「後普光院御抄 持明院 五十一」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「後普光院御抄 五十一（扉題）」と記されるほか、二丁表に「定家卿假名文字遣序（巻首題）」と記される。巻尾に「穴賢 永徳二年季冬 摂政太相國御草名」と本奥書が記される。

翻刻が、『語学叢書』（二）や『国語学大系』（九）に収載される。<sup>②</sup>



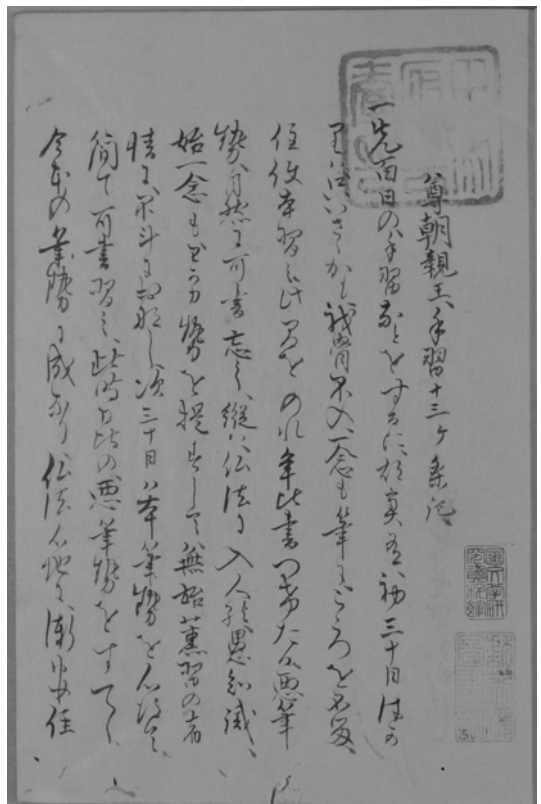
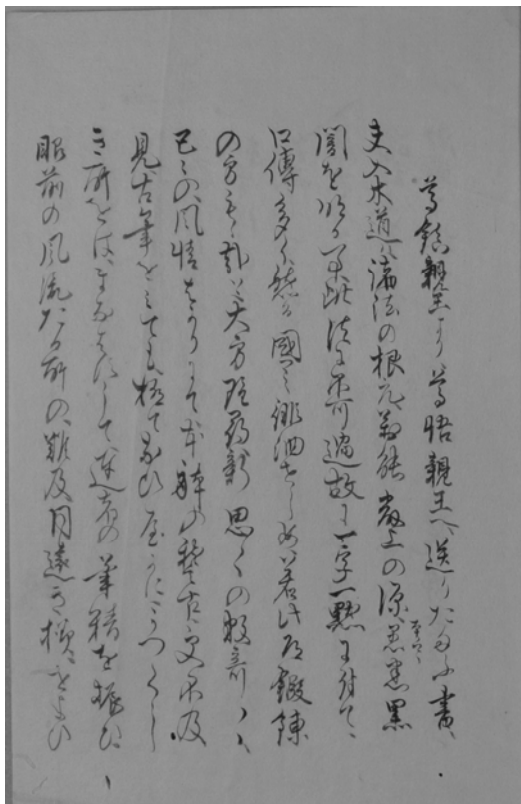
52 尊朝十三箇条 尊鎮御消息(そんちようじゆうにかじようそんちんこ  
しょうそく) 持明院五十二

青蓮院流の尊朝法親王の著作とするが、内容は、尊円法親王『入木道十三箇条』に、尊朝法親王の往来手本を付したものの、『皇室御撰之研究』には「手習十三ヶ条記」として言及される<sup>(10)</sup>。

写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱・金の墨流し文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「十三箇条／御消息」<sup>尊朝</sup> 持明院 五十二

と表紙左肩に直書きされる。内題は、「十三箇条／御消息」(扉題)と記されるほか、二丁表に「尊朝親王手習十三ヶ条記」、六丁表に「尊鎮親王より尊悟親王へ送りとまふ書」とそれぞれ記される。「尊朝親王手習十三ヶ条記」末尾に「依屋山隼人佑執心雖為秘抄十三ヶ条令 悉授畢 天正十六曆夷則中旬 臨池末流(花押) 親王」と、巻尾に「十三箇条及尊鎮親王御書或入木道家秘藏之本 一日借用書写す 享和紀元辛酉九月七日夜 経亮」との本奥書がそれぞれ記される。奥書の後に「尊朝 尊鎮は青蓮院／覚恕は曼殊院」との注記が記される。

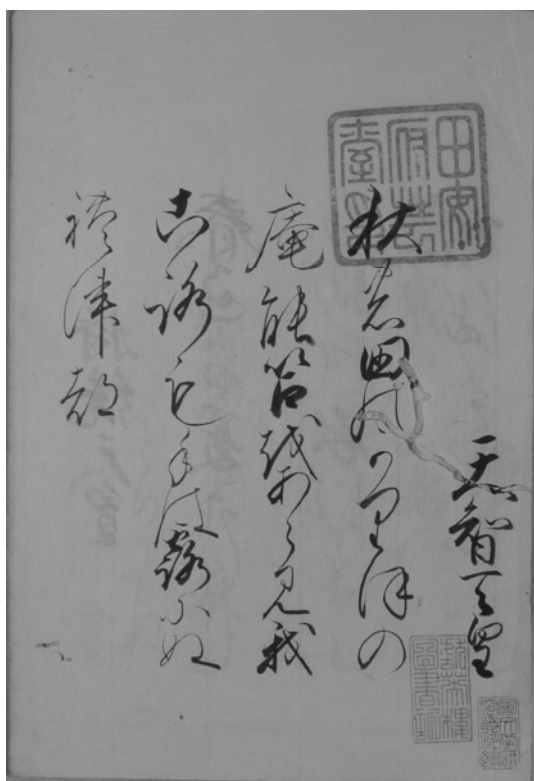
伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本と思しいが、『入木道十三箇条』としては、田藩文庫世尊寺二十八のほか、宮内庁書陵部・センチュリー文化財団に所蔵される。金子に田藩文庫本・書陵部本に関する言及・翻刻あり<sup>(11)</sup>。



53 持明院百体色紙散形異本（じみよういんひやくたいしきしちらしがたいほん）  
持明院五十三

『百人一首』を題材にした色紙形の散らし形の雛形。「百体色紙形」（持明院十六・十七・十八・十九）に見られる散らし形とも相違する。

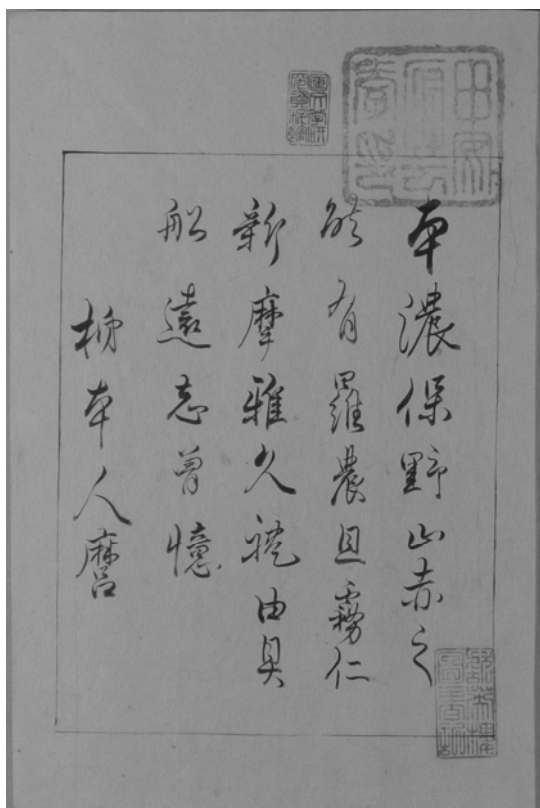
写本一冊。表紙は白茶色地に水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「百体色紙形散形<sup>持明院</sup>異本 五十三」と表紙左肩に直書きされる。内題はない。奥書等もない。



54 基規卿散形三十六人歌合（もとのりききょうちらしがたさんじゅうろくにんうたあわせ）  
持明院五十四

公任撰『三十六人歌合』を題材にした散らし形の雛形。書名より持明院基規の手によるものと思しい。歌人名が左方は左側に、右方は右側に書かれているので、屏風に貼られた色紙形の写しの可能性も指摘できる。

写本一冊。表紙は白色地に天地藍の打曇文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「三十六人歌合<sup>基規卿散形</sup> 持明院 五十四」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「三十六人歌合」（扉題）と記される。奥書等はない。



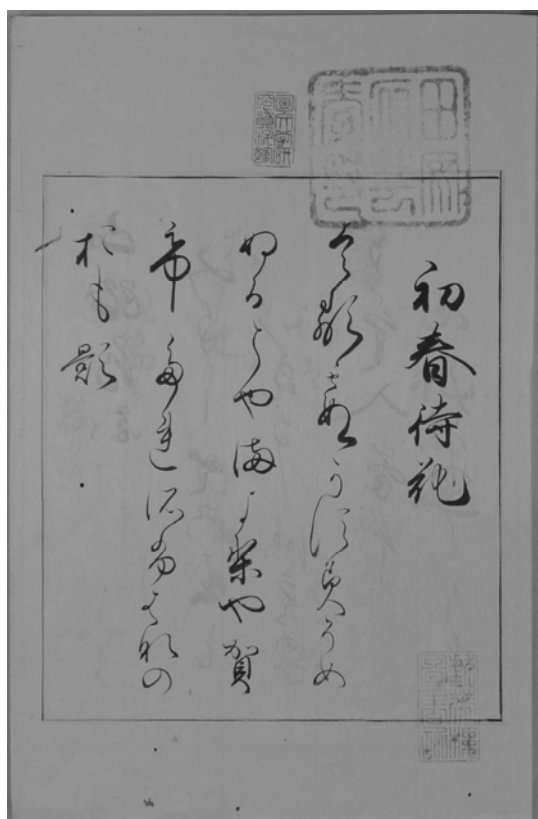


55 花月恋五十体色紙（はなつきこいこじったいしきし）持明院五十五

半丁に一枚ずつ色紙形の型をとり、花・月・恋の和歌五十首を様々な散らし形に記した雛形。

写本一冊。表紙は白茶色地（紙漉きの際の布目）に松を雲母摺りした紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は楮紙。外題は「花月恋五十體色紙」持明院五十五と表紙左肩に直書きされる。内題は、題簽のような枠罫が引かれた中に「花月恋五十體色紙」（扉題）と記される。奥書等はない。

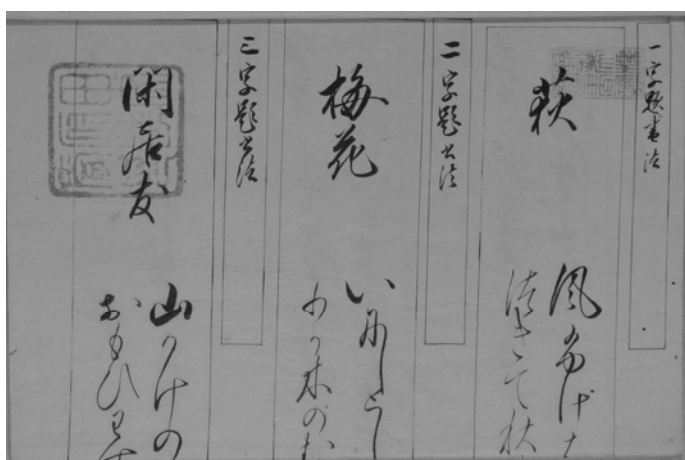
伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」では、宮内庁書陵部にも同書名の資料が所蔵されるが、同内容は未確認。



56 短冊題書法（たんざくだいしやほう）持明院五十六

一丁表裏用いて、短冊の書法を示したもの（雛形）。一字題、二字題、三字題、四字題、五字題、仮字題について雛形をとどめる。

写本一冊。表紙は白茶色地に水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「短冊題書法」持明院五十六と表紙左肩に直書きされる。内題はない。奥書等はない。





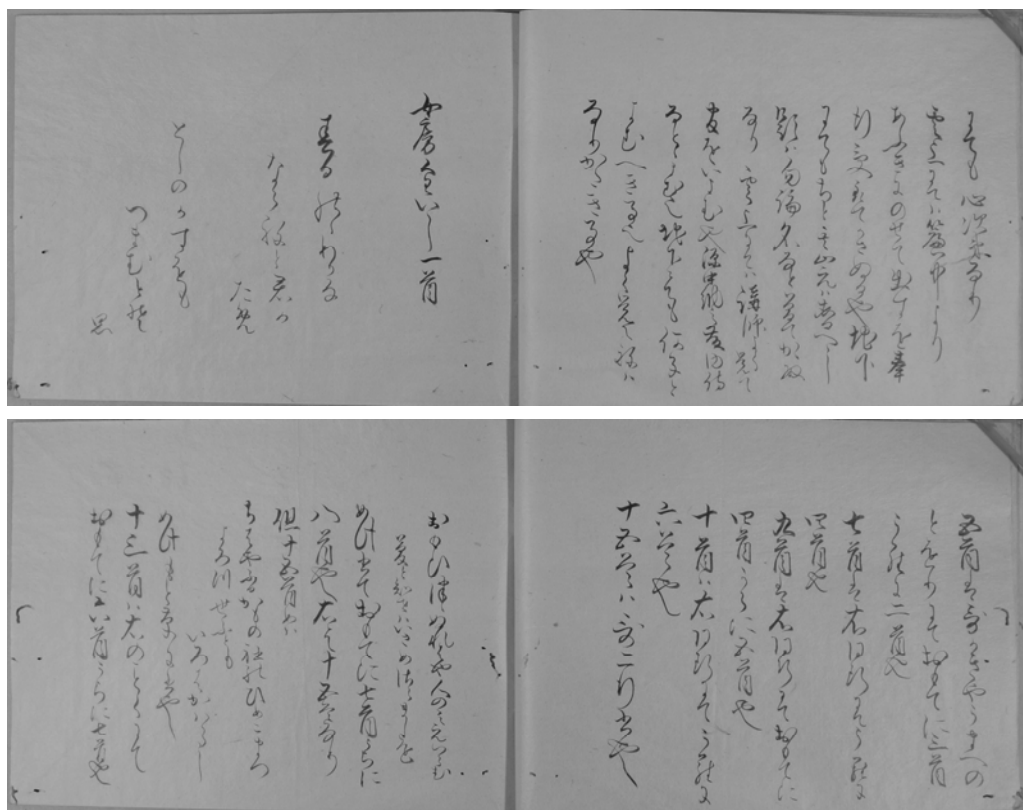
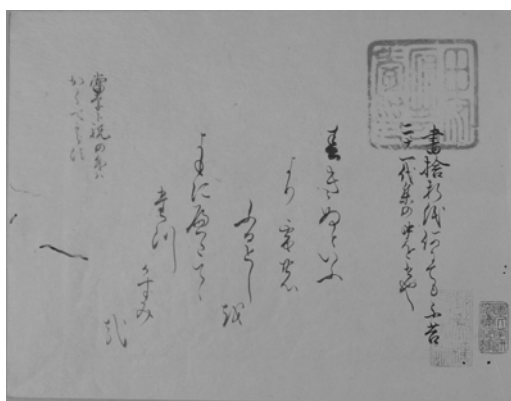
57 持明院書捨女房懷紙（じみょういんかきすてにようぼうかいし）

持明院五十七・五十八

女房の書捨料紙の作法について記す。後半に一首、二首、三首書く場合の雛形に加え、五首以上書く場合について言及する。

写本一冊。表紙は白茶色地に水玉文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「持明院 女房懷紙 五十七八」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「持明院〈書捨／女房くわいし〉 五十七八」（扉題）と記される。巻尾に「右一巻 松山少将君奉傳之畢 寛政七年 三月 日尹祥」と本奥書が記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。女房懷紙に関する伝書には、「女房懷紙書法」「女房懷紙短冊書様之事」「女房懷紙散形」などが確認される。

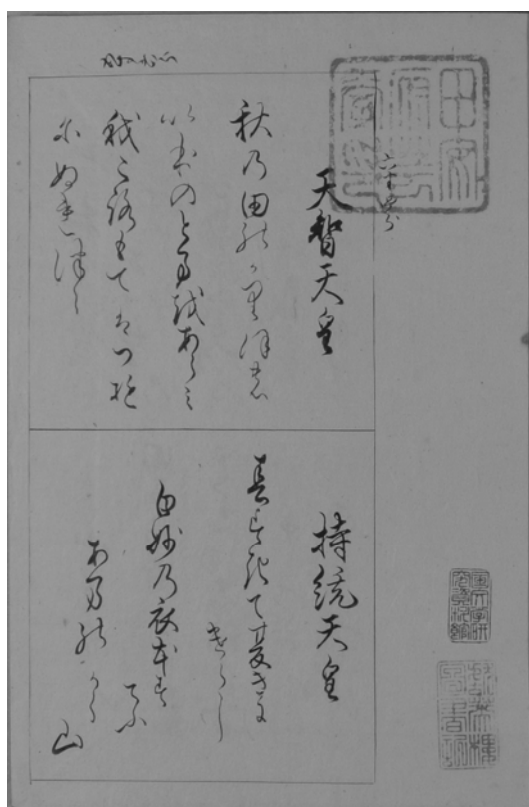


58 持明院入木道色紙形（じみよういんじゆほくどうしきがた）

持明院五十九

『百人一首』を色紙形に記した雛形。多少の筆圧（線質）の違いはあれど、持明院十九と全く同一の雛形。

写本一冊。表紙は白色地に天地藍の打曇文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「<sup>持明院</sup>入木道色紙形 五十九」と表紙左肩に直書きされる。内題はない。巻尾に「入木道色紙形依畠山匠作御所望令染筆者也 参議藤（花押）」と本奥書が記される。



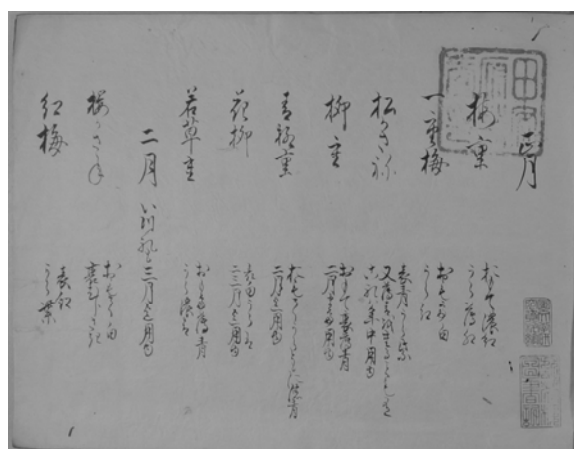
59 持明院女房懷紙色重（じみよういんにようぼうかいしいろがさね）

持明院六十

懷紙の色重ねについて記した伝書。

写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱・金の墨流し文様の紙表紙、見返しは楮紙（一丁目は共紙）、料紙は薄様（二丁目以降）。外題は「<sup>持明院</sup>持明院女房懷紙色重 六十」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「<sup>持明院</sup>持明院女房懷紙色重 六十」（扉題）と記される。奥書等はない。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。歌学書に「懷紙色重」（東洋大学稲葉文庫）という資料も確認されるが、関係性は不明。

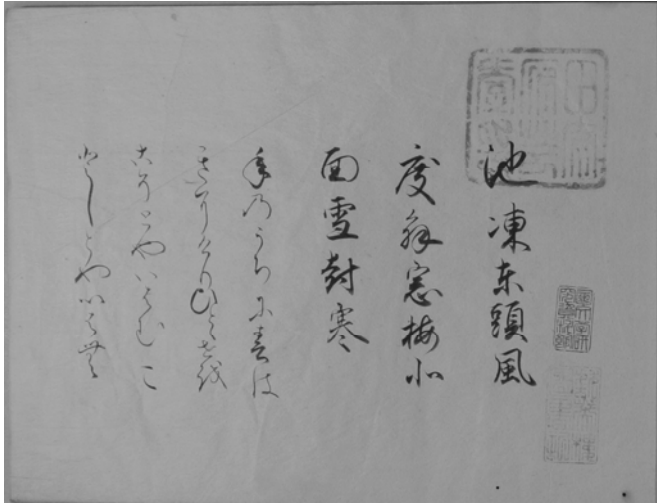


60 詩歌色紙形（しいかしきしがた）

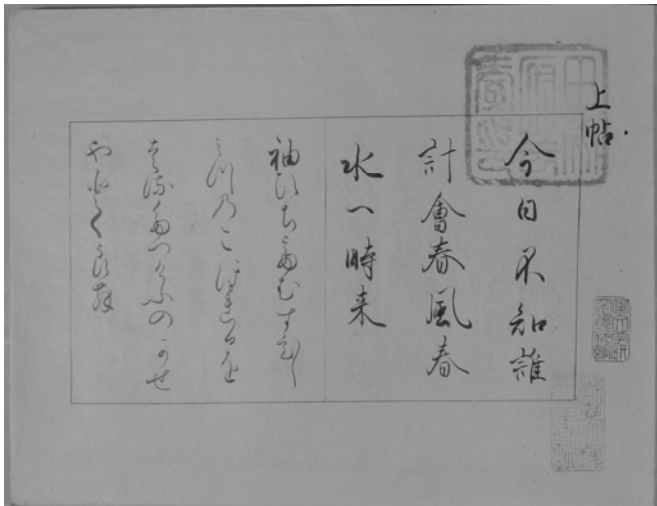
持明院六十一

様々な漢詩・和歌を題材とした色紙形の雛形。上巻・下巻ともに、半丁に二紙ずつ並べて揮毫されているが、上巻は界線なく、下巻は界線が引かれている。世尊寺三十四にも同書名が確認されるが、内容は異なる。

写本二冊。上・下ともに、表紙は朱色地に水玉文様の紙表紙、見返しは楮紙（一丁目は其紙）、料紙は薄様（二丁目以降）。外題は「詩歌色紙形 持明院六十一（上）（下）」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「詩歌色紙



上巻



下巻

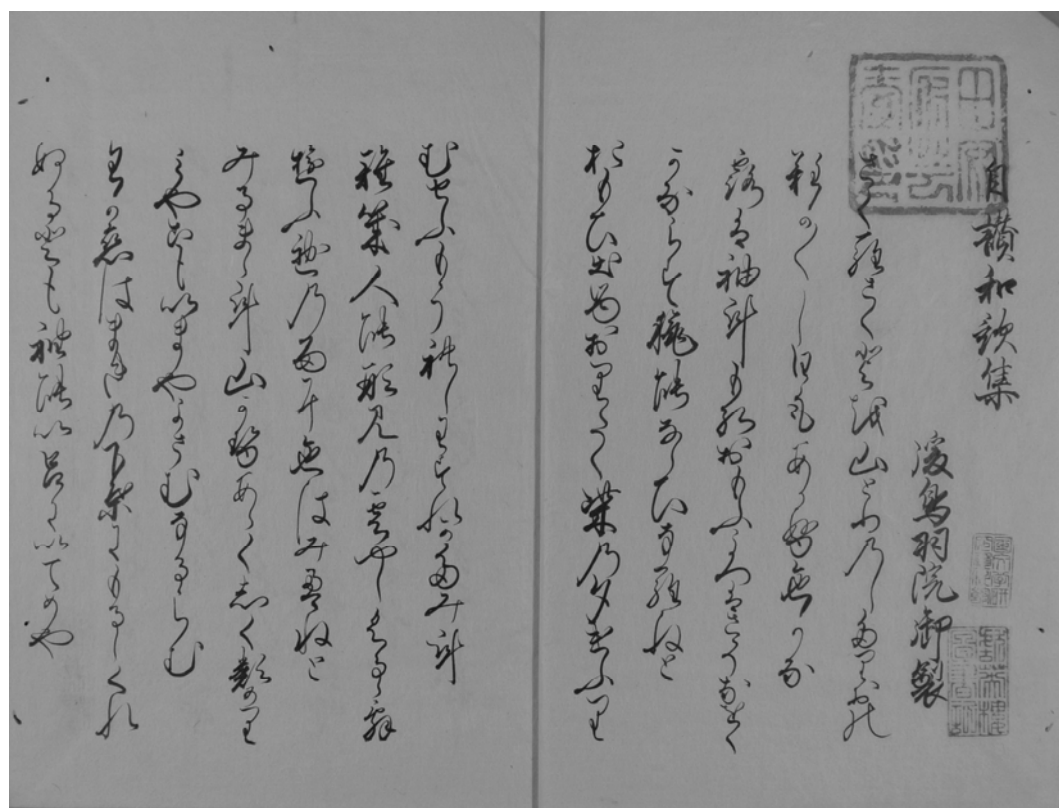
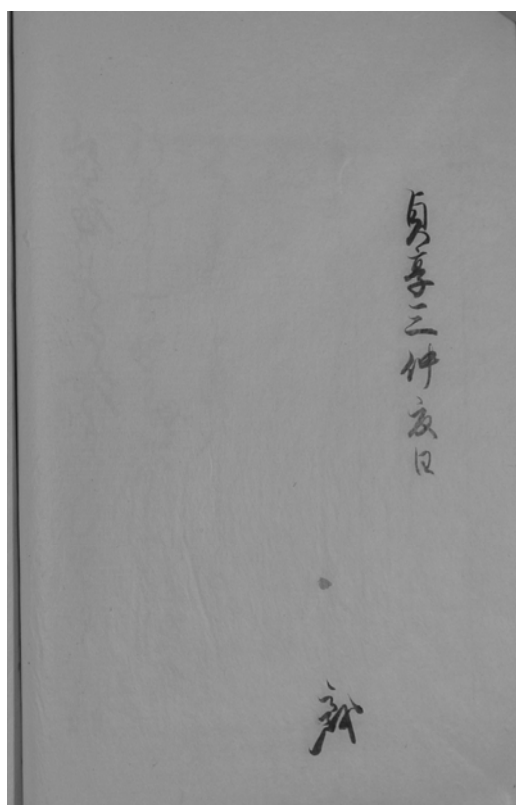
形 六十一（六十二上）（扉題）とそれぞれ記される。上巻巻尾に「右詩歌色帋形文字配墨継等心得而可書之 藤（花押）」、「右入木道傳授之一巻必不可有他見、彼背此書者可被蒙違誓約之罰者也仍如件 源公風謹誌之」、下巻巻尾に「右借請或人秘本早卒馳筆重而可清書者也 從三位藤（花押）」、「這一巻持明院家之秘本也令一校了 藤（花押）」とそれぞれ二種の本奥書が記される。

伝本は、東北大学に所蔵されるが、同一内容かは未確認。

後鳥羽院撰『自讃歌』の貞享三年（一六八六）の写本。「自讃歌集」「自讃倭歌集」等とも。注釈書も多くあるが、本書には注釈等の書き入れはなく、本文のみ。序はなく、後鳥羽院の御製から始まる。

写本一冊。表紙は白色地に藍の摺り模様（月・雲）の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「自讃和歌集」持明院六十二上と表紙左肩に直書きされる。内題は「自讃和歌集」（巻首題）と記される。巻尾に「貞享三仲夏日（花押）」と本奥書が記される。

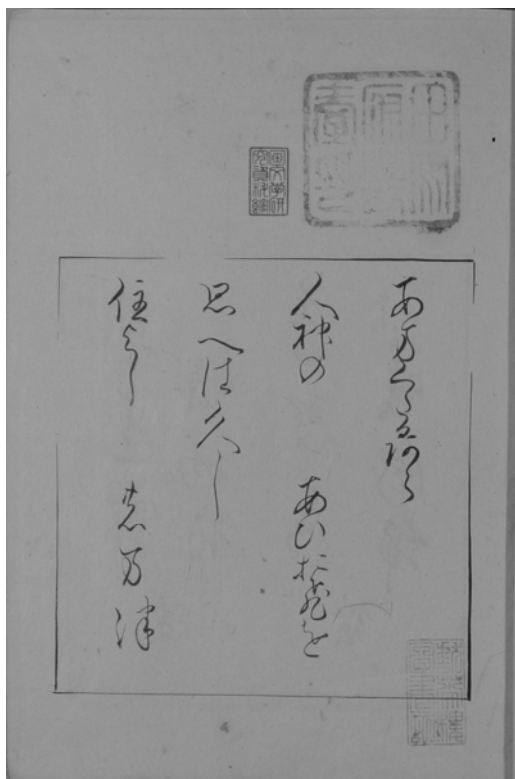
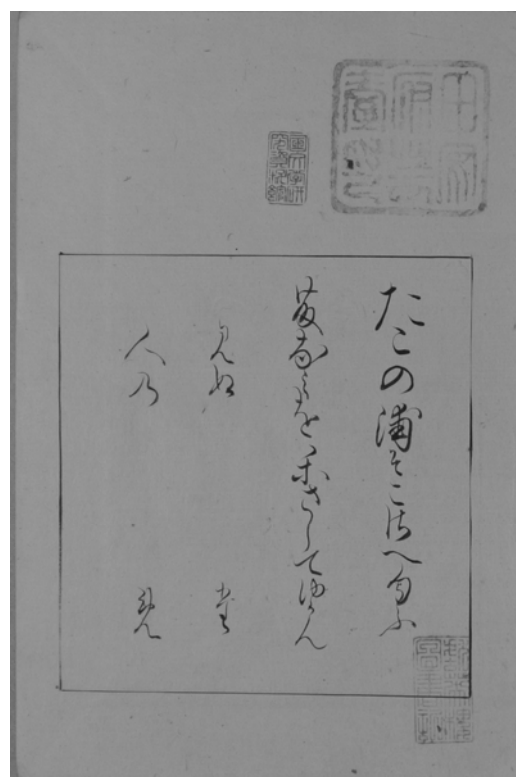
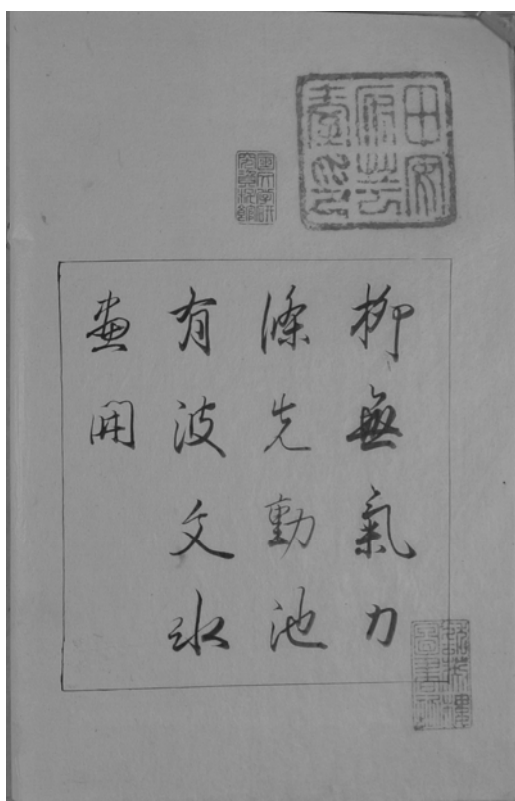
伝本は、京都大学のほか多くの諸本があり、序欠本では島原松平文庫本が知られる。諸本間の異同も多い。



62 持明院色紙ちらし（じみょういんしきしらし） 持明院六十二下

半丁に一枚ずつ色紙形の型をとり、詩歌の散らし形を示した雛形。第三冊目の本奥書によれば、持明院基時の手によるものとする。

写本三冊。三冊とも表紙は白色地に藍の摺り模様（雲・波）の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「持明院色紙ちらし 六十二下（三）」。と表紙左肩に直書きされる。内題は「持明院へしきし／ちらし」六十二下（三）とそれぞれ記される。下巻第三冊目の巻尾に「右此一帖百余鉢模様者持明院前大納言基時卿御直傳之趣令相傳之、各認様之口傳尽記之者也、後來以為範筆勿捨筆意深甚之旨云尔 正徳六<sup>丙</sup>申年 四月廿五日 藤（花押）」「右一卷尔 松山少将君奉傳之畢 寛政九年五月良辰尹祥」と二種の本奥書が記される。

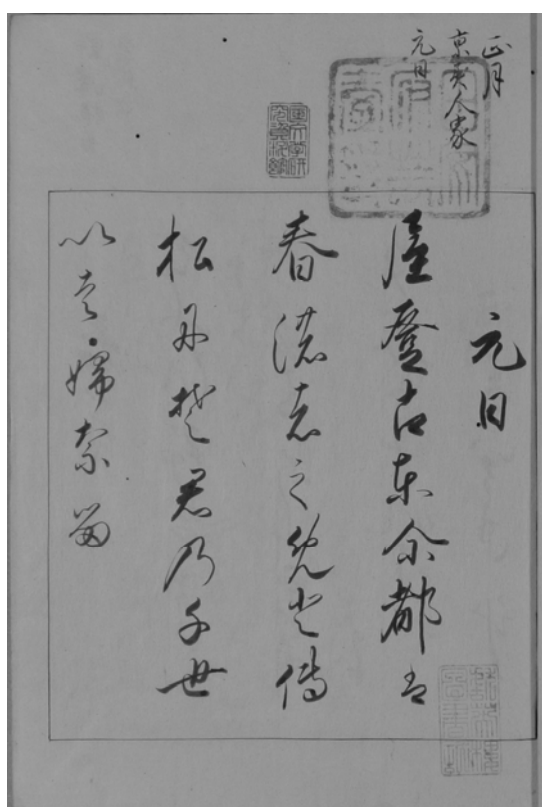


63 女御入内色紙形ちらし（ようごじゅだいしきがたちらし）

持明院六十三

寛喜元年（一二二九）十一月十六日に、九条道家の女・罇子（一二〇九〜一二三三）が後堀河天皇の女御として入内した際の屏風の色紙形を書写したものの写し。識語によれば、持明院基時の直筆とする。

写本一冊。表紙は白茶色地に水玉文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「色紙形ちらし」<sup>女御入内</sup>と表紙左肩に直書きされる。内題は、「色紙形ちらし」<sup>女御入内</sup>六十四（扉題）と記される。色紙形末に「寛喜元十一月女御入内御屏風之和歌頭 持明院基時卿直筆令書写畢」との本奥書が記される。

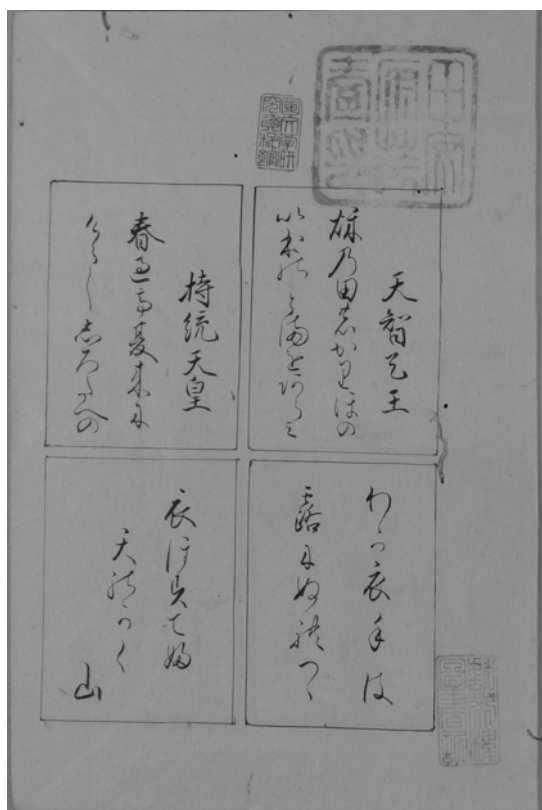


64 持明院歌賀留多（じみょういんうたかると）

持明院六十四

百人一首かるたの雛形。半丁に四枚ずつかるたの型をとり、上の句・下の句に分けて揮毫される。歌仙絵等はない。持明院六十五・六十七とも散らし形は異なる。

写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「持明院歌賀留多」<sup>歌賀留多</sup>六十四と表紙左肩に直書きされる。内題は「持明院」<sup>歌賀留多</sup>六十四と記される。巻尾に「右一卷 松山少将君奉傳之畢 寛政七年十二月日尹祥」と本奥書が記される。

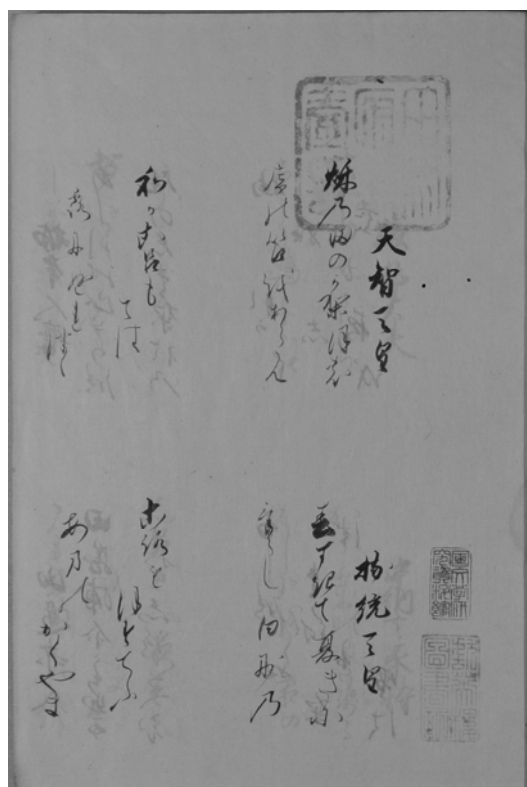
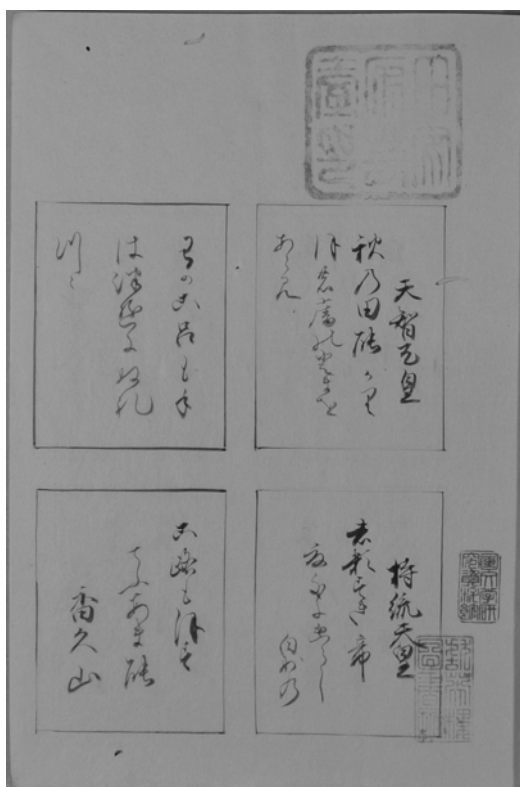


65 歌嘉留多（うたかるた）

持明院六十五

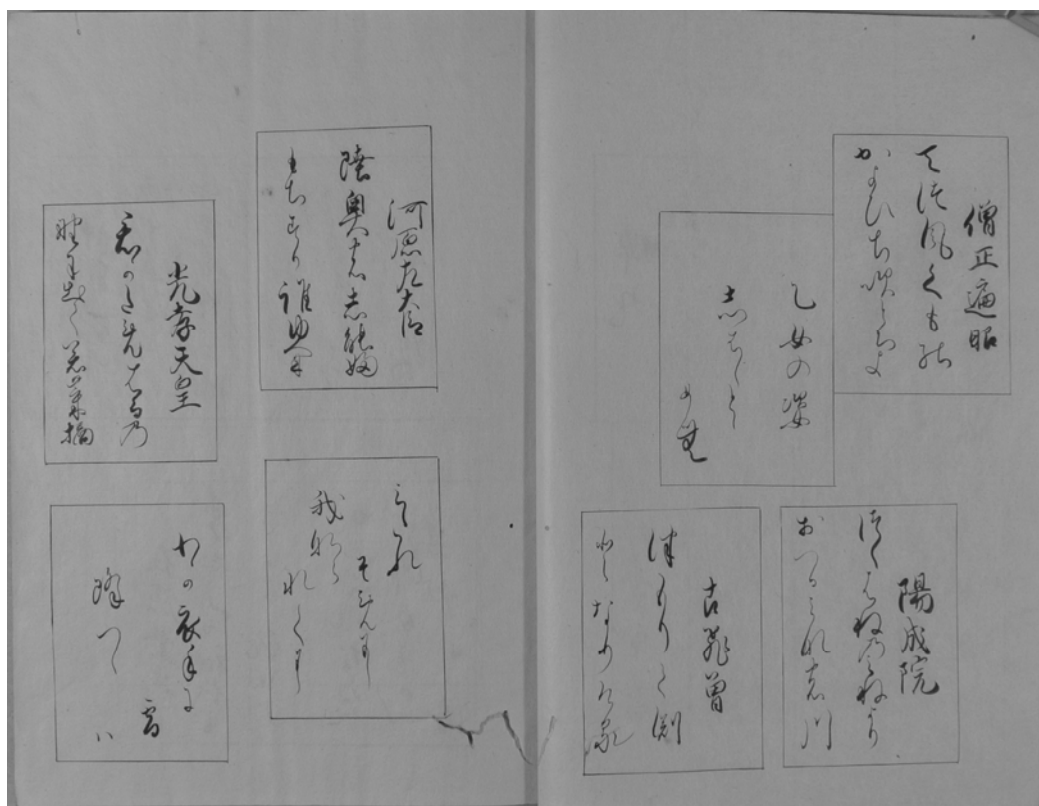
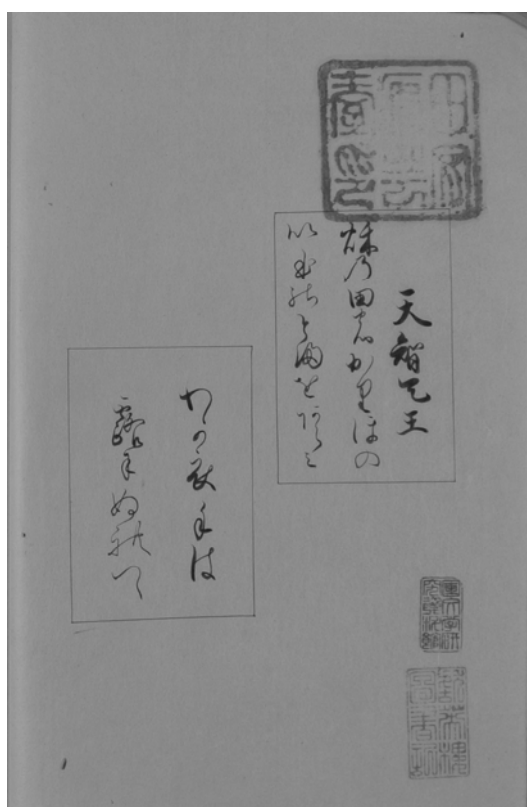
百人一首かるたの雛形。半丁に四枚ずつかるたの型がとられ、上の句・下の句に分けて揮毫される。歌仙絵等はない。それぞれの本奥書により、上巻は世尊寺第十四代・行俊、下巻は持明院基時の真蹟を写したものと伝える。<sup>(12)</sup>

写本二冊。上巻①は表紙が白茶色地に水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。下巻②は表紙が白色地に墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は①「哥嘉留多」<sup>持</sup>明院六十五<sup>上</sup>、②「歌嘉留多」<sup>持</sup>明院六十五<sup>下</sup>と表紙左肩にそれぞれ直書きされる。内題はともに「歌嘉留多」<sup>持</sup>明院六十五<sup>上</sup>（下）と記される。上巻巻尾に「此歌嘉留多者依 法皇仰以從二位行俊卿散形奉令書写畢 寛文十一年正月上旬 藤基時」、下巻巻尾に「右哥賀留多以基時卿真蹟忠切模之、上之句二行下句百體者為古法上下之句同體者次之 天明三年 沽洗仲句源尹祥誌之」とそれぞれ本奥書が記される。



百人一首かるたの雛形。半丁に四枚(ないしは二枚)ずつかるたの型をとり、上の句・下の句に分けて揮毫する。歌仙絵等はない。歌人・連阿(一六七一〜一七二九)の本奥書によれば、持明院基時の真蹟を写したものと伝える。散らし形は持明院六十五下とも異なる。

写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「宇多加留太の寫」持明院六十六と表紙左肩に直書きされる。内題は「うたかるたの写 六十七下」と記される。巻尾に「右百首之哥加流多者持明院基時卿之以直筆令書写之者也 正徳三年十一月五日 連阿(花押)」「此一帖奉傳授連阿弥陀佛之一卷也 依之加之 尹祥」と二種の奥書が記される。





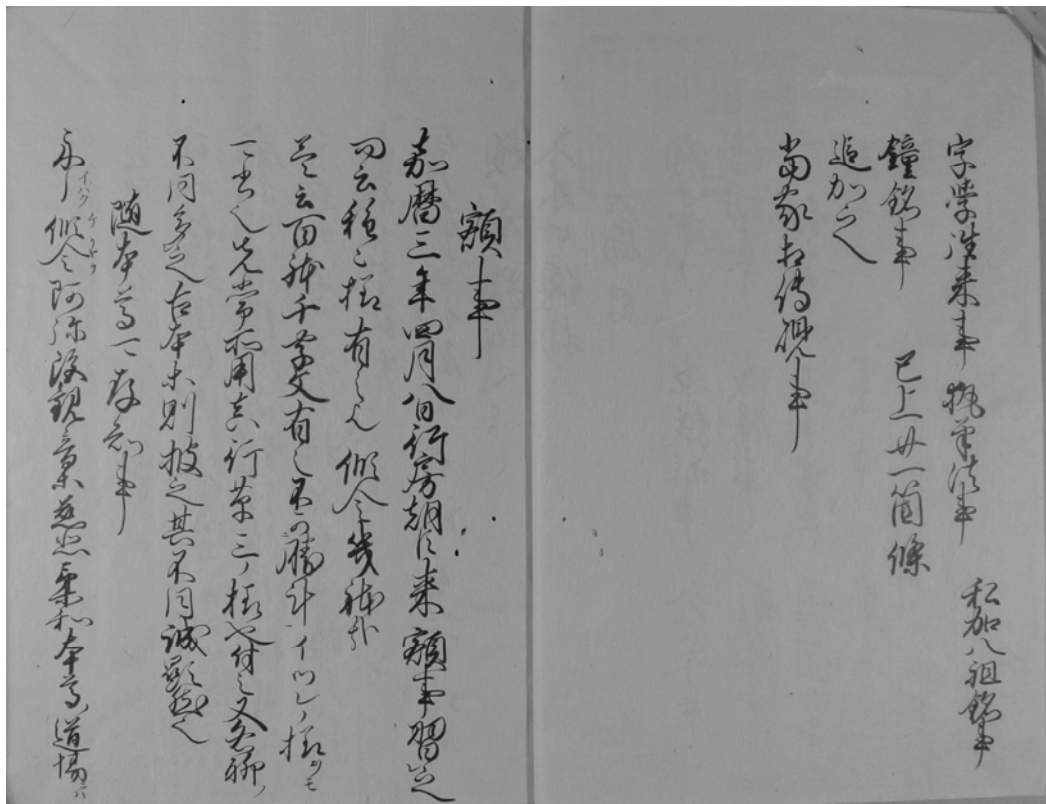
67 入木口伝抄（じゅぼくくでんしょう）

持明院六十七

世尊寺行房・世尊寺行尹の口伝を尊円法親王が書きとどめたもの。「順朱深秘抄」「称覚抄」「奥儀抄」とも呼ばれている。項目数によって、広本系統と略本系統に分けられる。<sup>(13)</sup>

写本一冊。表紙は杏色地（紙漉きの際の絹目）の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「入木口傳抄」<sup>持明院</sup>六十七」と表紙左肩に直書きされる。内題は「入木口傳抄」<sup>持明院家</sup>（扉題）と記される。本文末尾に「文和元年十一月十四日以来聞書等令類聚書之了後学若有好士者为備才学也更不可有披露両賢随分之秘傳也輒漏脱為家可為不便事也抑予十四歲之昔臘月之比可学此道之由始而燭遣入道經尹卿以覚尹僧都為使可見手跡之由云々仍一昏書遣之返答云尤器量也殊可稽（古）哉老躰參仕難治也行尹器量之者也可召進之殊可申沙汰之由可仰含也手本真名行成假名伊經可宜云々即仰行尹写送也權跡本二月二日卜書本也其後十五六二年之間入切了行尹細々昵近一向加扶持了自十七歲蟄居九条坊真言学問始之後更不及手習只難者仁所望之時清書許也文保之比行尹朝臣窄籠没落<sup>落</sup>于閑東仍失指南了而行房朝臣來臨之間多又受口傳了建武以来行尹卿歸路重又諍決了仍兩人前後所聞隨思出記置了今立其篇勒一帖者也 臨池末生（花押）五十五歲」と、巻尾に「故大乘院殿之留書也、可秘」、臨池末生（花押）記之 安永六年四月廿一日書写畢」と本奥書が記される。本書は内容より広本系統に分類される。

伝本は、四天王寺大学恩頼堂文庫・国会図書館ほかに所蔵されるが、同書名の異本（第二種）も散見される。金子に広本の全文翻刻あり。<sup>(13)</sup>



持明院基時の口伝を書きとどめたと考えられる伝書。別称を「入木道相伝聞書」とするほか、「入木道伝授」「入木道相伝の事」「入木道聞書」などとも。内容は、「入木道」に関する言及に始まり、世尊寺家と持明院家のこと、懷紙のこと、詠草のこと、短冊のこと、撰集ならびに物語等のことなどを収める。<sup>(12)</sup>

写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「當家之聞書」<sup>持明院 六十八</sup>と表紙左肩に直書きされる。内題は「當家之聞書 六十八」（扉題）のほか、二丁表に

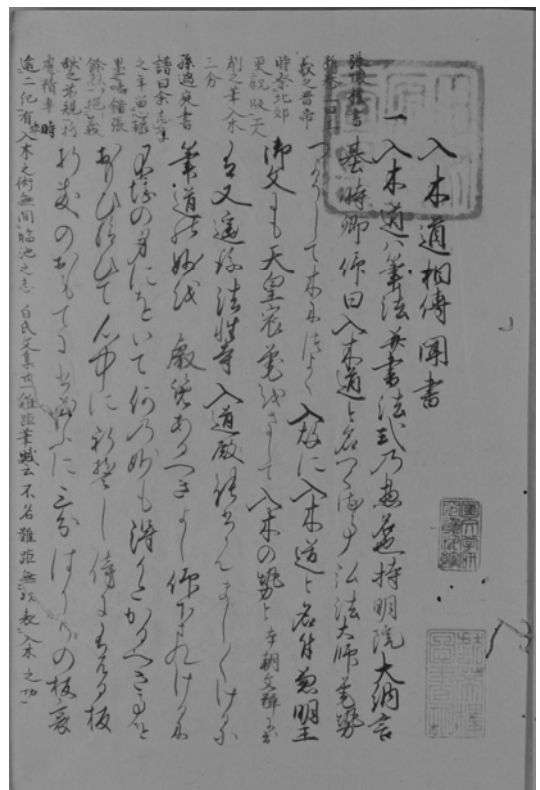
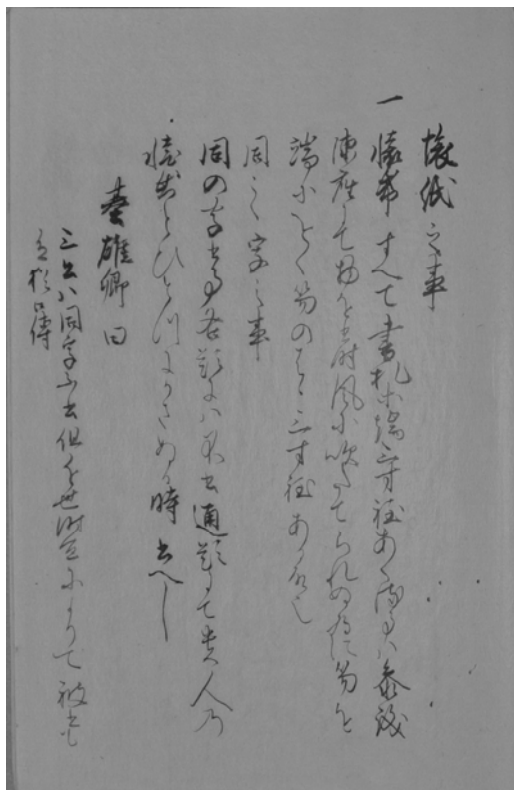
「入木道相傳聞書」（巻首題）と記される。中程に「右一卷入木道之秘傳持明院基時卿蒙御親授記之畢 御門弟之外堅不可令拝見者也 元禄十

五年三月十四日」の本奥書のほか、巻尾に「這一巻者故前大納言基時卿於御前御口傳之趣也、御直弟之外不可及拝見者也 元禄十七年正月日

陸奥六郎義隆末孫源重利」「右一卷祖父重利奥書の趣家傳の一局猥に門人に出さす、先祖重章へ基定卿より御傳受数百巻の御家傳等の最初のおもむきや、此度令清書新に奥書をくはへ畢 天明六年九月日入木末葉

源尹祥」と二種の奥書が記される。

伝本は、静嘉堂文庫、九州大学、東北大学ほかに所蔵される。



69 金森頼時朝臣聞書（かなもりよりときあそんきがき）

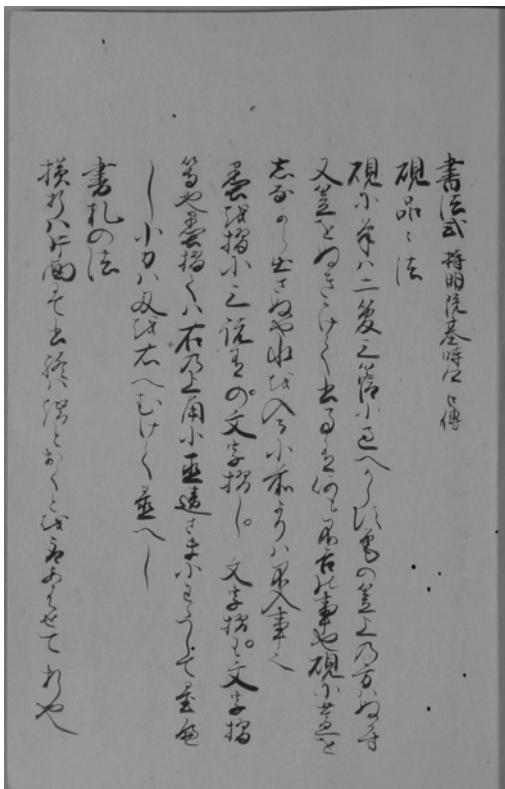
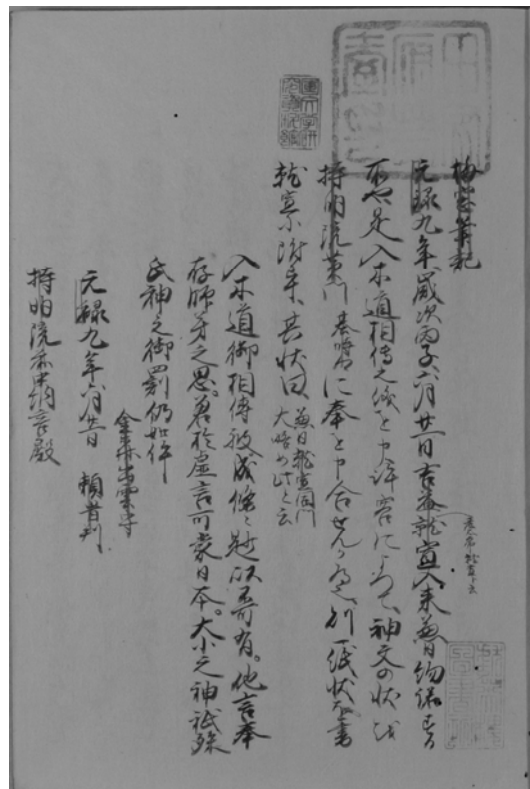
持明院六十九

内題にあるように、「梅窓筆記」と呼ばれ、金森頼時（一六六九～一七三六）の聞書と伝わるが、本奥書より持明院基時の口伝を、松平義高が聞書した旨が記される。金森頼時（一六六九～一七三六）は、飛騨高山藩第六代藩主、のち出羽上山藩主、美濃郡上藩主を務めるが、能書でもある。内容は懐紙のことや短冊のことなど、同じく基時の口伝を書き留める持明院六十八「当家之聞書」（入木道相伝聞書）の内容と重複が確認される。また、後半に「書法式持明院基時卿口伝」・「仮名遣之法」を収める。

写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「金森頼時朝臣聞書持明院六十九」と表紙左肩に直書きされる。内題は「金森頼時朝臣聞書六十九」と記される。

中程に「此冊子は予先人頼時 壮年の比より持明院前亜相基時卿の門に入て授之所の聞書也梅窓筆記といふ梅窓は観山翁の堂号をみつかから寒梅と冠らしめ給ふによつてなるへく没後に一書いまた不全して書庫にあり餘所のものはたま／＼反古の内より撰書したるを紙莫の受あらん事をそろゝにたらず先考に迷信の末にいさゝかかきくはへ侍らる 于時元文三年三月十五日従五位下兵部少輔源朝臣言室近」との本奥書のほか、巻尾に「此書者松平主水義高 前大納言基時卿へ聞書されし秘本也」との奥書が記される。

伝本は、ほかに九州大学に所蔵される。



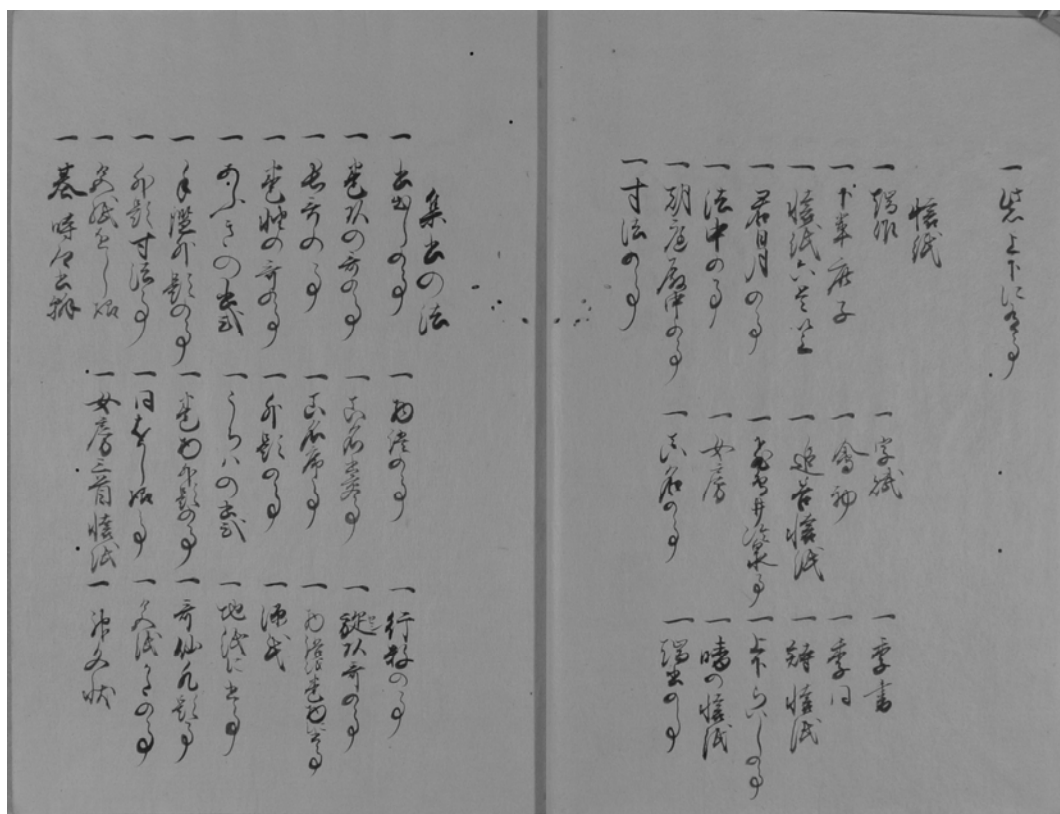
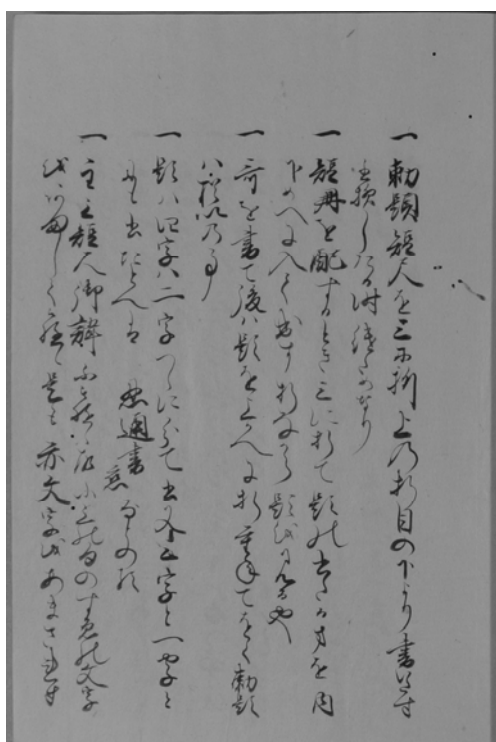
70 曾谷長順聞書（そたにながとしききがき）

持明院七十

曾谷長順なる人物が不明ながら（持明院流の人か）、内題に「入木道伝授／持明院禪大納言基時卿家傳」と記されることから持明院家の伝書と考えるのが妥当であろう。冷泉為村門人・仁木充長の奥書に、二条家の口伝とあるのは誤りであろうか。内容は、短冊色々事、懐紙、集書の法の三つからなる。各項の細かな目次も示される。

写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「曾谷長順聞書 持明院七十」と表紙左肩に直書きされる。内題は「曾谷長順聞書 七十」のほか、「入木道伝授／持明院禪大納言基時卿家傳」と記される。巻尾に「右二條家口傳元禄十五年中秋於鴉床亭書寫之畢 仁木小貳充長」との本奥書が記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。



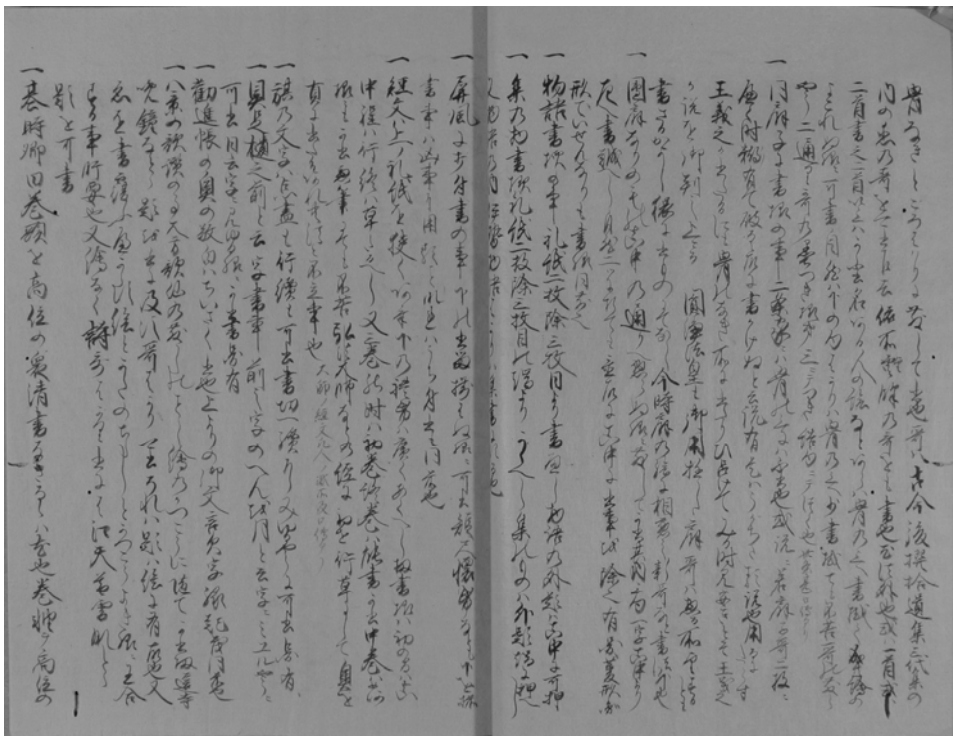
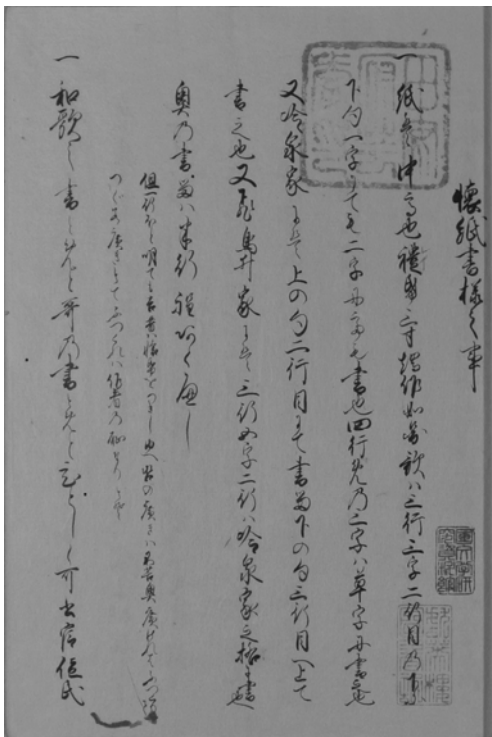
71 大沢家聞書（おおさわけきぎき）

持明院七十一

大沢家が不明ながらも、尹祥の奥書に「持明院家ノ一門也」とあることから、持明院家の流れを汲む伝書といえる。本文中や注記に基時や基輔の名前が見える。巻頭に「懷紙書様之事」と記されるが、短冊や扇の書法についても言及が見え、内容は多岐にわたる。

写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は「大澤家聞書 持明院七十一」と表紙左肩に直書きされる。内題は「大澤家聞書 七十一」のほか、「懷紙書様之事」と記される。巻尾に「此一巻大澤家ノ聞書也、大澤ハ持明院家ノ一門也、雖然聞達不少、依之補之 源尹祥」と朱筆で本奥書が記される。墨の註が付されるほか、本文の誤りを朱で改める。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。



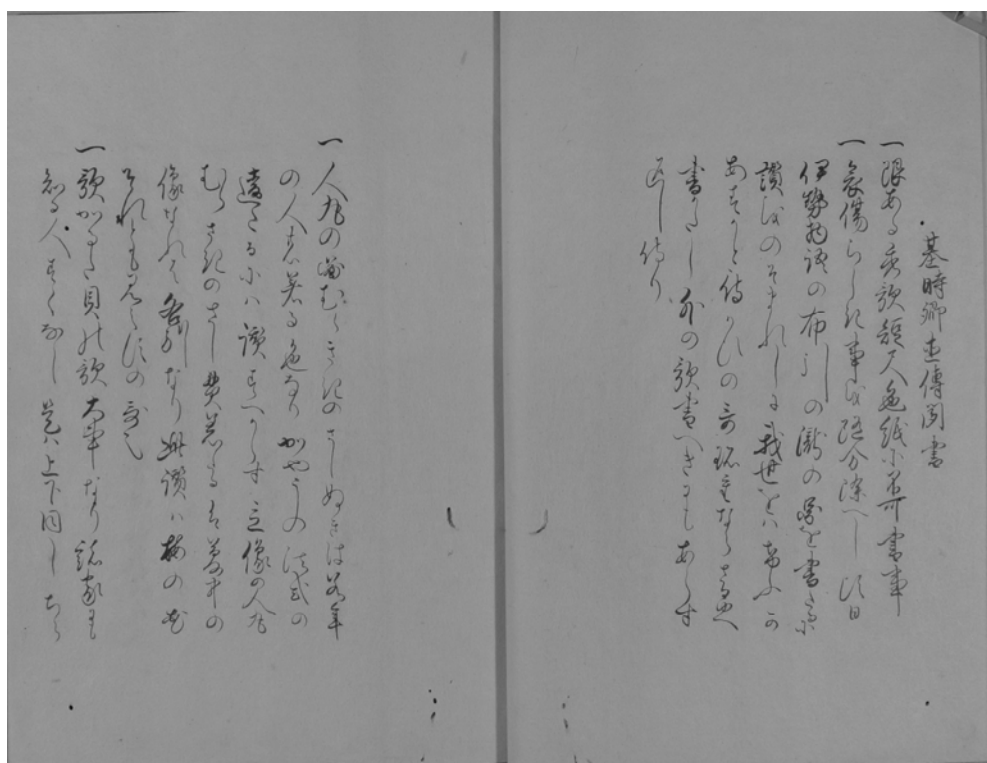
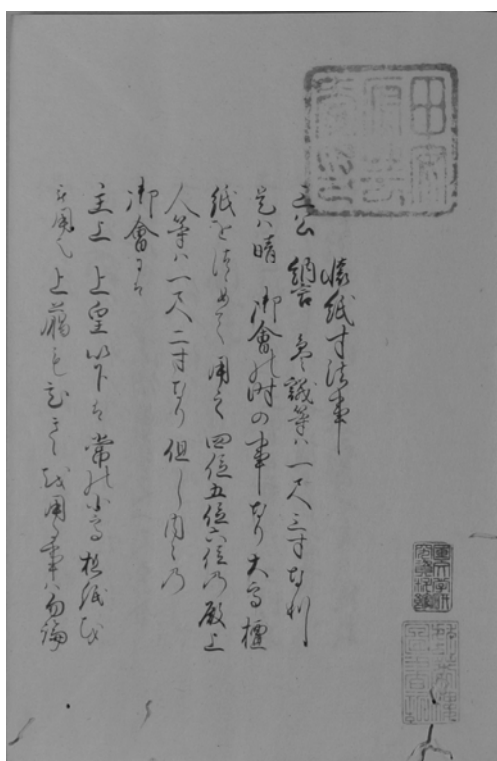
72 他家開書（たけききがき）

持明院七十二

家傳に不足している内容を、弟子の屋代詮賢（弘賢）より得た旨が本奥書に見える。伝書の内容は懷紙寸法事、清書事、端作事、和歌会席の事、法樂事などの書法について記す。本書の中程に「基時卿直傳聞書」と記され、他本との関連が興味深い。

写本一冊。表紙は臙脂色地に草花が銀泥で描かれ、型紙を用いて藍・緑・黄色に着色された紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「他家聞書 持明院七十二」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「他家聞書 七十二（扉題）」と記される巻尾に「此御家傳不足之分屋代詮賢不思議得之、以其本令校合補之 天明七年卯月廿五日源尹祥」との本奥書が記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。



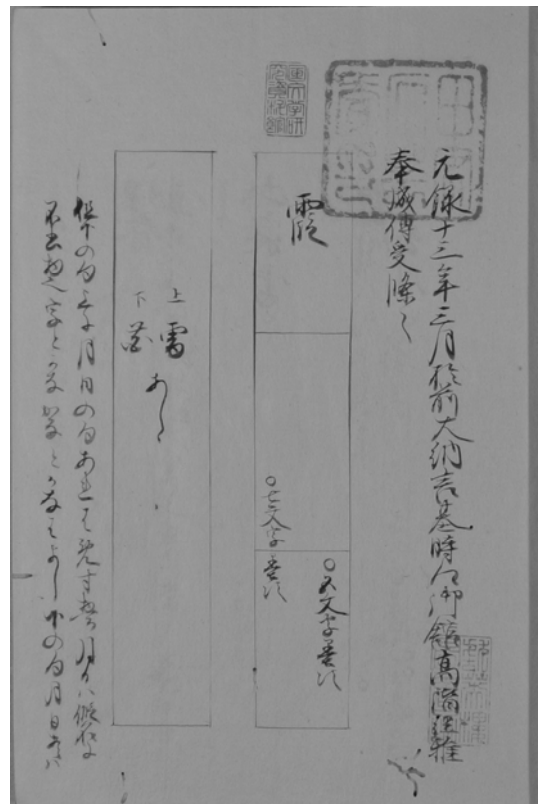
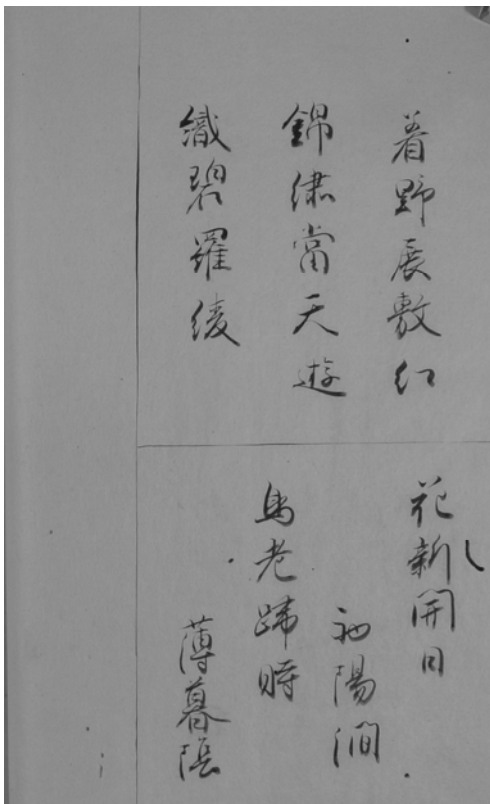
巻首に「元禄十三年三月於前大納言基時卿御館高階経雅奉成傳受條々」と記されることから、元禄十三年に高階経雅が持明院基時より書法伝授を受け、それを書き留めたもの。「持明院殿御家伝」とも呼ばれている。内容は、前半部は短冊や扇面・団扇にはじまり、草子（題簽）、下馬札などについて記される。中程に色紙形の雛形、後半に「和歌書様」を収める。

写本一冊。表紙は臙脂色地に舞樂の楽器や舞台を銀泥で縁取り、着彩（ステンシル）した紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「高階経和聞書」持明院殿御家傳 七十三」と表紙左肩に直書きされる。内題は、一丁表に「高階経和聞書 七十二」三（扉題）と記されるほか、二丁表に

「持明院殿御家傳 七十三」と記される。最初に「右者 経道先生没後入書庫而見之、二重箱に入之、猥不可披覽、書付有之、其嚴重成事不可勝計、不絶感心忽寫之畢」高階 天明三年十月日源尹祥、中間に「右基時卿真跡経和之写を以尹祥模之畢」高階 天明三季仲冬、巻尾に「右一卷正本者京極黄門定家卿 真蹟也慕蘭其遺美前後之一紙條々為證據也所謂擬蘭亭贗本之帖偏莫論於藁木梅花之是非而已 以雅親自筆本見合了但端一両枚粉失之」奥書 奥書一帛名無之、「天正十六年四月褒樂 行幸之刻聖護院准

后道證御本申請令書写之□□十七年十月十六日定家卿自筆之本梅庵由己不慮求出之被披見□加校合落字以下少々書入尤證本歟仍塗□遺子孫聊不可出闕外者也 天正己丑年霜月六日 長諸（花押）／由己（花押）」との本奥書がある。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。

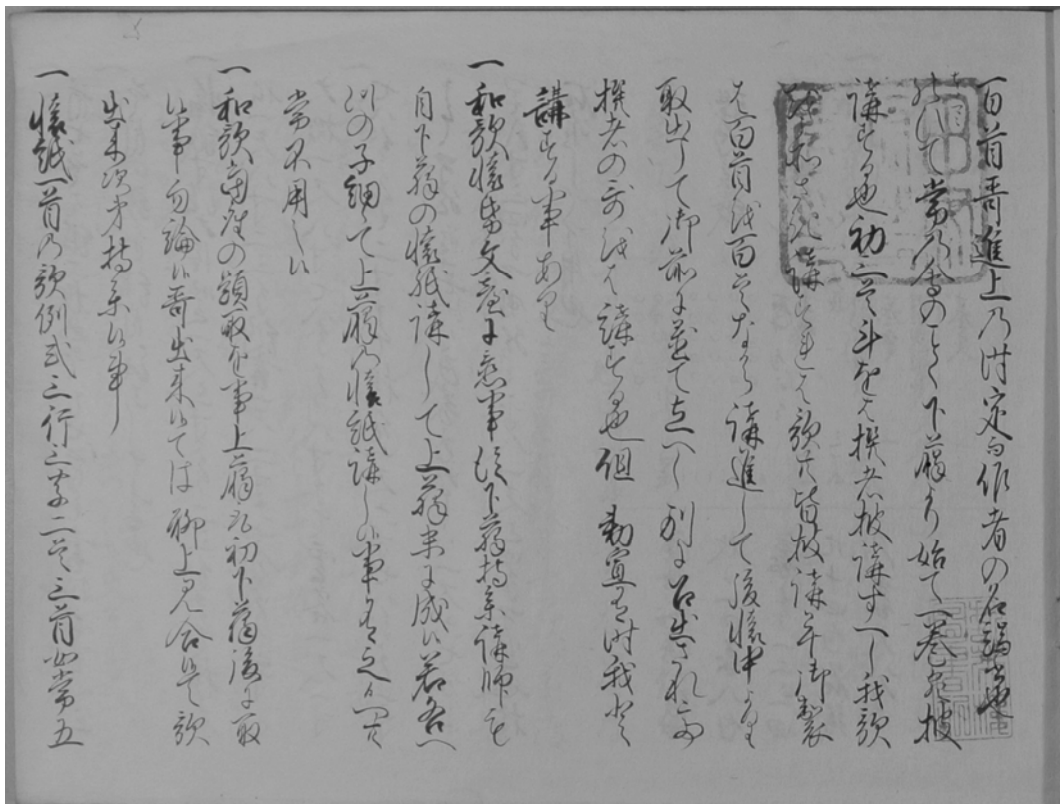




前半は、持明院基時・基輔の口伝を、大沢基珍が聞書したもの。内容は懷紙、往来物（手本）などよりはじまり、高札板寸法、詩詠草、短冊書様之事、女房懷昏書様事、歌仙書様之事、色紙書様之事、草子書様之事、願文勸進帳同之、扇書様之事、色紙寸法、短尺寸法などを載せる。後半には、「和調懷昏事」を収載する。

写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は、「大澤基珍朝臣聞書」持明院七十四」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「大澤基珍朝臣聞書 七十四」（扉題）のほか、中程に「和調懷昏事」と記される。本奥書は、前半部末に「這一卷之書者持明院基時卿同基輔卿日々被為物語之聞書也、然處基次至武江而某校之、即日書寫之、重而可改正者也 正徳三癸巳年七月廿六日 基珍（花押）」、巻尾に「明徳三年八月廿五日 三代作者了俊在判于時應永三十四曆孟秋初三天書之正長二年林鐘中旬申出 高貴之御本較時書寫之筆可有落字歟追可校之者也」、「永享三年菖蒲月中旬以三条殿本書也」、「以治部卿時顯朝臣本書寫畢不慮条々雖有之任一向に追以他本可合校合者也 判」と記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。





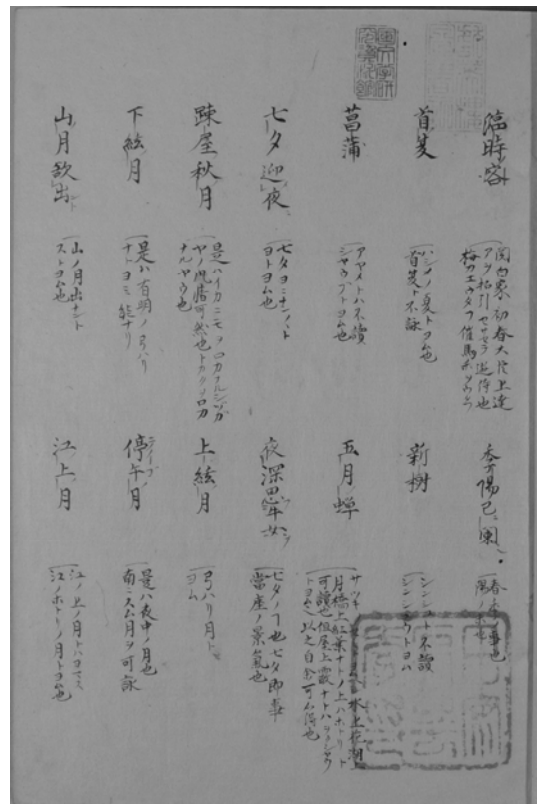
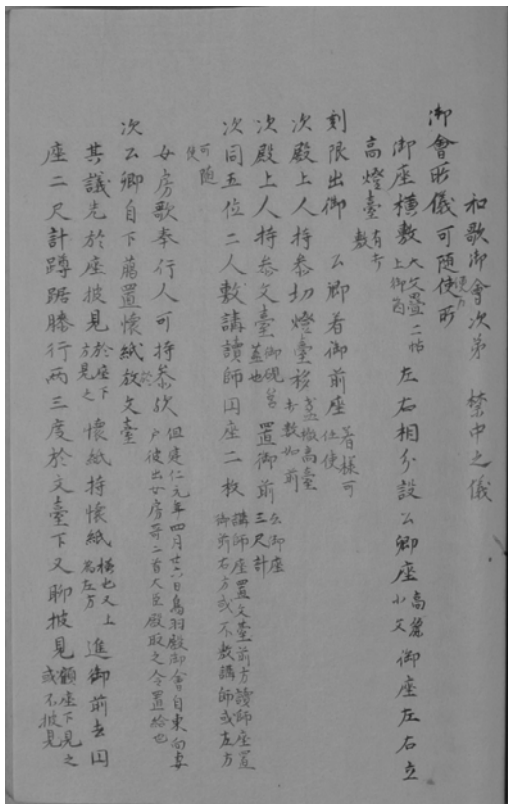
75 明題抄(めいだいしょう)

持明院七十五

前半部の「明題抄」と、後半部の「和歌御会次第」とを一冊に合写したものである。

写本一冊。表紙は藍色地に牡丹唐草文を摺りだした紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「明題抄」持明院七十五と表紙左肩に直書きされる。内題は、「明題抄 七十五」(扉題)のほか、四丁表に「明題抄」(巻首題)と記される。また後半の「和歌御会次第」では、三十八丁表に「和歌御会次第 禁中之儀」と、四十四丁表に「和歌會次第 非禁中之義」とそれぞれ記される。「明題抄」末尾に「右之明題抄者九条禪閣兼孝公ノ御本ヲ以テ奉書寫者也不可有他見者也 寛永三卯月五日書終日 月六七日ニ校合了」。「和歌御会次第」の末尾には「以家本令書写畢尤可秘藏之矣 正三位藤為秀判 右為秀卿以自筆御本書寫之畢」とそれぞれ本奥書が記される。その他、「明題抄」前に「右条々不慮ノ子細アリテ電覽ノ時以家秘本書拔畢」と記される。

伝本は、合写された伝書は「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥するかぎり孤本と思しいが、宮内庁書陵部蔵「明題抄」は、詩歌題を列記する部分が重複する。また、「和歌御会次第」は複数種の伝本が確認される。



76 持明院殿御家伝等無軒聞書

(じみょういんどのこかでんとうむけんききがき) 持明院七十六

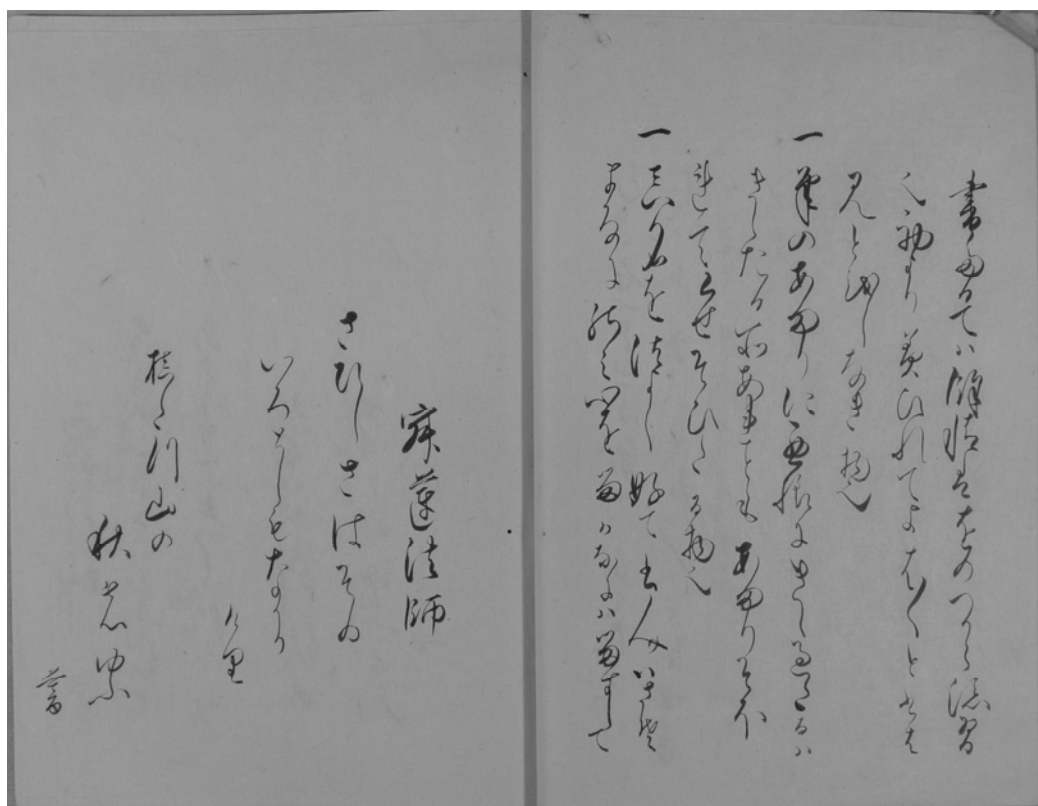
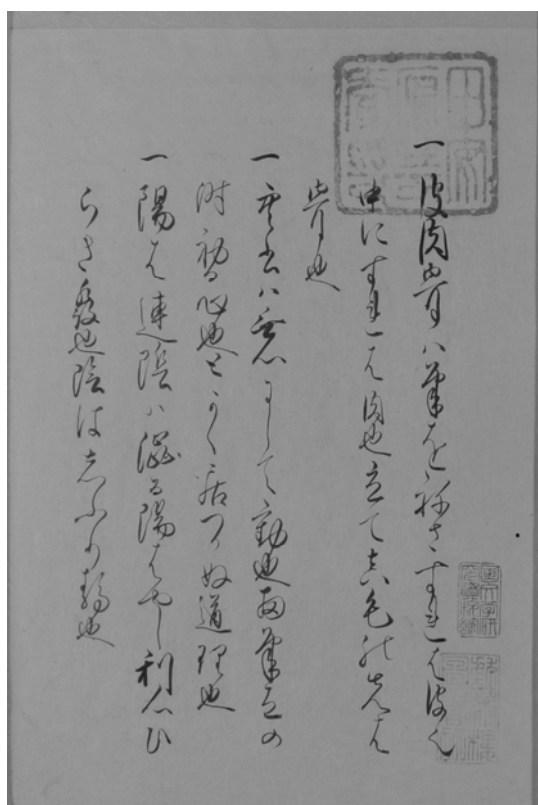
書名より、持明院家の伝書と分かるが、等無軒がだれの堂号か不明。

内容は持明院六十八から七十四の伝書に見られるような書式的な内容ではなく、書法の心得を中心に述べている。後半、色紙形の雛形が写される。

写本一冊。表紙は白茶色地の水玉文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「等無軒聞書 七十六」と表紙左肩に直書きされる。内

題は、「等無軒聞書 七十六」(扉題)と記される。奥書識語等はない。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。

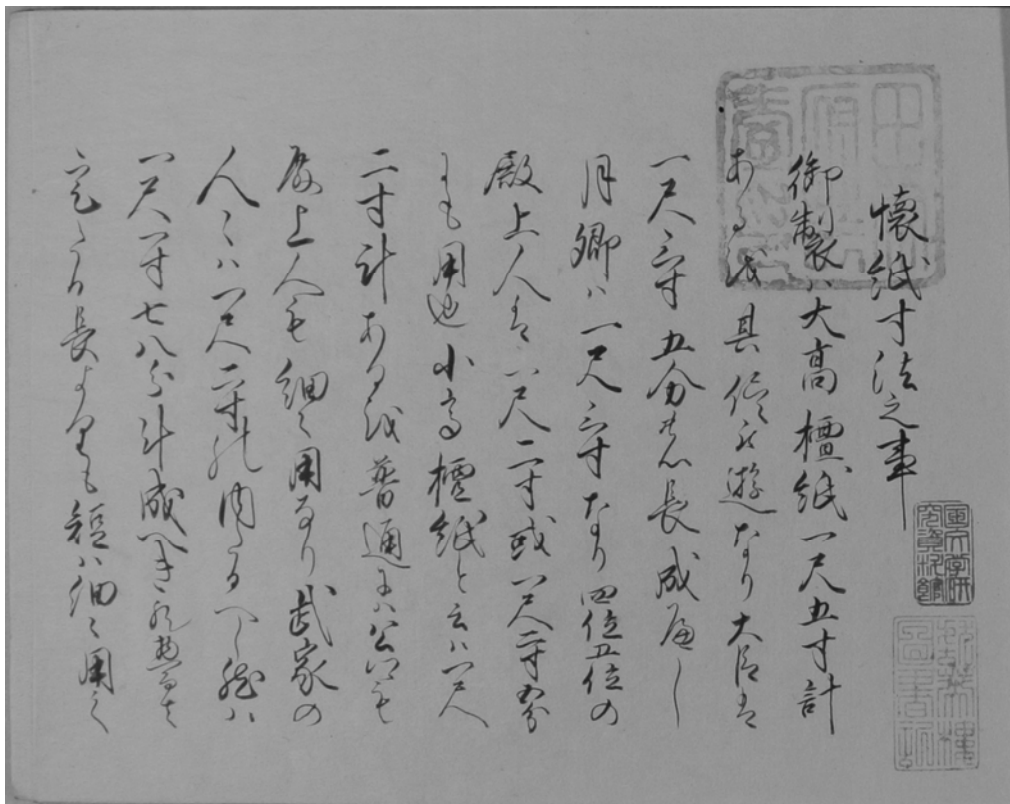


三種の伝書の合写本。持明院家の伝書からはじまり、二つ目も近似した伝書収める。奥書によれば、前者が青蓮院流の尊道法親王の真蹟本の写しで、後者が宋世（飛鳥井雅康）の手によるものと思しい。内容は、どちらも懐紙や短冊の書式に関する事柄が多い。後半部には柳原資定の「和歌会席作法」が収載される。

写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「入木道古抄 持明院七十七」と表紙左肩に直書きされる。

内題は、「入木道古抄 七十七」（扉題）と記される。ほか二種の伝書が収載され、十六丁表に「和歌會席作法」と記される。「入木道古抄」末尾に「右一冊者以青蓮院尊道法親王真跡之御本令書寫之尤憚他見而已慶長十七年孟夏二日」と、二つ目の伝書末に「右一卷依細川右京兆御所望書之不可有聊尔之儀者也 延徳元年十月日 宋世（花押）」、巻尾の「和歌會席作法」末に「感律師 尊海 数寄之志僻案之臆説等少々所命翰墨也、非無其憚努々不可有他見而已 諫議大夫尚書 柳原 資定」とそれぞれ記される。

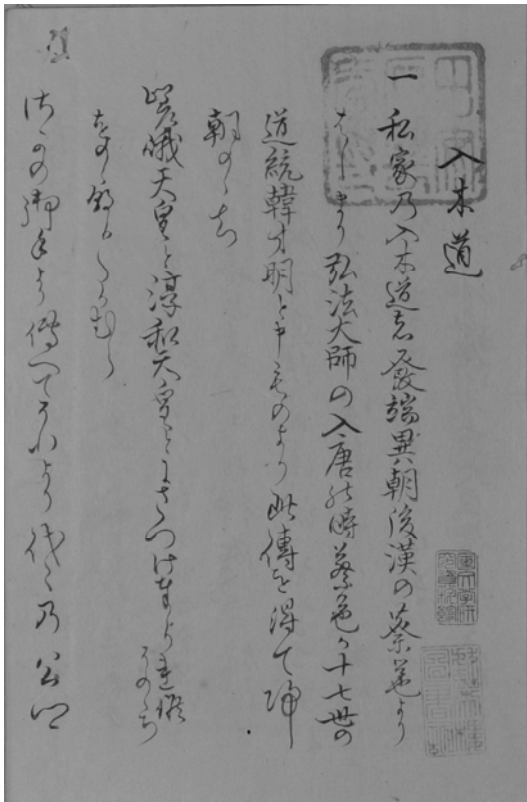
伝本は、合写本は「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本であるが、柳原資定著「和歌会席作法」は、岡山大学池田文庫に所蔵が確認される。



78 入木道伝統（じゅぼくどうでんとう）

持明院七十八

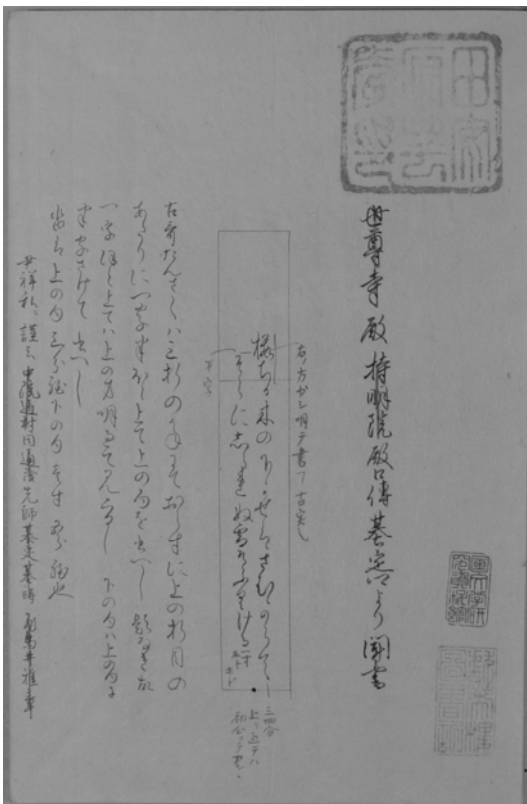
書博士・藤木司直（加茂、一六八四～一七三八）の伝書。「入木道」や「入木道注進」とも。内容は、入木の道の流れについて言及している。写本一冊。表紙は白茶色地（無紋）布目の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「入木道傳統」持明院 七十八と表紙左肩に直書きされる。内題は、「入木道傳統」（扉題）と朱書きされる。二丁表に「入木道」（巻首題）と記される。巻尾に「庚子春 散位従五位上司直注進」との本奥書のほか、「右之一巻櫛笥殿之御本へ司宜先生ノ之筆」 拝借一字も不違寫之、後日加朱點也 寛政六寅年四月 貞見」との奥書が朱書きされる。伝本は、別書名「入木道」として、内閣文庫に所蔵される。



79 持明院入木道口授（じみよういんじゅぼくどうくじゅ）

持明院七十九

巻首に「世尊寺殿持明院殿口傳基定卿より聞書」と記されるように、持明院基定の口伝を記した伝書。内容は短冊や色紙形、形の物の書式に關する項目が並ぶ。写本一冊。表紙は山吹色地に草花紋様を描いた紙表紙、銀泥で輪郭線を描き、ステンシルを用いて着彩している。見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「入木道口授」持明院 七十九と表紙左肩に直書きされる。内題は、「入木道口授 七十九」（扉題）と記される。巻尾に「右一卷者能書家之法入木道血脈也、不可單外見云々 元文三年仲春森氏源繁利」との本奥書が記される。伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、同書名が複数確認される。



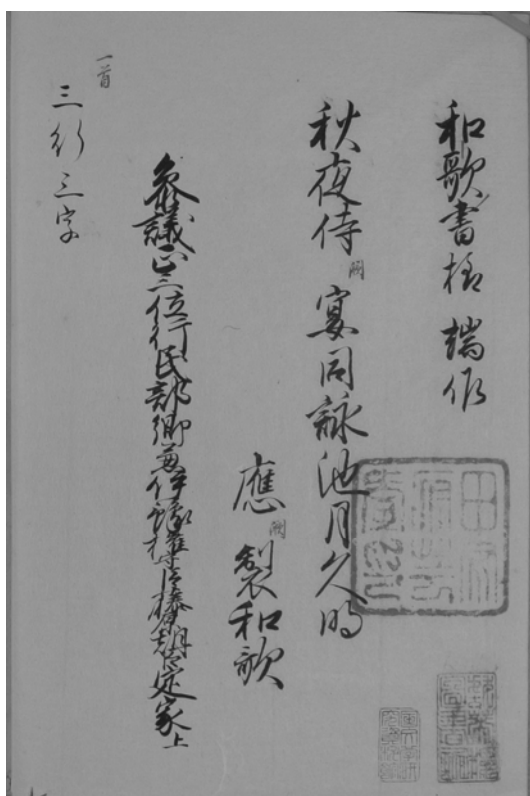
80 和歌会式（わかかいしき）

持明院八十

和歌会における作法書（歌学書）。藤原定家著とする『和歌書様』、および『和歌会次第』を合写した伝書。

写本一冊。表紙は山吹色地に舞樂の楽器や舞台を銀泥で描き、型紙吹きつけで着彩した紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「和歌會式<sup>持明院</sup>八十」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「和歌會式<sup>持八十</sup>（扉題）」と、四丁表に「和歌會次第」とそれぞれ記される。巻尾に「右一卷正本者京極黃門へ定家／卿」真蹟也、慕蘭其遺美前後一紙臨之、為備證據也、所謂擬蘭亭贋本之帖偏莫論、於稟木梅花之是非而已 諫議大夫藤基春」との本奥書が記される。

伝本は、宮内庁書陵部や静嘉堂文庫などに所蔵される。



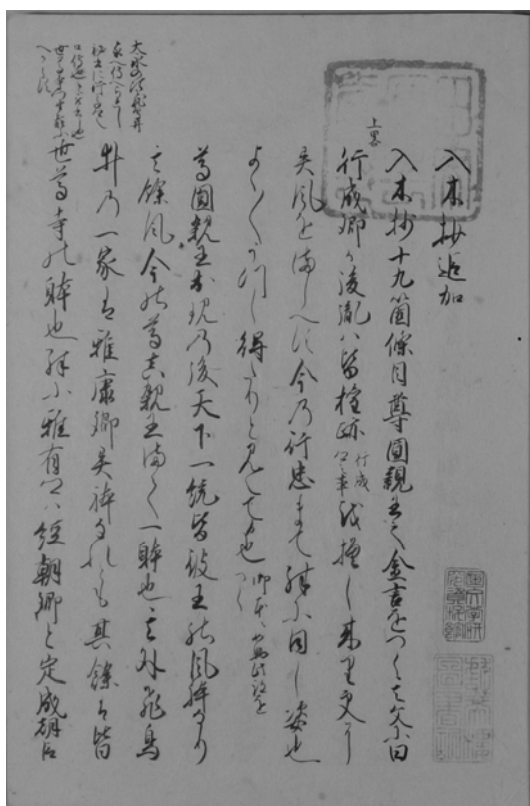
81 入木抄追加（じゅぼくしょうつか）

持明院八十一

尊円法親王著『入木抄』に関する言からはじまり、諸家の筆論を読むことが大切である旨を説く。本朝の入木の流れについて、流派や能書について言及しつつ、持明院家がいかに正統なるものかを述べている。

写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は、「入木抄追加<sup>持明院</sup>八十一」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「入木抄追加」（扉題）と、二丁表に「入木抄追加」（巻首題）とそれぞれ記される。巻尾に「右者依尹祥先生命御徒組頭日下部弥源次藤原利政一男順清書之」との本奥書が記される。

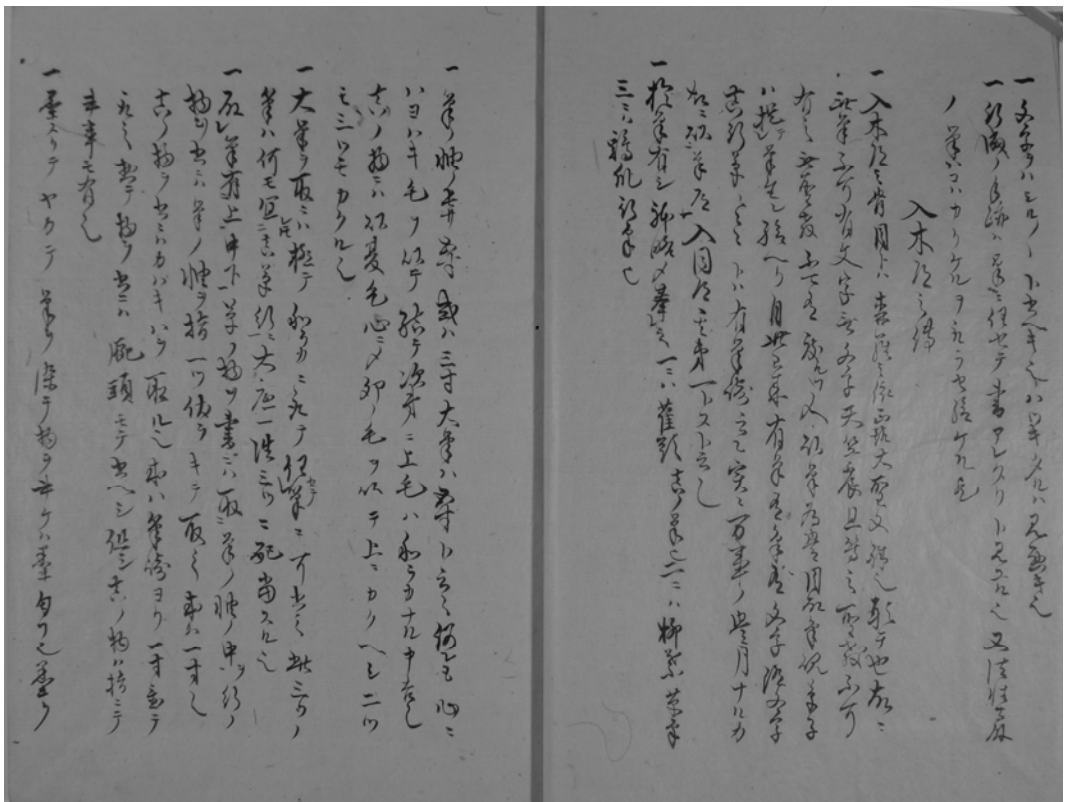
伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。



藤原教長（一一〇九—一一七七？）の口伝を記した『才葉抄』の一伝本。入木における心得を中心に述べる。巻頭に安元三（一一七七）年に高野山の庵室にて口授されたと記される。別名を「筆法才葉集」「筆体抄」などとし、本書は内題に「筆法才葉集」と見られる。『才葉抄』は項目数により、四十七条本（類従本）系統、八十八条本系統、二十四条本系統に分類されるが、本書は八十八条本系統に分類される一本。

写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は、「教長卿口傳」持明院八十二」と表紙左肩に直書きされる。内題は、一丁表に「教長卿口傳」（扉題）と、二丁表に「筆法才葉集宰相入道教長口傳」と記されるほか、本文中程に「入木道之傳」と記される。奥書等はないが、巻首に「安元三年七月二日於高野山密談」との識語が記される。

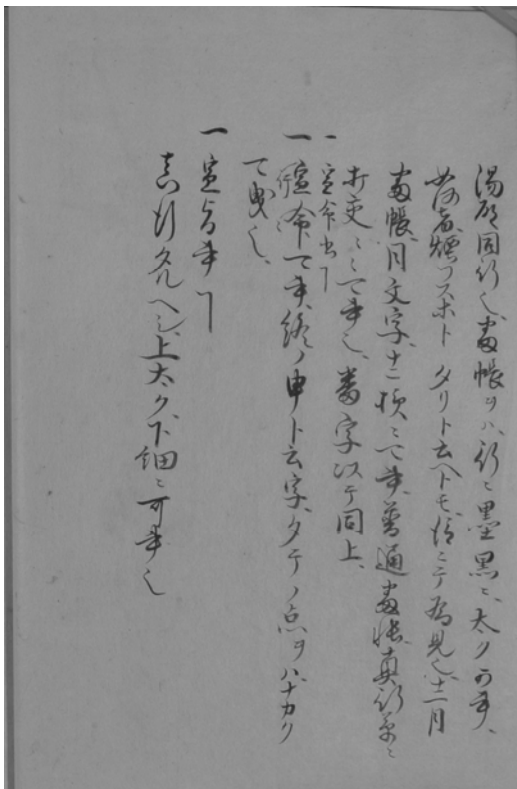
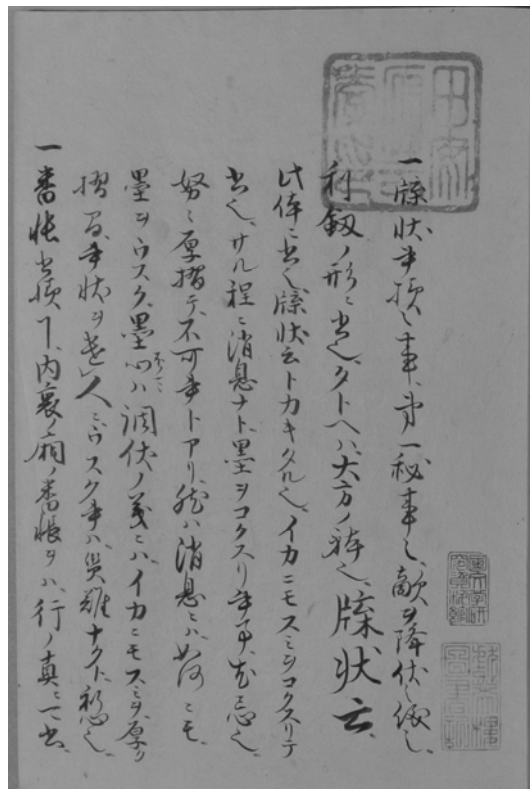
伝本は五十本にも及び、龍門文庫や四天王寺大学恩頼堂文庫などに所蔵される。同系統の本文は、国会図書館や関西大学などに所蔵される。八十八条本系統の本文は、『日本書画苑』（図書刊行会、一九一五年）に翻刻が掲載されるほか、金子による資料紹介などがある。



持明院基春(一四五三、一五三五)による伝書。奥書によれば、基春の子・基孝、孫・基規へ相伝されてゆく様子がうかがえる。内容は牒の書式のことだけに終始せず、牒状書様之事、番帳書様事、宣命書事、宣旨書事、悠記主基御屏風書様事、賢聖障子銘、年中行事障子の書様事、勅額事、太上天皇尊号辞表の書様事、錦御幟之事、武家之御旗之事、一ヶ條之寸法を収める。

写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は、「牒状書様」持明院 八十三と表紙左肩に直書きされる。内題は、「牒状書様」(扉題)と記される。巻尾に「此一帖者愚息相公相傳之也但或者書加或者省略之令用捨了堅可禁外見草也清書已後早破之」、「右能書口傳之一冊、先人建筆也、然愚息中将、へ基孝／朝臣」相傳之条令付属 天文第九曆六月十三日 前參議藤基規」と二種の本奥書が記される。

伝本は少なく、小松氏架蔵資料が確認される。<sup>(12)</sup>





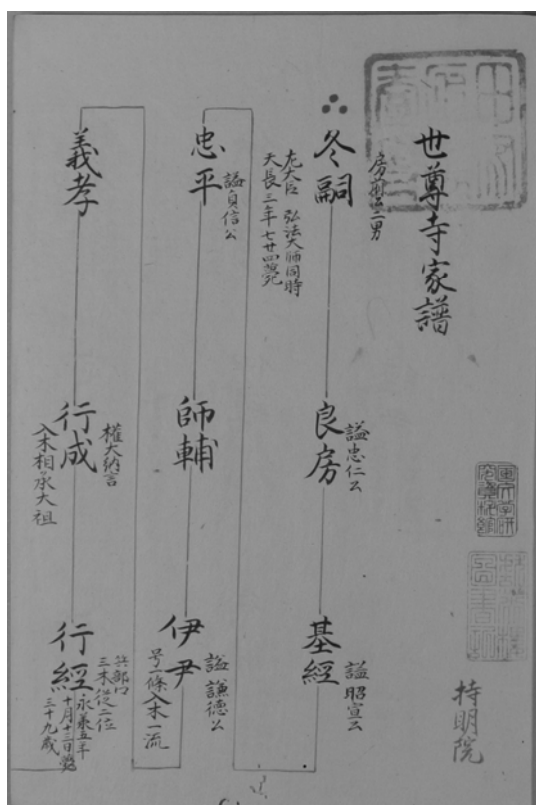
84 持明院二十八ヶ条口伝

(じみょういんにじゅうはちかじようくだん)

持明院八十四

「世尊寺家譜」にはじまり、持明院家の系図を載せる。その後懐紙、色紙形、短冊、団扇、扇面、形の物、貝合、加留多などの書式について言及した伝言。

写本一冊。表紙は山吹色地に蝶の輪郭線を銀泥で描き、型紙吹きつけで着色した紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「二十八ヶ条口傳 八十四」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「二十八ヶ条口傳 八十四」(扉題)と、二丁表に「世尊寺家譜」とそれぞれ記される。奥書識語等はない。伝本は少なく、小松氏架蔵資料が確認される。<sup>(12)</sup>

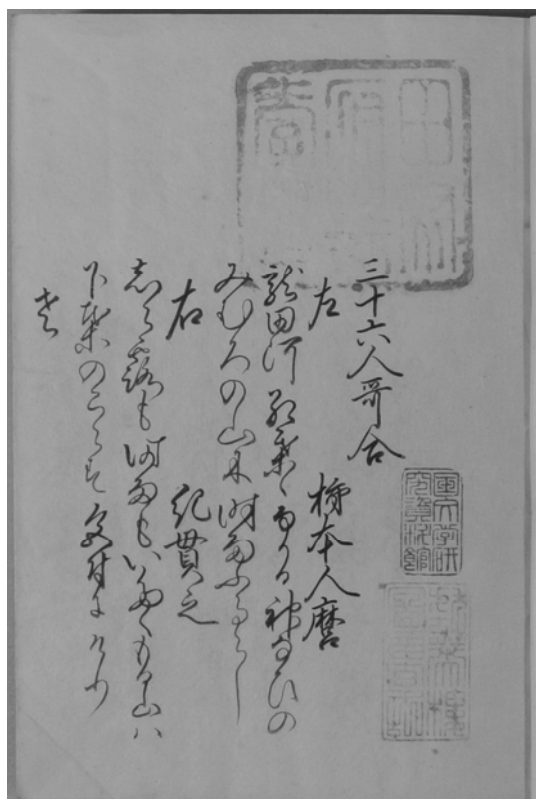


85 三十六人歌合集(さんじゅうろくにんうたあわせしゅう)

持明院八十五

草子の「三十六人歌合」、「中古三十六人歌合」、「新三十六人歌合」、「女房三十六人歌合」を写したものの。その後半丁に二枚ずつ型をとり、尊円法親王書写の色紙形と世尊寺行俊書写の色紙形の写しを備える。

写本一冊。表紙は灰色(無紋) 布目の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「三十六人歌合集 持明院 八十五」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「三十六人歌合集 八十五」(扉題)と記されるほか、「三十六人哥合」や「中古卅六人歌仙」などと記される。二種の色紙形の写しの後に「右尊円親王以色昏形令書写者也」、「右世尊寺行俊卿以色紙形令書者也」との奥書が記される。巻尾に「右一冊持明院家秘書當家令相傳者明和九辰年於文庫焼失、故從高階經道申請令書寫畢 安永二年九月日 源繁衆」との本奥書が記される。

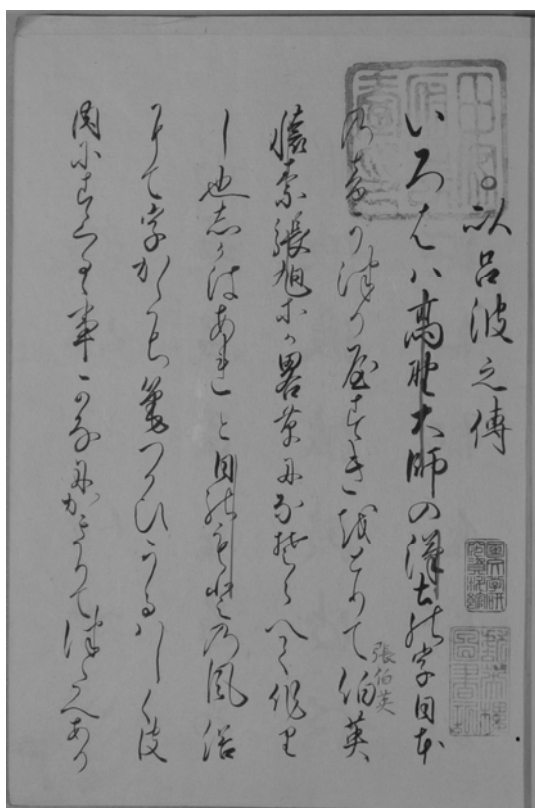




86 源底集以呂波伝授（げんていしゅういろはでんじゆ）

持明院八十六・八十七・八十八

空海に仮託した入木道伝書で、以呂波四十七文字について言及する。以呂波の誕生より、各文字の造形について細かく点画の内容（構造）について説明を付す。また、以呂波を篆書・隸書・楷書・行書・草書・仮名で示す。芳野耕雲著『以呂波伝授』なる伝書も確認されるが、同書か未確認。写本一冊。表紙は白色地に藍色で波紋様を摺りだした紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「源底集」以呂波傳授 持明院八十六八十七八十八と表紙左肩に直書きされる。内題は、「源底集」以呂波傳授 八十六之十（扉題）と記されるほか、一二表に「以呂波之傳」、十六丁裏に「伊路葉傳授」などと記される。奥書識語等はない。持明院八十九の内容を考えると源底集之一から三までを合写した伝書と考えられる。

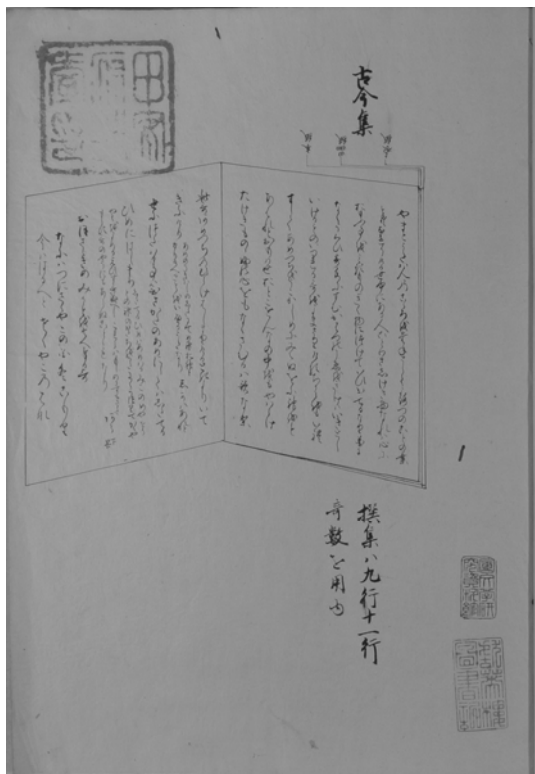


87 持明院源底集（じみょういんげんていしゅう）

持明院八十九

持明院基定『入木道源底集』、「入木道家伝源底集」とも。内容は草子書（卷子も含む）にはじまり、三社号等の軸、幟、屏風や下馬などの書式について言及する。内題の表記から持明院八十六・七・八の続き。写本一冊。表紙は白茶色地の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は、「持明院源底集之四終」源底集之四終 八十九と表紙左肩に直書きされる。内題は、「持明院源底集之四終」八十九（扉題）と記される。巻尾に「右武具之銘雖種々有之外者可准之、何茂意連之法を以可調之 寛永十九年二月吉辰基定 森九郎兵衛」、「右一巻尔松山少将君奉傳之畢 寛政八年八月良辰尹祥」と二種の本奥書が記される。

伝本は、宮内庁書陵部、東北大学、二松學舎大学などに所蔵される。



88 色紙形（しきしがた）

持明院九十

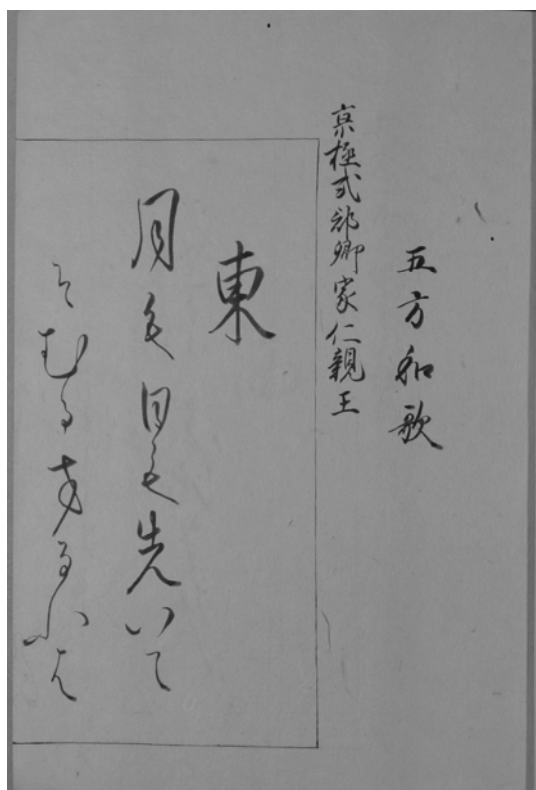
一丁を使い色紙形の型をとり、各種色紙形の写し。上巻は五方和歌、四隅和歌、五行和歌、五色和歌、五常和歌を、下巻は五味和歌、六根和歌、詞書六歌仙、三夕和歌を写す。色紙形の右端に筆者名が明記されていることから、元は寄合書きされた色紙形であったことが想像される。

写本二冊。上下とも表紙は藍色（無紋）の紙表紙、見返しは本文共紙、

料紙は薄様。外題は、紫の打疊料紙に①「色紙」持明院 一 九十上」、②「色

紙」持明院 二 九十下」と墨書され、表紙左肩に貼付される。内題は、①

「色紙形 一」、②「色紙形 二」とそれぞれ記される。



89 勅点百人一首（ちよくてんひやくにんいつしゆ）

持明院九十一

識語の内容から後水尾天皇（政仁）の所望により、三条西実隆によって書写された『百人一首』に、後陽成天皇が清濁・訓点を付したものの写し。

写本一冊。表紙は白茶色の水玉紋様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「勅点百人一首」持明院 九十一」と表紙左肩に直書きされる。

内題は、「勅点百人一首 九十一」（扉題）と記される。巻尾に「若宮政

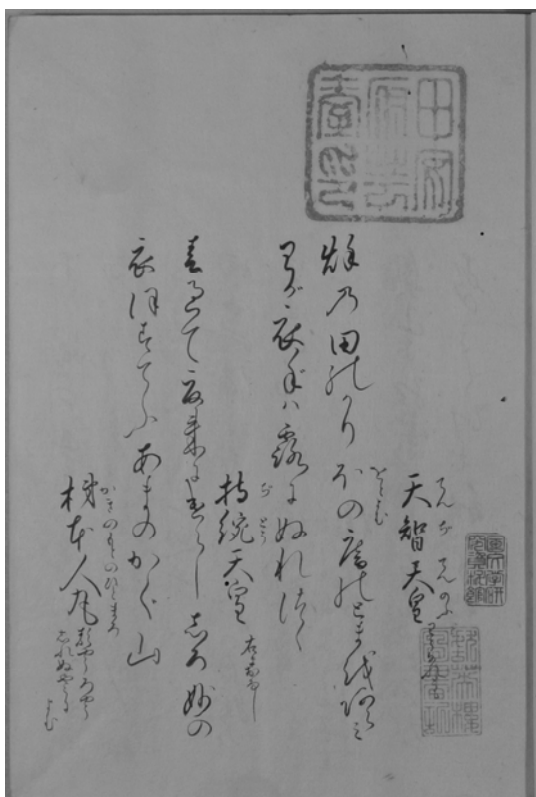
仁依所望実隆以口受書写之畢 慶長十五月上旬」、「右百人一首清濁

後陽成院勅点不違一字謹而奉模寫之畢 元禄三 十二月中旬」基定

卿末流 源重英」、「這一帖者依曾祖父重英筆跡、同命止出於門人子孫々々

實曆十一年辛巳九月日小十人隊源（花押）」と三種の本奥書が記される。

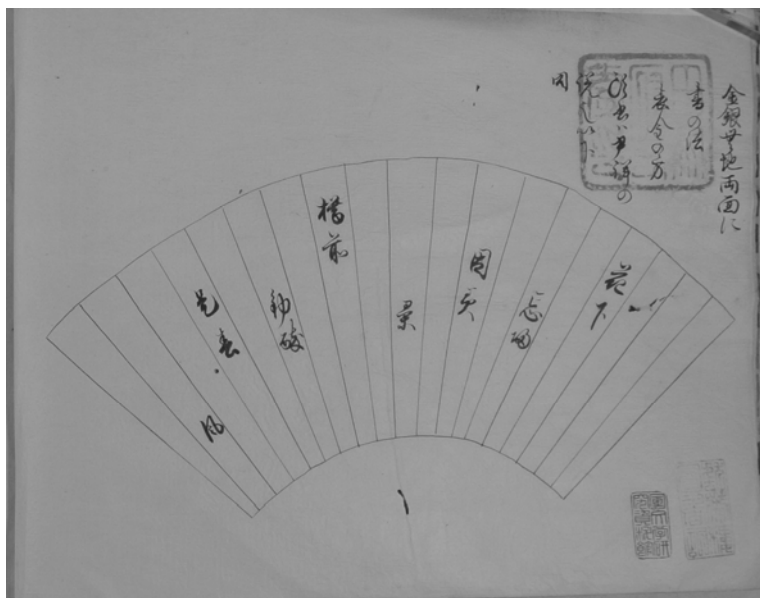
花押は繁衆で尹祥の初名。



90 持明院扇面書法（じみょういんせんめんしよほう） 持明院九十二

扇面に関する書法を記した伝書。後半には扇面の雛形（写し）が付される。雛形には、筆者名の注記も確認できる。

写本一冊。表紙は白色地に朱と緑（深緑・黄緑）で花紋様を摺りだした紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、紫の打疊料紙に「持明



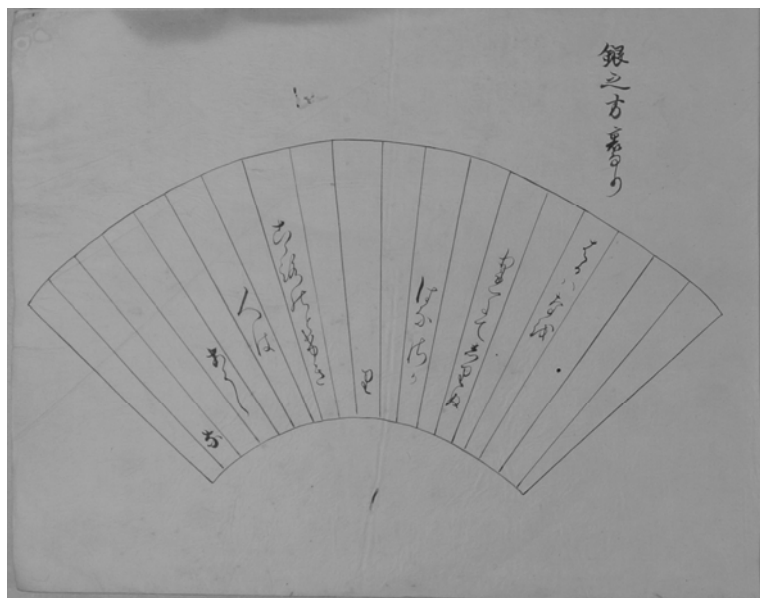
院 扇面書法 九十二」と墨書された題簽が表紙左肩に貼付される。内題は、

「持明院 扇面書法 九十二（扉題）」と記される。巻尾に「右一巻尔松山少

将君奉傳之畢 寛政八年 八月良辰尹祥」と本奥書が記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。

京都大学蔵「扇面書法」と同書か未確認。

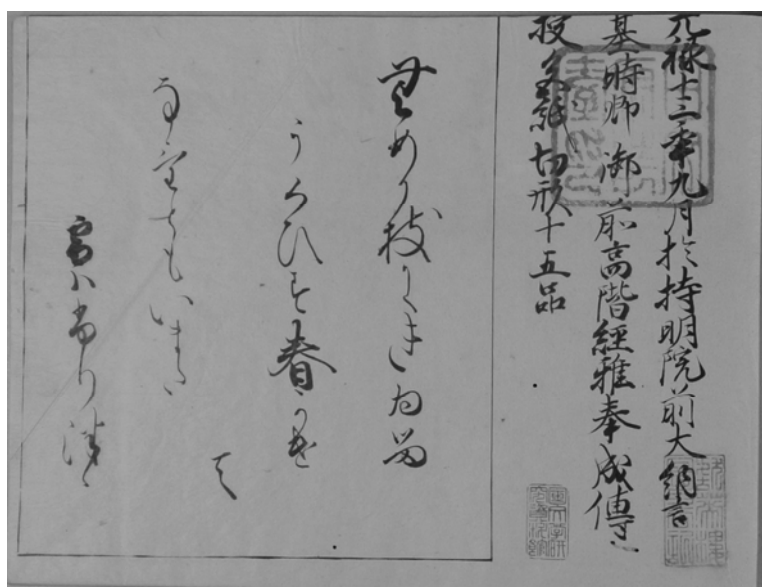


91 持明院色紙切形（じみょういんしきしきりがた）

持明院九十三

持明院基時が高階経雅へ伝授した色紙形に関する伝書。細かな言及は見られず、散らし形が雛形として示される。色紙形七枚に、形の物や扇面の雛形も加え、色紙・切形計十五種を掲載する。

写本一冊。表紙は白茶色地の水玉文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙



は薄様。外題は、「持明院色紙切形 九十三」と表紙左肩に直書きされる。

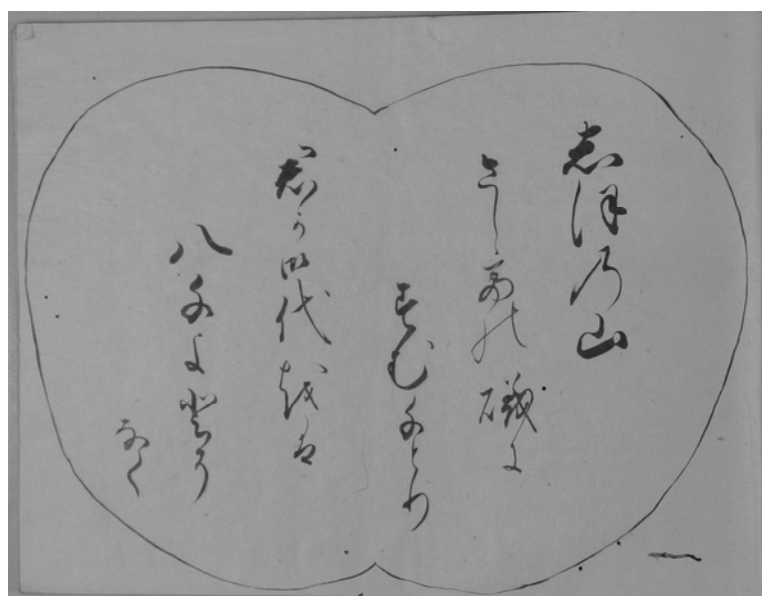
内題は、「持明院<sup>色紙切形</sup> 九十三」（扉題）と記される。巻尾に「持明院前

大納言基時卿能書御傳授之品々聊以不可他見者也 元禄十三年九月日

高階経雅」「右一巻尔松山少将君奉傳之畢 寛政八年 八月良辰尹祥」

と二種の本奥書が記されるほか、巻首に「元禄十三年九月於持明院前大

納言基時卿御前高階経雅奉成傳授色紙切形十五品」と識語が記される。

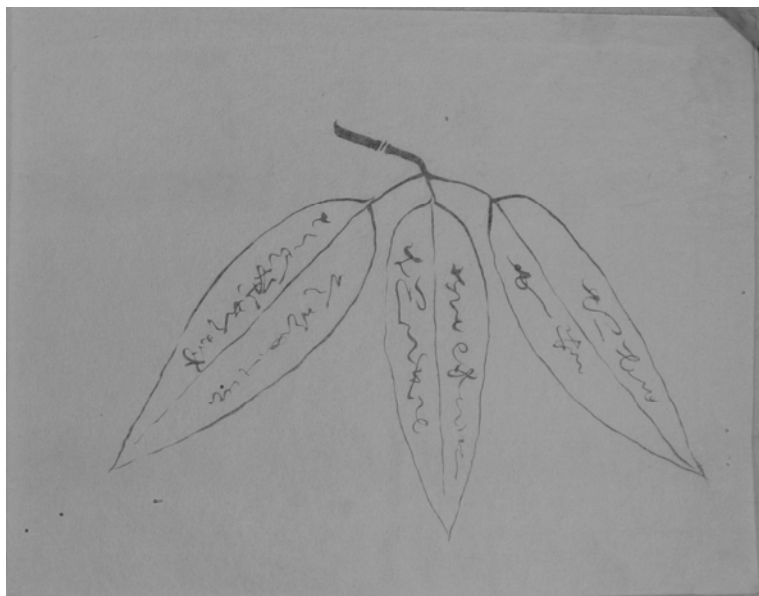


92 持明院形之物（じみょういんかたのもの）

持明院九十四

持明院基定の伝書で、色紙形の中でも形の物と呼ばれる変形色紙形の書法について言及している。前半に二十六種の雛形を載せ、様々な散らし形を示す。

写本一冊。表紙は朱色の水玉文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙

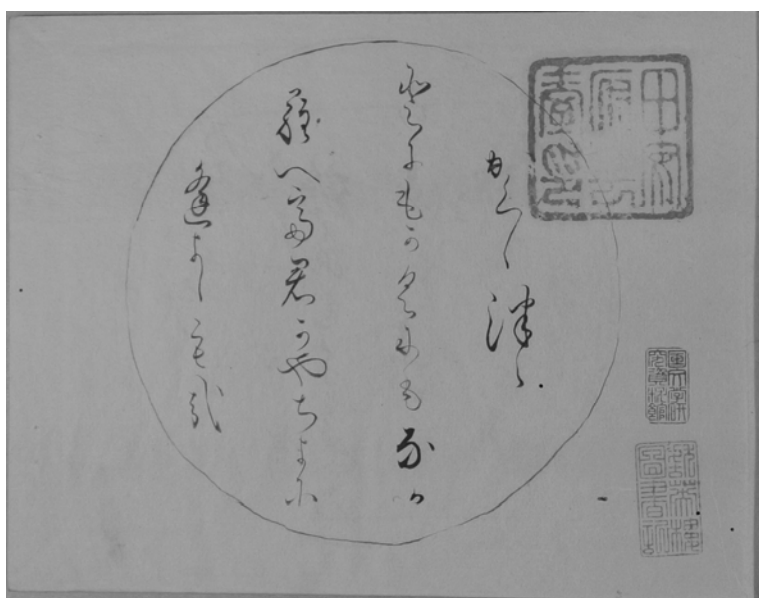


は薄様。外題は、「形之物 <sup>持明院</sup> 九十四」と表紙左肩に直書きされる。内題は、

「形之物 九十四」（扉題）と記される。巻尾に「右条々従持明院前大

納言基定卿于先祖森九郎兵衛重章被成下傳授之趣記之に、同姓公風令教訓畢 寛政二年庚戌重陽前日源尹祥」との本奥書が記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。四天王寺大学恩頼堂文庫蔵「百体形之物」なども確認される。



93 持明院花色紙短尺（じみよういはなしきしたんざく）

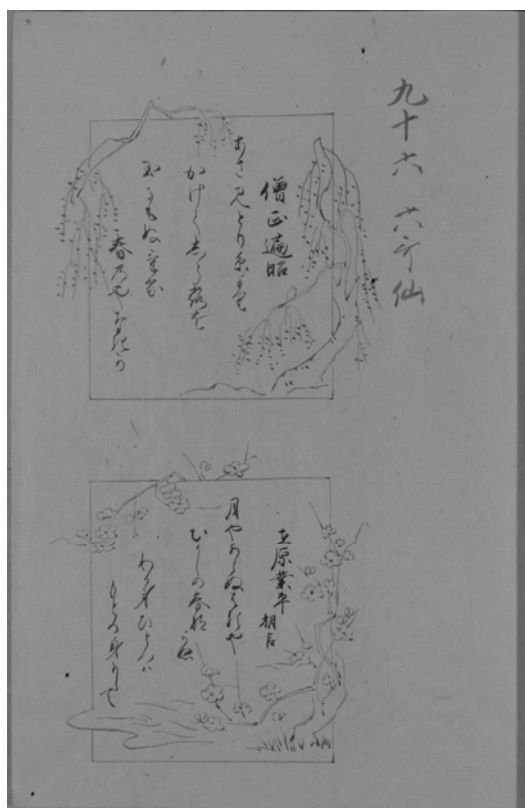
持明院九十五・九十六・九十七・九十八

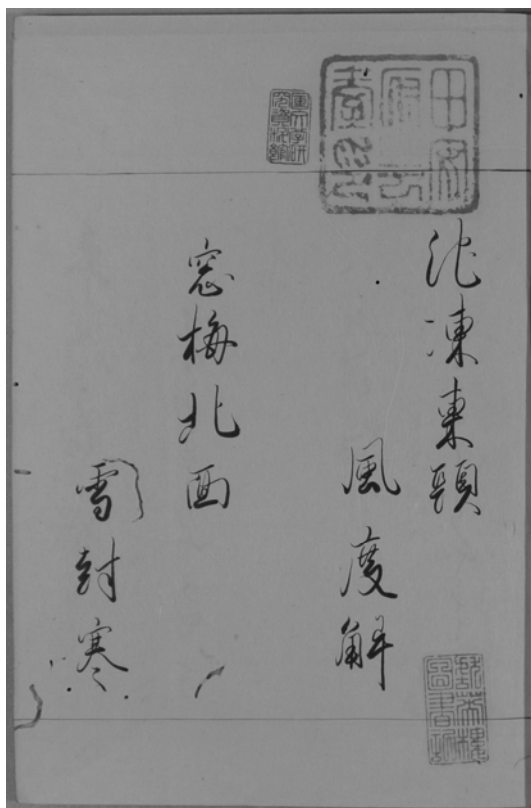
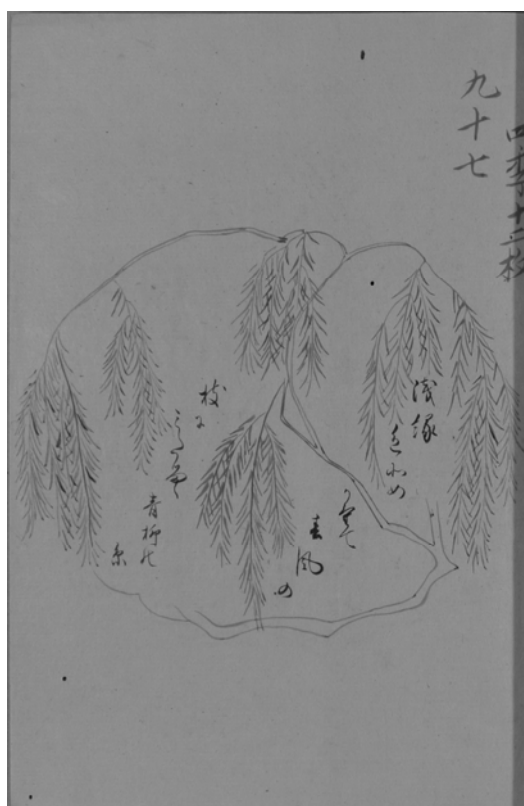
持明院家に伝わる、花色紙や花短冊の雛形。花々で飾り立てた色紙形に様々な和歌が散らし書きされる。本書は雛形四種が合写された一冊で、持明院九十五は、半丁に色紙形（正方形）を一枚ずつ計九種、持明院九十六は半丁に色紙形（正方形）を二枚ずつ計六種（六歌仙）、持明院九十七は色紙形（変形）に四季十五種のほか、色紙形（正方形）十種の計二十五種、持明院九十八は半丁に短冊を二枚ずつ計十六種掲載する。

写本一冊。表紙は藍（天）と紫（地）の打曇文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「<sup>持明院</sup>花色紙短尺 九十五六七八」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「持明院<sup>花色紙短尺</sup> 九十五六七八」（扉題）と記さ

れる。持明院九十八の巻尾に「右一巻 松山少将君奉傳之畢 寛政八年八月良辰尹祥」との本奥書が記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。色紙形や短冊の雛形は多種の伝本が確認されるが、該書のような花色紙や花短冊を載せる例は少なく貴重な入木道伝書と言える。





四季十二枚  
九十七

94 持明院色紙形散極秘（じみよういんしきがたちらしこくひ）

持明院九十九

後水尾天皇の所望により、持明院基時が調進した色紙形の雛形（写し）。  
枡形や変形の色紙形に様々に散らし形を示す。前半は詩歌十二種、後半は「二十一代集巻頭形之物」として、枡形と団扇（変形）の二枚ずつ計四十二種の雛形を載せる。

写本一冊。表紙は白茶色の水玉文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「色紙形散極秘」<sup>持明院</sup>（二十一代集巻頭／形之物） 九十九

と表紙左肩に直書きされる。内題は、「色紙形散極秘」（二十一代集巻頭／形之物） 九十九（扉題）と記される。巻尾に「右色紙形者依 後水

尾院仰持明院前大納言基時卿被調進之畢」と本奥書が記される。

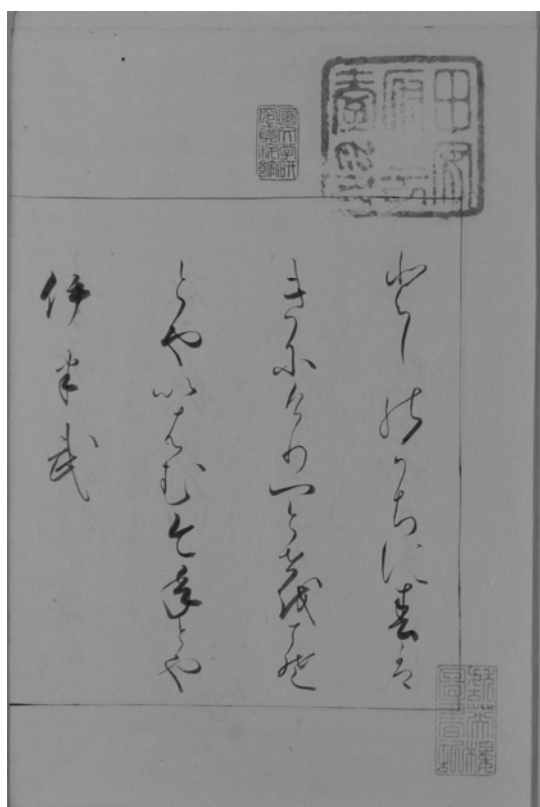
伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。

95 持明院無題名色紙形（じみよういんむだいめいしきがた）

持明院百上

持明院家に伝わる雛形。色紙形二十一種を掲載し、その後に「色紙可書様の事」として、枚数に応じて何を書くべきか言及している。

写本一冊。表紙は藍色地の水玉文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄紙。外題は、「無題名色紙形 一百上」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「無題銘色紙形 一百上」（扉題）と記される。色紙形の雛形末に「右色昏形巻頭巻軸之書舩其外所為秘傳也於書捨者以此中之正風舩可書之曾猥不可及外見者也」との本奥書が記される。巻尾には「色紙可書様の事」が付される。

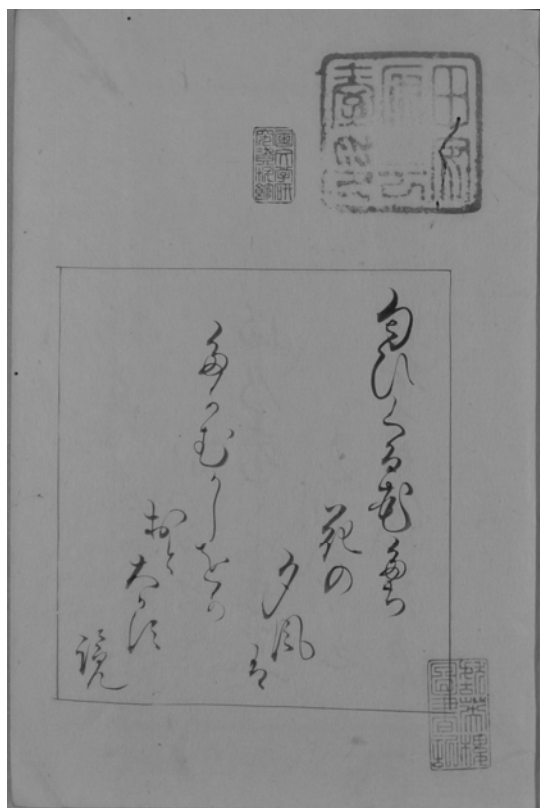


96 持明院色紙散形（じみよういんしきしちらしがた）

持明院百下

持明院家に伝来する色紙形の雛形。半丁に色紙形一枚ずつ、計百種の雛形を示す。

写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱の墨流し文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄紙。外題は、「持明院色紙散形 無題名 一百下」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「持明院色紙形 一百之下」（扉題）と記される。巻尾に「右一巻尔 松山少将君奉傳之畢 寛政九年十月良辰尹祥（花押）」との本奥書が記される。

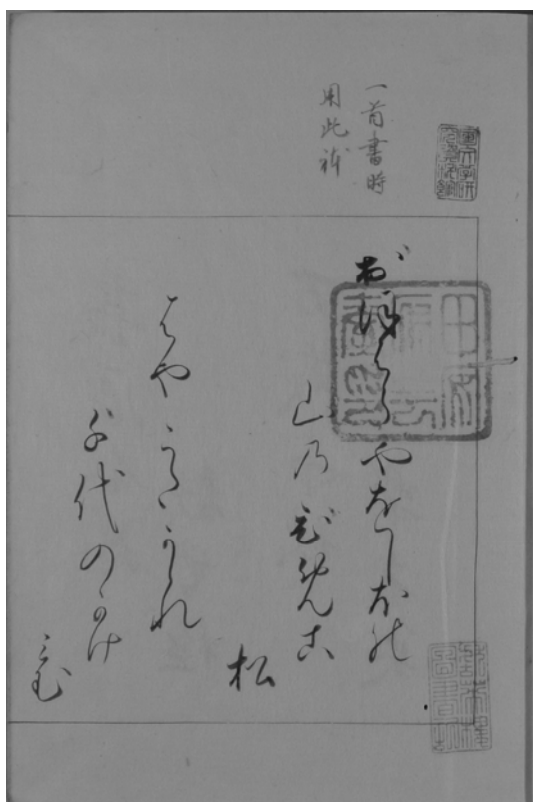




97 持明院数能志起紙形（じみよういんかずのしきがた）持明院百一

持明院百上に収められる「色紙可書様の事」に記される内容を、具体的な雛形をもって示したものの。一枚、二枚、三枚、四枚、五枚、六枚、七枚、八枚、九枚、十枚、十二枚の場合の内容を詩歌の散らし形とともに示す。

写本一冊。表紙は藍色地の水玉文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「<sup>持明院</sup>数能志起紙形 百一」（数のしき紙形とすべきか）と表紙左肩に直書きされる。内題は、「数能志喜帋形 百一」（扉題、数のしき帋形とすべきか）と記される。奥書・識語等はないが、巻尾に「為初心門人所書集也」と朱書きされる。



98 画賛（がさん）

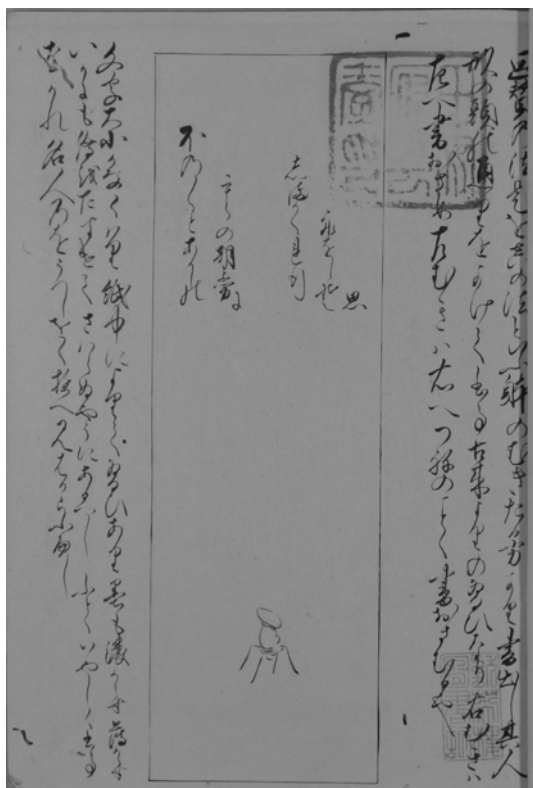
持明院百二

画賛を記す場合の書法の伝書。柿本人磨像などの具体例を挙げながら、詩歌の散らし形（着替の方法）を示す。

写本一冊。表紙は藍色地の水玉文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「<sup>持明院</sup>画賛 百二」と表紙左肩に直書きされる。内題は、

「画賛 百二」（扉題）と記される。奥書・識語等はない。

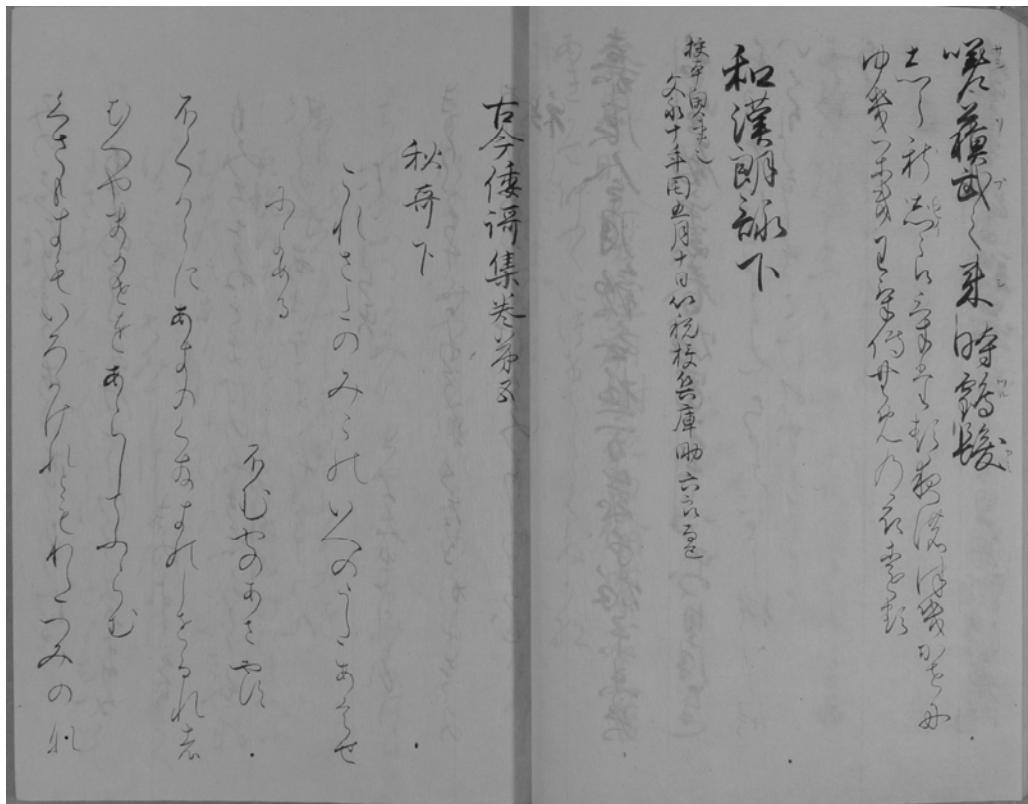
伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本と思しいが、着賛の方法を示す伝書は類例が少ないか。



古人の名跡を写したものの。寛政三年五月に書写された後醍醐天皇の「和漢朗詠集」にはじまり、伝紀貫之「高野切古今集」（巻五）、二条俊忠筆とされる「住吉歌合」、最後に藤原行成筆とされる「千字文」が写されている。

写本一冊。表紙は白茶色地の水玉文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は前半楮紙、後半薄様。外題は、「持明院古人筆跡 百三」と表紙左肩に直書きされる。内題はないが、「建武帝宸翰／貫之古今集第五／俊忠卿住吉哥合／行成卿千字文」と巻頭に記される。『和漢朗詠集』上末尾に「右和漢朗詠集者 後醍醐天皇宸筆也、越前国大勝寺之珍藏 寛政三年辛亥五月十七日於闇于夜燈下摹書之 源公風（花押）」、『和漢朗詠集』下末尾に「校本奥書也 文永十年閏五月十日以税授兵庫助六郎而已」、『古今和歌集』末尾に「此古今和哥集穂之部者于奥書云々撰者奎頭紀貫之朝臣真蹟也、尤以模本寫之、件之奥書者可為逍遙院前内府公、平令鑒定畢 于時寛政六年甲寅七月中旬 源公風記之」、「住吉歌合」末尾に「右住吉哥合者依藤重規所持二條黃門俊忠卿真蹟也、借覽之砌令摹書畢 寛政六年甲寅八月十九日 源公風」との本奥書がそれぞれ記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。このような臨写貼は、失われた名跡も写している場合があり、今後、注目されよう。



100 溪雲院内大臣入木道口授

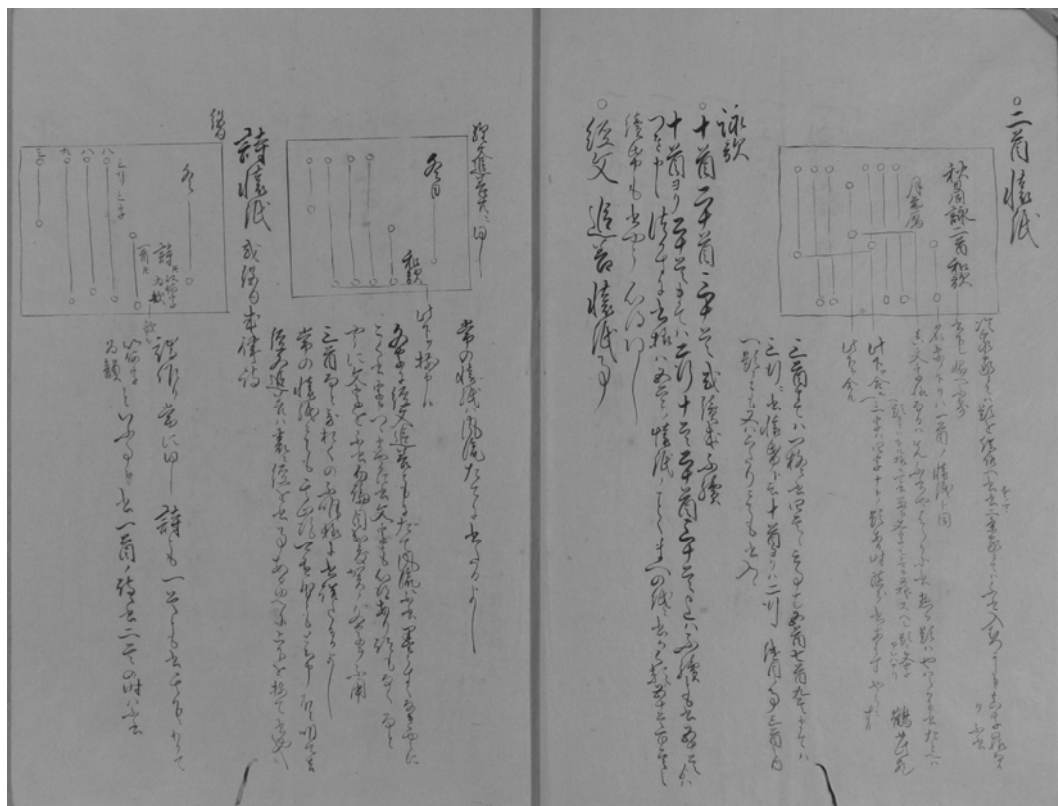
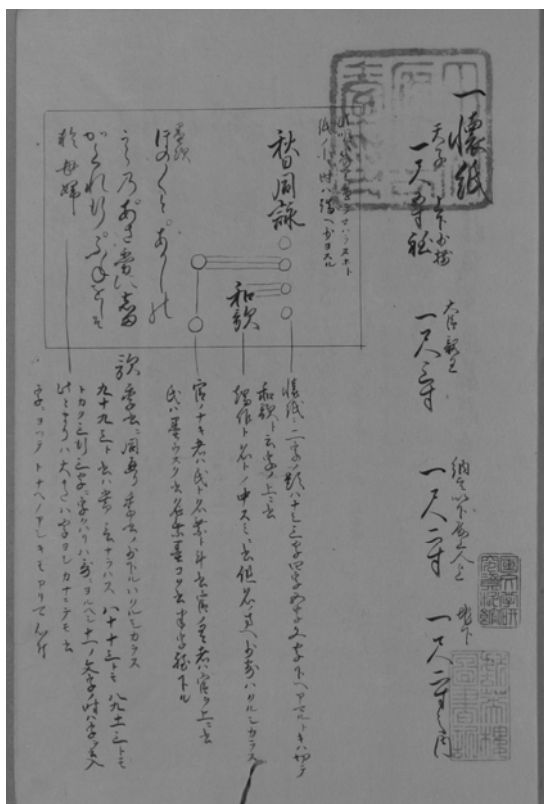
(けいいうんいんないだいじんじゅぼくどうくじゅ)

持明院百四

溪雲院・中院通茂(二六三二〜一七一〇)が久貝正方へ伝授した伝書。  
内容は懷紙、詠草、短冊、色紙形など多岐にわたる。

写本一冊。表紙は藍色地に銀泥の格子が刷毛で引かれ、扇面が描かれた紙表紙。扇面には季節の草木が描かれ、型紙吹きつけで着色される。見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「入木道口授 持明院 百四」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「入木道口授 百四」(扉題)と記される。巻尾に「此一帖者中院内大臣 通茂公 于久貝河内守正方朝臣傳給口決也、師家之口傳与更々不違可見、彼公之于書法勝給事可貴重云々 源尹祥誌之」との本奥書が記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。



101 法印堯孝口伝堯恵聞書

(ほういんぎようこうでんぎようえきがき)

持明院百五

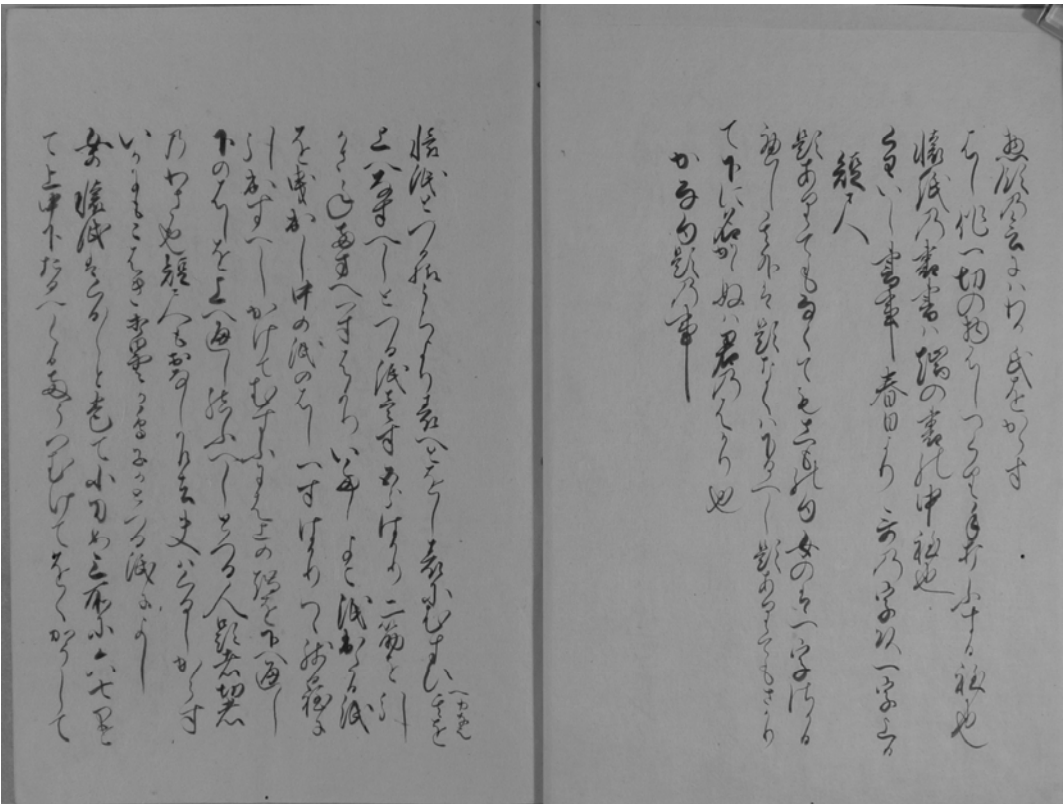
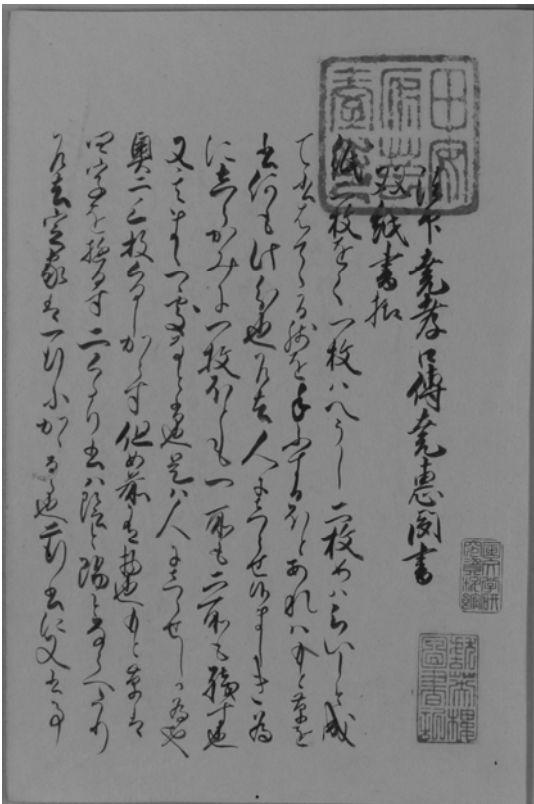
堯孝の口伝を堯恵が聞書したもの。内容は草子の書様にはじまり、短冊、団扇・扇面などの書法について言及する。

写本一冊。表紙は藍色地に銀泥の格子が刷毛で引かれ、扇面が描かれた紙表紙。扇面には季節の草木が描かれ、型紙吹きつけで着色される。

見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「法印堯孝口傳堯恵聞書持明院百五」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「堯孝法印十巻 百五(扉題)と、

二丁表に「法印堯孝口傳堯恵聞書(巻首題)」と記される。口伝末尾に「右堯孝法印筆を以写者也 堯恵」と本奥書が記される。巻尾には「禁裏御月次 明暦三年十一月廿四日」の歌題が列記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本か。

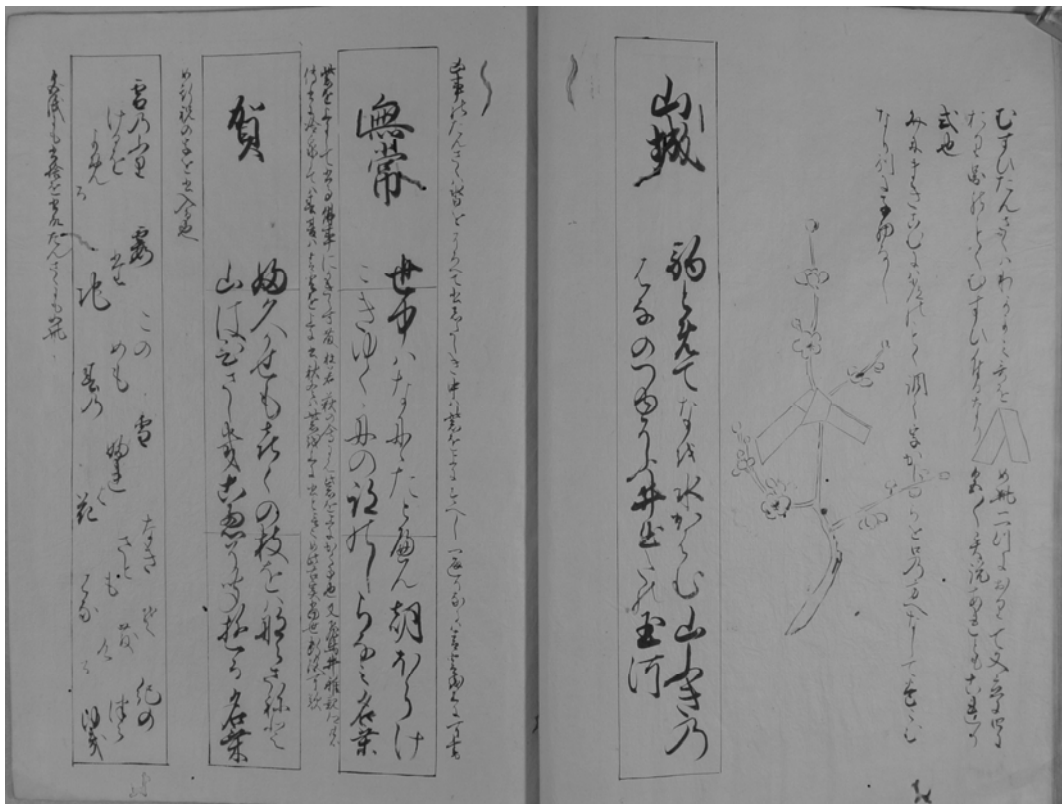
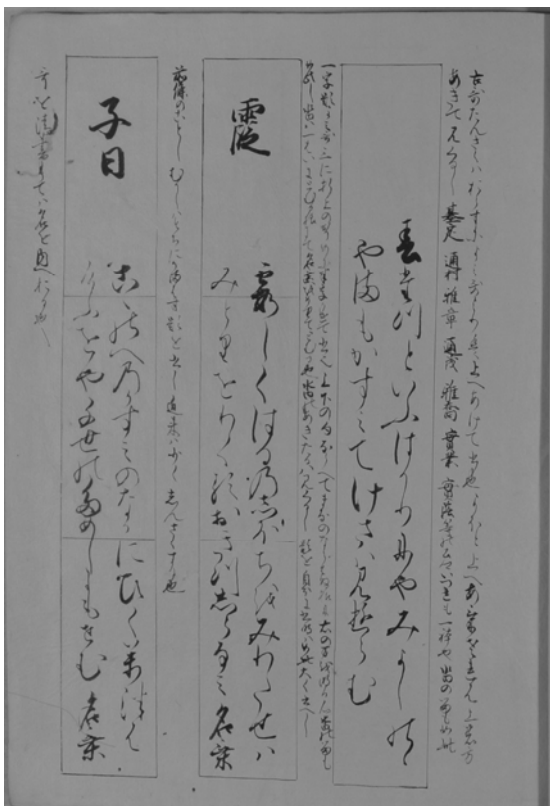


102 持明院短尺夜鶴（じみょういんたんざくやかく） 持明院百六

天明七年（一七八七）に著された森尹祥の伝書。短冊に関する伝書で、雛形を中心に載せ、古歌、一字題、二字題、三字題、四字題など、様々な場面を想定して言及がなされている。

写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱・金の墨流し文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「持明院 短尺夜鶴 百六」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「持明院 短尺夜鶴 百六」（扉題）と、二丁表に「短冊夜鶴抄目六」（目録題）が記される。巻尾に「右一巻尔松山少将君奉傳之畢 寛政八年八月良辰尹祥」と本奥書が記される。

伝本は、宮内庁書陵部、京都大学、大阪市立大学などに所蔵される。



## 持明院色紙夜鶴抄（じみよういんしきしやくしよう）

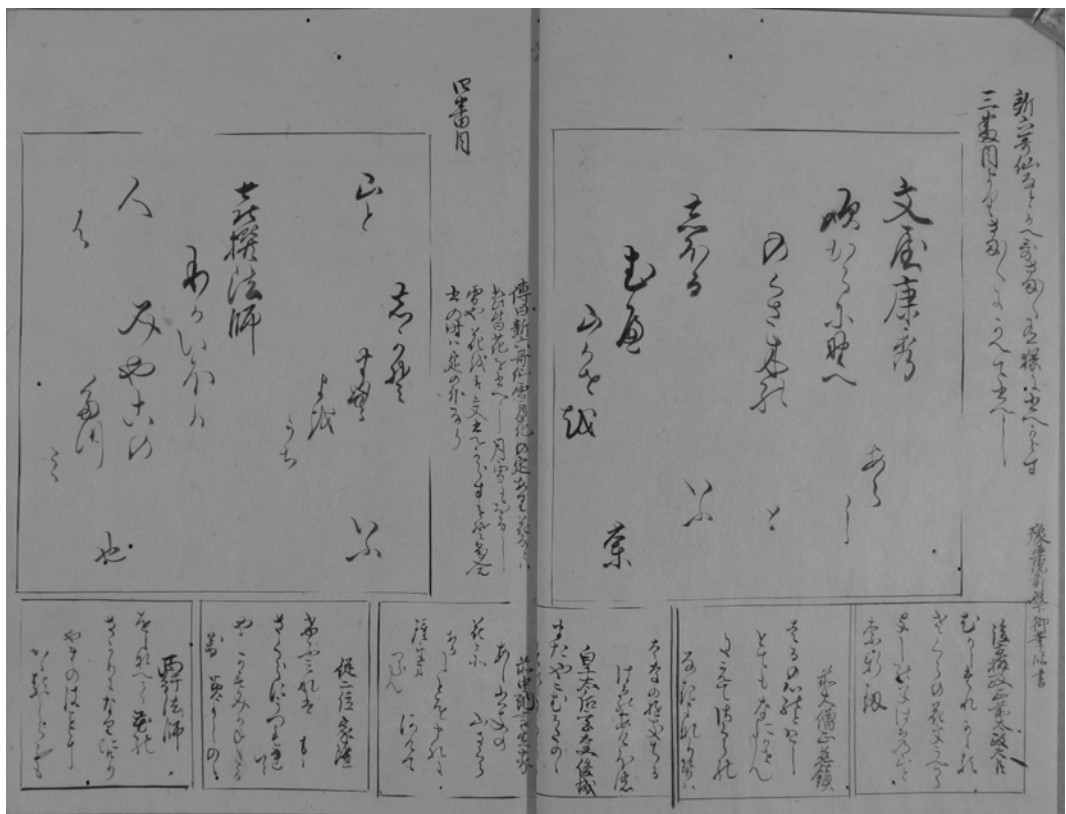
持明院百七上

持明院流に伝わる色紙形に関する口伝を森尹祥がまとめた伝書。持明院百六同様に、色紙形の雛形を示しながら、それぞれに言及がなされる。

写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱・金の墨流し文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「色紙夜鶴抄 百七上」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「持明院色紙夜鶴抄 百七上」（扉題）と記される。

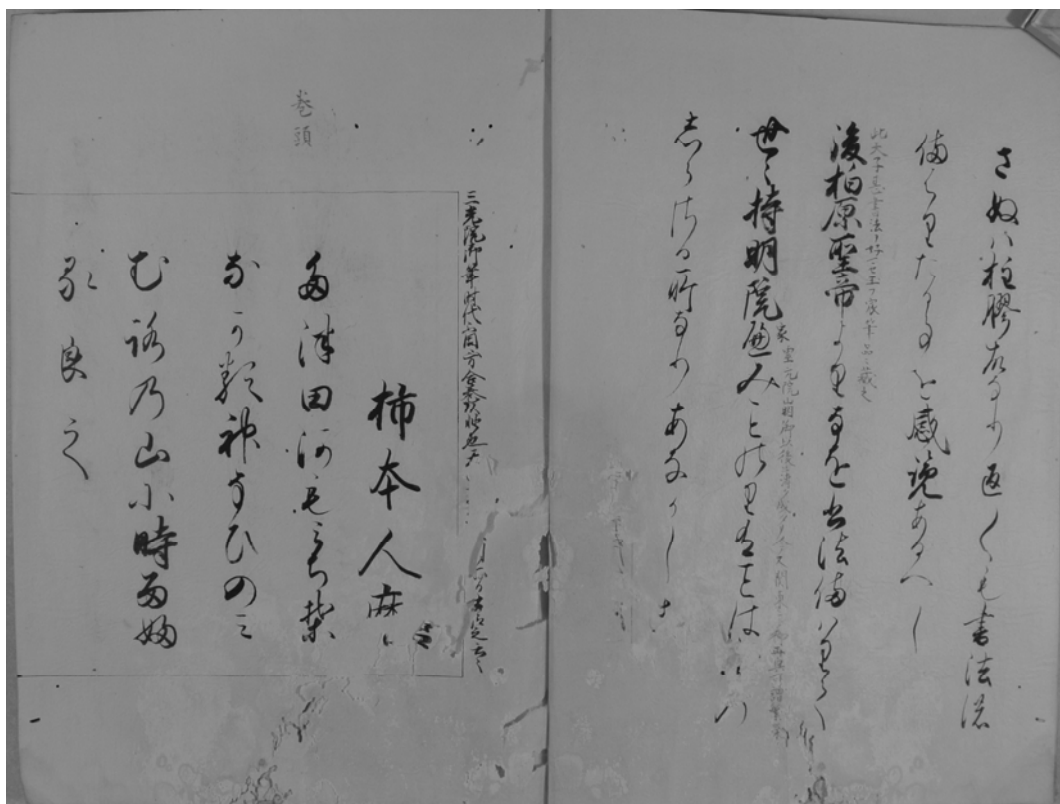
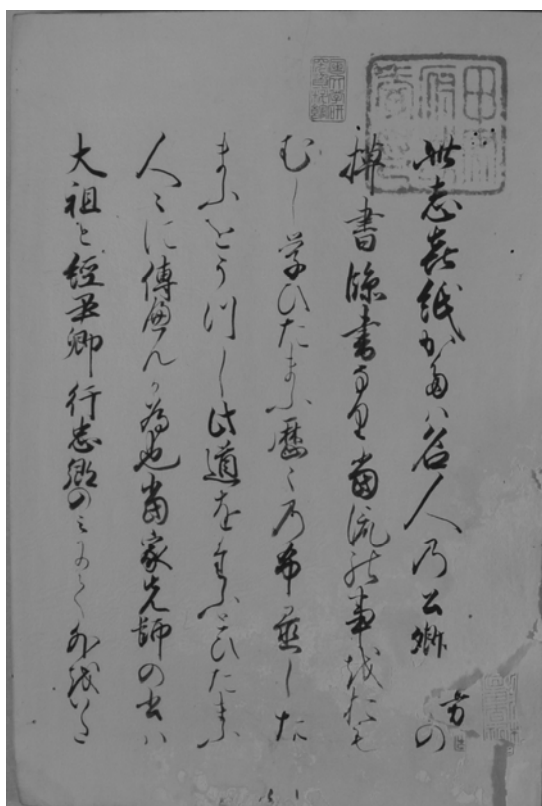
巻尾に「此一巻は師家代々の口傳 大小神祇へ誓ひ奉り一字も佞語を述す、右の外中右色紙形の寸法定等、或は和哥式、或は玉苑抄など、名付世上流布す、おほくは杜撰なり、可取用事にあらず、此書は琢磨の書なり、猥に門人にも傳ふへからず執心なる人にのみ 源尹祥誌之、「右一巻尔松山少将君奉傳之畢 寛政七年五月日尹祥」との本奥書が記される。

伝本は、ほかに国会図書館等に所蔵される。



古人の色紙形を臨書した雛形（写し）。前半は様々な色紙形の巻頭作品を掲載し、後半には近衛家熙筆「新六家撰花」「西湖八景」、幸仁親王筆「十體」、中院通茂筆「釈阿九十賀」などを掲載する。

写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱・金の墨流し文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「持明院<sup>色紙</sup> 百七下」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「持明院 百七下」（扉題）と記される。巻尾に「右一巻尔松山少将君奉傳之畢 寛政七年十二月日尹祥」と本奥書が記される。





(じみょういんけよりとうらいがくほううつし)

持明院百八

持明院家に伝わる額の書法に関する伝書。内容は大きく分けて、横額之法、豎額之法に分け、それぞれ字数によって異なる書式について言及する。

写本一冊。表紙は白色地に藍色の紋様(花輪と雲か)が摺り出された紙表紙。見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は、「額法寫」持明院家より到来 百八」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「額法寫」(扉題)と記される。

卷尾に「寛政十年十月日 (花押)」と本奥書が記される。

### 横額之法

横二字之額者其所ノ廣狹ニヨリテ先ツ  
横幅何尺ト定メ其横巾ヲ五ツ割テ三ツ

分テ豎ニシテ文字ノ位置ニ用ユ若筆者  
之姓名或ハ歲月等ヲ記ス時ハ五割三之  
外ニ餘命ヲ設クヘシ其故姓名歳月奥書  
等ハ文字ノ数ヌ又ハ行ノ様チ一致ナラ  
サルユヘナリ  
横三字額右同断其横巾ヲ五ツ割二分ヲ

豎ノ寸法ニ用ユクトヘハ横五尺ノ額ナ  
ラハ寸法ハ二尺トシルヘシ

### 豎額之法

豎額者鳥居之外ハ委シキ寸法ナシ大林  
文字一倍トシルヘシ文字一倍トハタト  
ヘハ文字ノ大キサ一尺ナラハ地板ノ巾  
二尺ナルヘシ豎ノ寸法ハ鳥居外ハ懸所  
ノ様子ニヨルヘシ或破風ノ間又庇之下  
ナト寺院亭齋等ニ土地ノ廣狹ニシタカ

フテ可也大方豎額鳥井ノ外ハ寸法ナシ  
ト心得テ然ヘシ

横額尤ノ或説尤用テヨロシ

三字額 二間四方ノ坐敷二尺二寸角折ニ

但次間トリ放或至十四或至二十者者尽寸

二字額 二間四方 二尺八寸角折一半

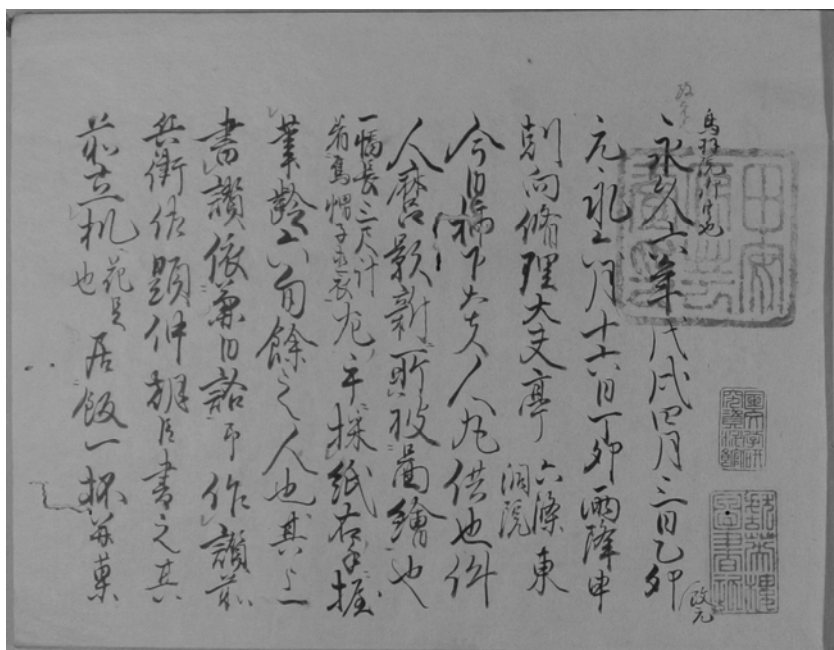
或自十六或至二十四者同変

二字額 二間一間半一尺二寸角折三分

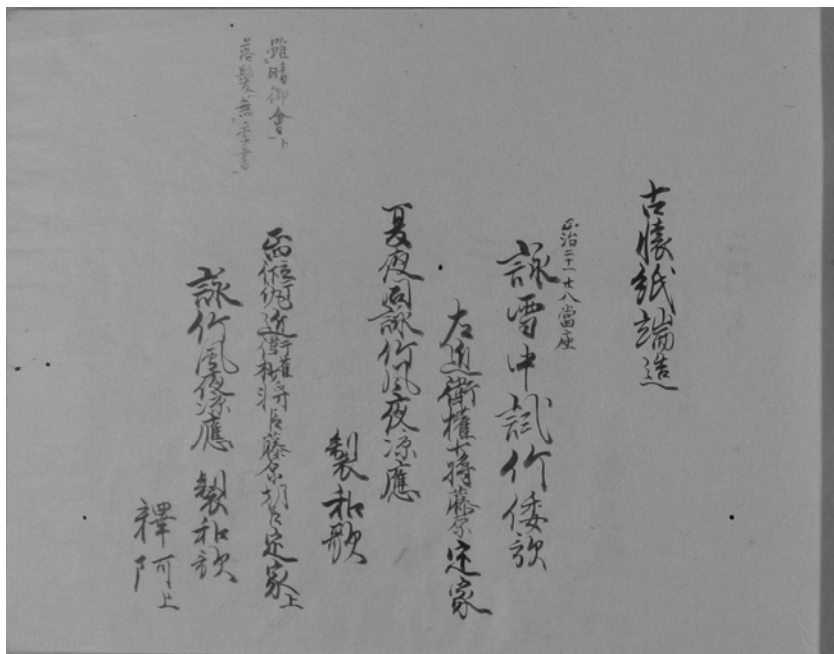
但細字自十字至十四字者角折一半横尽寸



古人の懷紙の写し。端作のバリエーションを示す。  
写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は



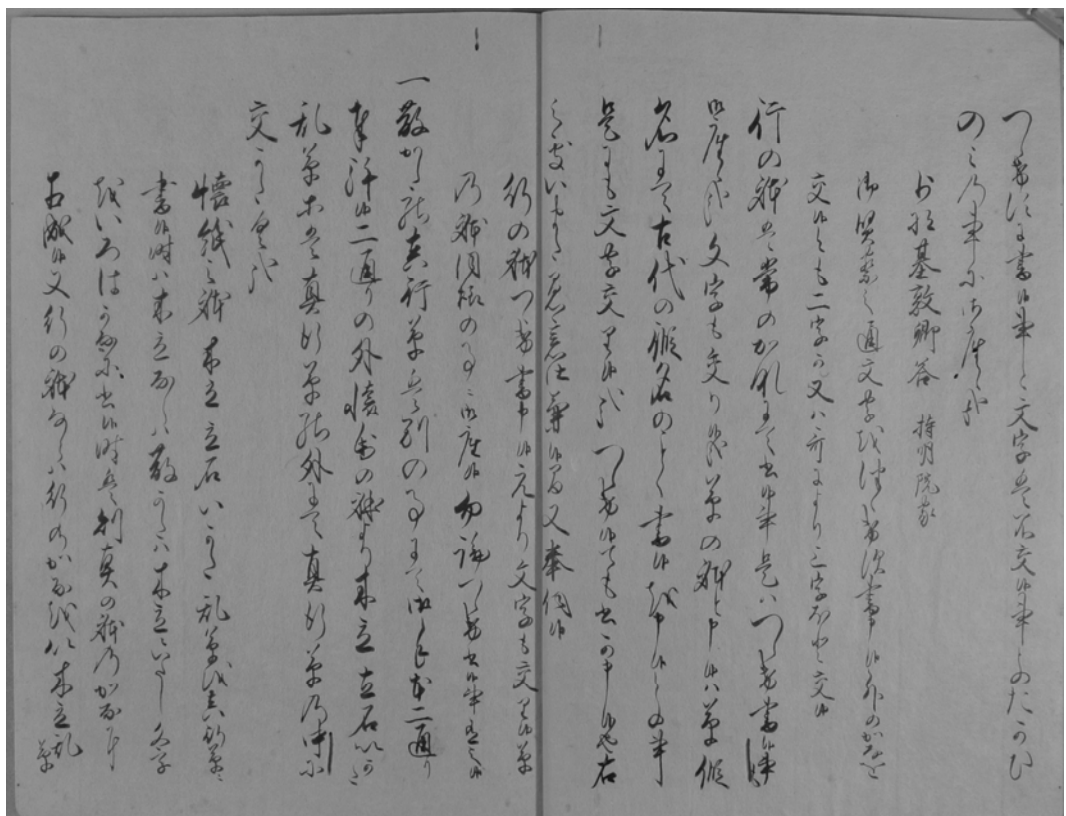
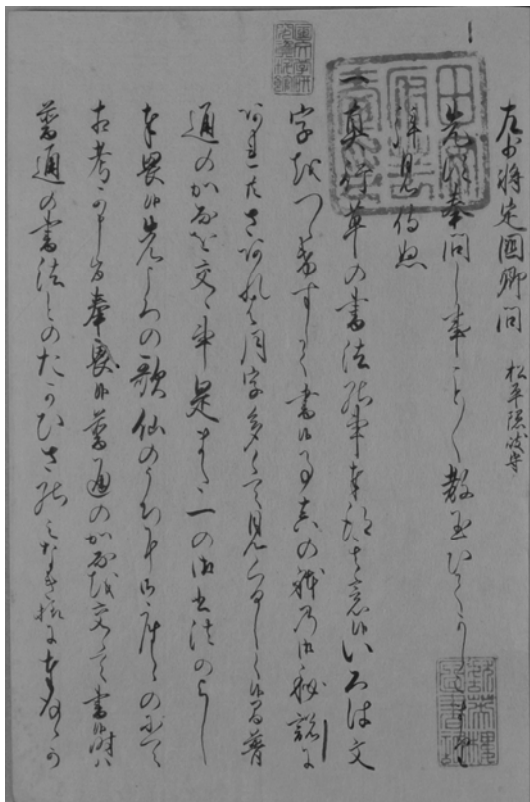
薄様。外題は、「古懷紙」持明院百九」と表紙左肩に直書きされる。内題は、「古懷紙 百九」（扉題）と記される。巻尾に「從尹祥追加至後京極殿御懷紙、真字假字并文字配等如本書也」との識語が記される。



(さだくにあそんもとあつあそんじゅほくもんどう) 持明院百十

松平定国が問うて、持明院基敦が答えたものをまとめた伝書。同じく問答形式で書きとどめられる『入木口伝抄』などと内容が重なる部分も散見される。

写本一冊。表紙は白色地に墨・藍・朱・金の墨流し文様の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は、「定国朝臣基敦朝臣入木問答」<sup>持明院百十</sup>と表紙左肩に直書きされる。内題は、「定国朝臣基敦朝臣入木問答」(扉題)と記される。奥書・識語等はない。

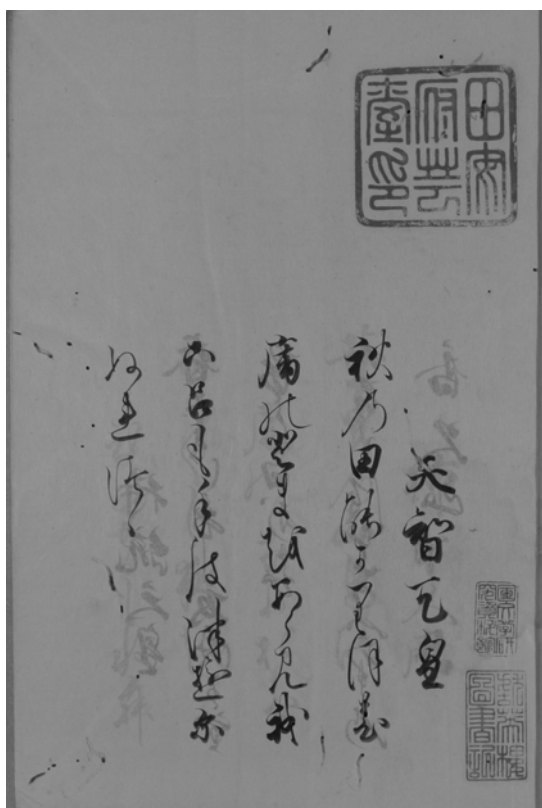


108 異本百体散形（いほんひゃくたいちらしがた）

持明院百十一

『百人一首』を題材とした色紙形の雛形（写し）。外題・奥書より持明院基時の手によるものとする。

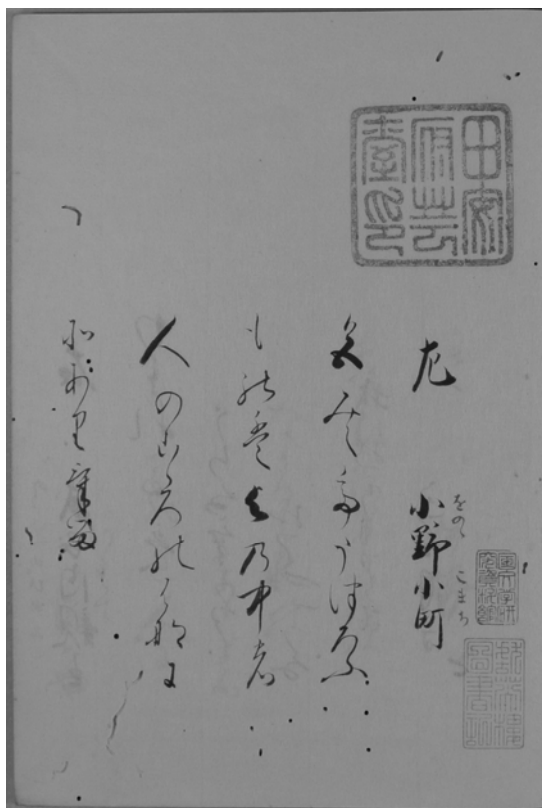
写本一冊。表紙は白色地に藍の刷毛目文様（細かい編み目）の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「百体散形 異本 持明院基時卿真跡 百十一」と表紙左肩に直書きされる。内題はない。巻尾に「右百人一首者持明院権大納言卿真蹟岡邑家珍藏也、文化十三年五月日摹寫終 文政六年癸未二月御写」との本奥書が記される。



109 異本女房三拾六人歌合

（いほんにようぼうさんじゅうろくにんうたあわせ）持明院百十二  
持明院家の色紙形の雛形で、森尹祥の奥書より世尊寺家伝来の内容を  
とどめるとする。界線等はなく、「女房三十六人歌合」「三十六人歌合」  
の色紙形を写す。

写本一冊。表紙は白色地に藍の刷毛目文様（横縞）の紙表紙、見返し  
は本文共紙、料紙は楮紙。外題は、「女房三拾六人哥合 異本 持明院 百十二 完」  
と表紙左肩に直書きされる。内題はない。巻尾に「右三十六人哥合真之  
書法者世尊寺家之秘伝持明院殿之傳書也、密々令相傳畢 天明二年九  
月廿五日 尹祥 尹子の御方へ」との本奥書が記される。

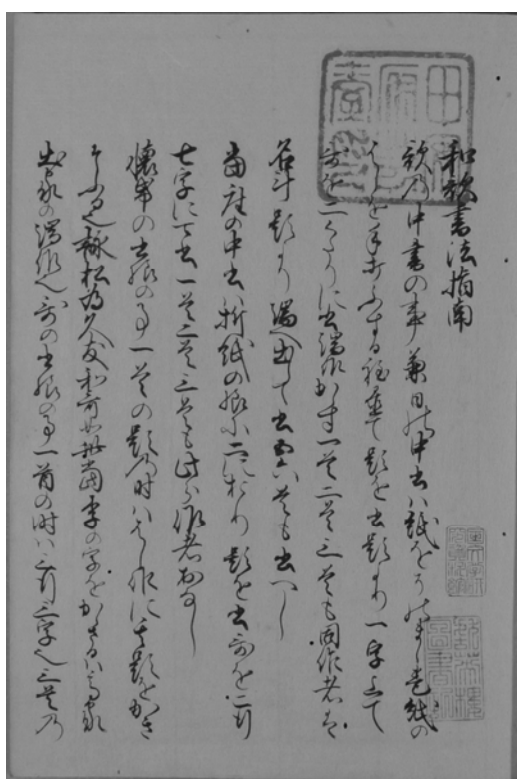
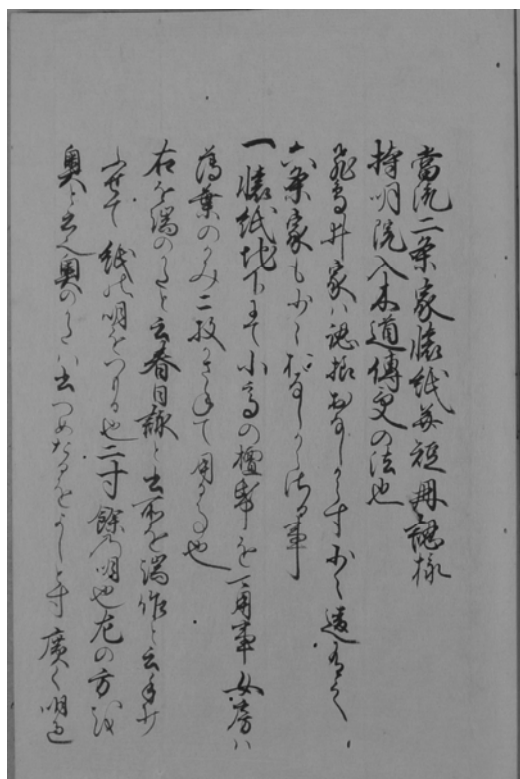


歌人・武者小路実陰（二六六一～一七三八）の和歌書法に関する伝書。

別名を「能書方之式」とする。内容は懷紙や詠草、短冊などについて言及する。「當流二条家懷紙并短冊認様」などのうたの家に伝わる伝書を収載する。

写本一冊。表紙は白色地に藍の摺り文様（花輪と雲か）の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は楮紙。外題は、「和歌書法指南 持明院 百十三」と表紙左肩に直書きされる。内題は一丁表に「能書方之式」（扉題）、二丁表に「和歌書法指南」（巻首題）、十丁表に「當流二条家懷紙并短冊認様」と記される。「和歌書法指南」末尾に「右一帖は依大樹公御所望飛鳥井家 雅意 被書進之尤可為秘藏者也 天和元年下浣日写之畢」、「右合書写畢尤可為珍重一帖也 源（花押）」、「當流二条家懷紙并短冊認様」末尾には奥書はないが「實陰」と記される。また、巻尾に「文政八年乙酉三月晦日写 竟 川井久敬」と書写奥書が記される。

伝本は、「日本古典籍総合目録データベース」を一瞥の限り、孤本と思しい。

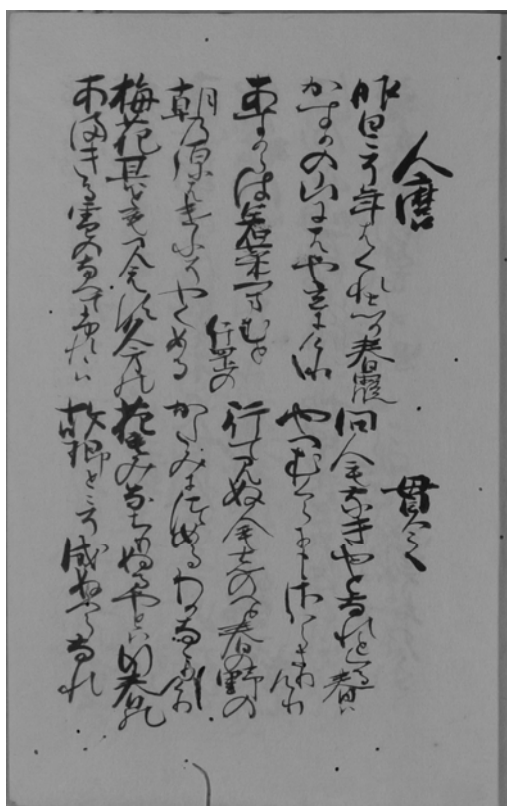


111 三十六人歌合（さんじゅうろくにんうたあわせ） 持明院百十四

定家様で書写された「三十六人歌合」の草子の写し。

写本一冊。表紙は白茶色地（無紋）の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は薄様。外題は「三十六人歌合 百十四」と表紙左肩に直書きされる。

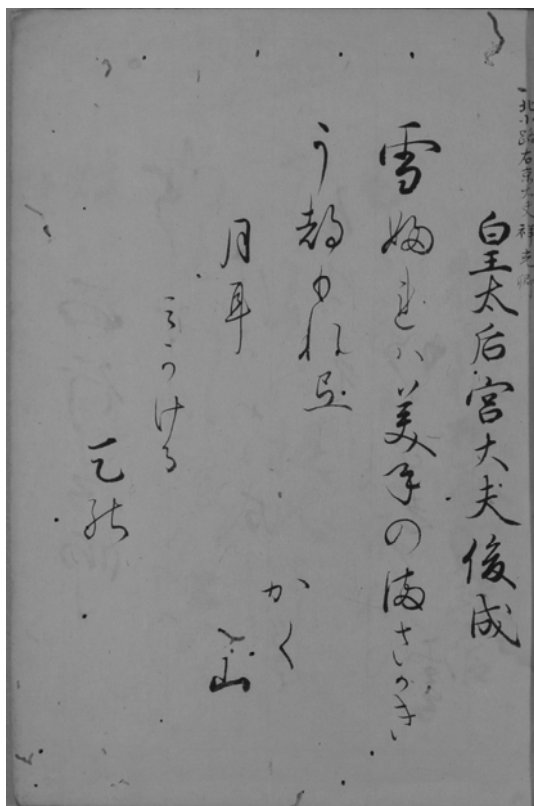
内題は「三十六人哥合」（扉題）と定家様で記される。巻尾に「採擇員数雖迷是非已被定其入所来遠年不書留、一本哉先年所持引失了、仍令書之不及校」との本奥書が転写される。



112 古歌散形（こかしらしがた） 持明院百十五

内題には「手鑑写」と記されるが、内容は古人の色紙形の写し、色紙形の脇に筆者名が小さく書き加えられる。

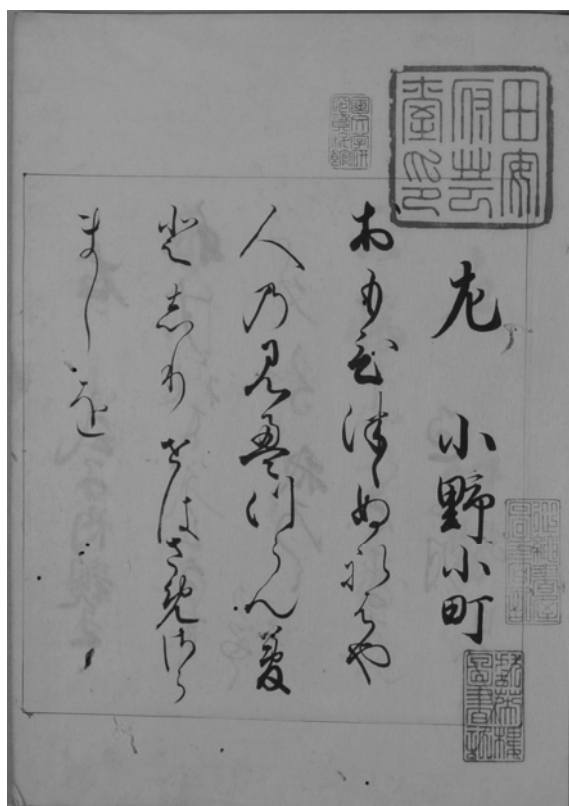
写本一冊。表紙は茶色地（無紋、紙の漉き目あり）の紙表紙、見返しは本文共紙（表見返し剥離）、料紙は楮紙。外題は、「古歌散形 百十五」と双郭の題簽に墨書され、表紙左肩に貼付されるほか、表紙右肩に「古歌散形」と直書きされる。内題は「手鑑写」（扉題）と記される。奥書・識語等はない。



女房三十六人歌合しきし書法（にようほうさんじゆうろくにんうたあわせしきししょうほう）  
持明院百十六

「女房三十六人歌合」を記した色紙形の写し。

写本一冊。表紙は薄紅色地（無紋）の紙表紙、見返しは本文共紙、料紙は楮紙。外題は、「女房三十六人歌合しきし 書法百拾主<sup>六</sup>」と表紙左肩に直書きされる。内題はない。奥書・識語等もない。



中殿御会部類（ちゆうでんごかいぶるい）

持明院百十七

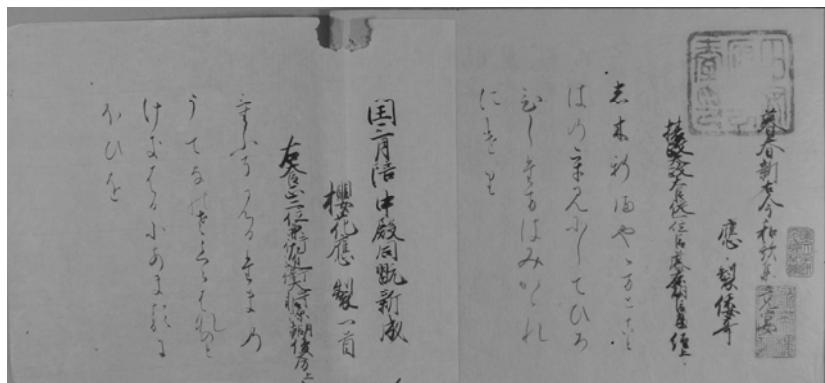
「晴御会部類記」の写本。建保六年（一二二八）八月十三日中殿御会、

宝治二年（一二四八）正月十七日後嵯峨院和歌管絃会の記録を記したものの。

写本一冊。表紙は朱色地の水玉文様の紙表紙、見返しは楮紙、料紙は薄様。外題は、「中殿御會部類<sup>持明院百廿七</sup>」と表紙左肩に直書きされる。

内題は「中殿御會部類 百廿四」（扉題）と記される。後半に「宝治二年正月十七日丙寅晴 今日和歌御會頭朝卿記」と記される。

伝本は、国会図書館、彰考館、内閣文庫、宮内庁書陵部などに所蔵される。また、『群書類従』（巻二八二）に残欠本が翻刻される。



〔注〕

- (1) 金子馨・海野圭介「国文学研究資料館蔵田安德川家旧蔵入木道伝書解題(世尊寺家篇)」(『国文学研究資料館調査報告書』第三八号、二〇一七年三月)

- (2) 国文学研究資料館編『田藩文庫目録と研究』日本書誌学大系94(青裳堂書店二〇〇六年)、文庫形成については、松方冬子「田安德川家蔵書の伝来について」(前掲書、四七一～四八八頁)、同「田安家蔵書の伝存について」(国文学研究資料館編『田安德川家蔵書と高乗敷文庫―二つの古典籍コレクション』古典講演シリーズ9、臨川書店、二〇〇三年)。

- (3) 大道寒溪「持明院流入木道」(『美術工藝』第一六号、一九四三年)、渡部清「持明院流」(『古書通信』第四四卷第二二号、一九七九年十二月)、小野恭靖「持明院基規小考―持明院家蔵書目録という窓から」(『芸能史研究』第一一六号、一九九二年一月、西村慎太郎「近世持明院流入木道に見る公家家職」(『東京大学史料編纂所研究紀要』第二〇号、二〇一〇年三月)、緑川明憲「持明院流」考…その本質を知るために」(『書学書道史研究』第二二号、二〇一二年十一月)ほか。また、武井和人「薬師寺蔵「持明院家歌道書道聞書伝書」略目録(稿)」(『研究と資料』第五九輯、二〇〇八年七月、同『中世古典籍の研究―どこまで書物の本姿に迫れるか―』新典社研究叢書77(新典社、二〇一五年)に再録)に入木道伝書が含まれるが、全てが一致するわけではなく今後の精査が待たれる。

- (4) 金子馨「世尊寺家・持明院家の入木道伝書に関する一考察―『入木道伝書目録』と田藩文庫所蔵の資料群との対比を中心として―」(『書学書道史研究』第二八号、二〇一八年十一月)、現存する資料群には重複や目録との不一致が確認される。また、森尹祥については鈴木淳「幕府書道師範森尹祥の書学」(『江戸和学論考』ひつじ研究叢書、ひつじ書房、一九九七年)。同書「板木師井上清風の刻業」において、『世尊寺法書』に関する言及が見られる。

- (5) 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」

(<http://basel.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html>)

- (6) 今井真二氏『仮名遣書論攷』(和泉書院、二〇一六年)ほか

- (7) 浅田徹「特集 越境する文学・語学研究 表層の秘義―入木道伝書を読む試み」(『国文学研究』第一五三・一五四号、二〇〇八年三月)ほか。岩瀬文庫蔵「和歌秘伝書」(一四〇―七四)の一部に該書が記されること、および浅田氏にすでに言及がなされていることについて館野文昭氏(国文学研究資料館機関研究員)にご教示いただいた。
- (8) 大道寒溪「持明院家に誓約状を遺す人ひと」(『美術工藝』第一七号、一九四三年)。小松茂美著『日本書流全史』上下(講談社、一九七〇年)、『小松茂美著作集』第十五～十七卷(旺文社、一九九九年)にも再録。

- (9) 赤堀又次郎校訂『語学叢書』第一編(東洋社、一九〇一年)、福井久蔵編『国語学大系』第九卷(白帝社、一九六五年)

(10) 和田英松『皇室御撰之研究』（明治書院、一九三三年）

(11) 金子馨「国文学研究資料館田藩文庫蔵『十三箇条之記』について 附翻刻」（『汲古』第六十九号、二〇一六年六月）

(12) 前掲註（8）小松氏『日本書流全史』（講談社、一九七〇年）

(13) 和田英松著『皇室御撰之研究』（明治書院、一九三三年）、「入木道口傳抄」（六八〇～六八二頁）。多賀宗準「世尊寺家書道と尊円流の成立」（『鎌倉時代の思想と文化』目黒書店、一九四六年）。落合博志『「入木口伝抄」について——国文学資料としての考察』（『法政大学教養部紀要（人文科学）』第七八巻、一九九二年二月）、金子馨『「入木口伝抄」の伝本について——附翻刻、国立国会図書館所蔵『入木口伝抄』——』（『語文』第百五十四輯、二〇一六年三月）など

(14) 金子馨「田安德川家田藩文庫蔵『烏羽玉問答集 教長口伝抄』について」（『語文』第百五十輯（二〇一四年十二月）。伝本については、同『「才葉抄」の伝本について——諸本の書誌と各系統の特徴——』（『語文』第百五十二輯、二〇一五年六月）。『群書類従』所収本の校本は、同『「才葉抄」類従本系統の伝本について——附校本——』（『語文』第百五十五輯、二〇一六年六月）ほか

#### 〔付記〕

本稿の「田安德川家田蔵入木道伝書一覽（持明院篇）」の作成、及び校正など編集作業において、石丸真弥氏（元国文学研究資料館資料整理等補助員、明星大学非常勤講師）のご助力を得ました。ここに記して、御

礼申し上げます。

なお、本稿はJSPS科研費（挑戦的萌芽研究海野圭介 15K12854・515K128540）による研究成果の一部です。



## (田安德川家旧蔵入木道伝書一覽(持明院家篇) 1 / 3)

通番	分類	書名	書名のよみ	編著者	装丁	数量	寸法 (縦×横 cm)	丁数 (紙数)	印記 (蔵書印)	請求番号	目録 番号
1	持明院1	短尺形古三十六人歌合	たんざくがたこさんじゅうろくにんうたあわせ		袋綴	1	26.7×19.0	7	BC	15-603	677
2	持明院2	色紙形	しきがた	伝世草寺行尹	袋綴	1	26.7×19.0	13	BC	15-604	678
3	持明院3	仮名遣	かなづかい	持明院基輔著	袋綴	1	26.7×19.0	14	BC	15-605	679
4	持明院4	仮字遣近道	かなづかいちかみち	三条西実枝著	折紙双葉装	1	19.4×26.6	22	BC	15-606	680
5	持明院5	悠紀主基御屏風本文 悠紀主基御屏風色紙和歌	ゆきすきごびょうぶほんもん ゆきすきごびょうぶしきしわか	菅原為徳撰/日野實矩跋	袋綴	2	26.9×19.0 26.6×19.0	13 20	BC	15-607-1 15-607-2	681
6	持明院6・7	男女詠草	なんによえいそう		折紙双葉装	1	22.2×30.6	10	BC	15-608	682
7	持明院8	三十六人歌合	さんじゅうろくにんうたあわせ		袋綴	1	26.6×19.0	20	BC	15-609-1	683
8	持明院9	三十六人歌合	さんじゅうろくにんうたあわせ	伝世草寺行高	袋綴	1	26.7×19.1	21	BC	15-609-2	683
9	持明院10	三十六人歌合	さんじゅうろくにんうたあわせ	伝世草寺行高	袋綴	1	26.6×19.0	21	BC	15-609-3	683
10	持明院11	三十六人歌合	さんじゅうろくにんうたあわせ	伝藤原伊経	袋綴	1	26.7×19.0	21	BC	15-609-4	683
11	持明院12	中古三十六人歌合	ちゅうこさんじゅうろくにんうたあわせ	伝持明院基定	袋綴	1	26.6×19.0	21	BC	15-610	684
12	持明院13	女房三十六人歌合	にようぼうさんじゅうろくにんうたあわせ		袋綴	1	26.7×19.0	20	BC	15-611	685
13	持明院14	屏風色紙形	びょうぶしきがた	伝持明院基規著	袋綴	1	26.6×18.8	20	BC	15-612-1	686
14	持明院15	屏風色紙形	びょうぶしきがた		袋綴	1	26.5×18.8	20	BC	15-612-2	686
15	持明院16	百鈴色紙形	ひやくたいしきがた	伝持明院基輔	袋綴	1	26.4×18.8	52	BC	15-613-1	687
16	持明院17	百鈴色紙形	ひやくたいしきがた	伝草純親王	袋綴	1	26.6×18.8	53	BC	15-613-2	687
17	持明院18	百鈴色紙形	ひやくたいしきがた	持明院基孝著	袋綴	1	26.7×19.0	28	BC	15-613-3	687
18	持明院19	百鈴色紙形	ひやくたいしきがた		袋綴	1	26.7×18.9	28	BC	15-613-4	687
19	持明院20	時代相違色紙形	じだいそういしきがた		袋綴	1	26.6×18.9	29	BC	15-614	688
20	持明院21	絵様色紙形	えようしきがた		袋綴	1	26.7×18.9	55	BC	15-615	689
21	持明院22	短冊知良志	たんざくちらし		袋綴	1	26.7×19.0	8	BC	15-616	690
22	持明院23	短冊散	たんざくちらし		袋綴	1	26.7×19.0	8	BC	15-617-1	691
23	持明院24	短冊ちらし	たんざくちらし		袋綴	1	26.7×19.0	7	BC	15-617-2	691
24	持明院24下	持明院三十六人歌合絵短冊散形	じみょういんさんじゅうろくにんうたあわせたんざくちらしがた		袋綴	1	30.7×22.5	10	BC	15-618	692
25	持明院25	短冊百人一首	たんざくひゃくにんいっしゅ		袋綴	1	26.7×19.0	27	BC	15-619	693
26	持明院26上	短冊ちらし	たんざくちらし		袋綴	1	26.7×19.0	19	BC	15-620	694
27	持明院26下	持明院百体短冊	じみょういんひゃくたいたんざく		袋綴	1	30.7×22.2	19	BC	15-621	695
28	持明院27上	絵よう短さく	えようたんざく		折紙双葉装	1	20.5×29.1	13	BC	15-622	696
29	持明院27下	持明院六歌仙短尺ちらし	じみょういんろっかせんたんざくちらし		袋綴	1	30.6×22.3	5	BC	15-623	697
30	持明院28	持明院詩歌短冊知良志	じみょういんしかたんざくちらし		袋綴	1	26.7×18.9	7	BC	15-624	698
31	持明院29	持明院数の短さく	じみょういんかずのたんざく		袋綴	1	30.6×22.2	18	BC	15-625	699
32	持明院30	仮名句題	かなくだい		折紙双葉装	1	18.9×26.7	7	BC	15-626	700
33	持明院31	持明院六人歌仙并十牛	じみょういんろくにんかせんならびにじゅうぎゅう		袋綴	1	26.7×19.1	16	BC	15-627	701
34	持明院32	持明院十二月花鳥和歌	じみょういんじゅうがつちやうわか	伝持明院基時	袋綴	1	26.7×19.0	16	BC	15-628	702
35	持明院33・34	師家への書翰 宣胤卿記指物綴	しかへのしょくわんのぶたねきょうきしものがく		折紙双葉装	1	19.0×26.6	13	BC	15-629	703
36	持明院35	持明院百人一首草子書	じみょういんひゃくにんいっしゅそうしがき		袋綴	1	26.7×19.0	21	BC	15-630	704
37	持明院36	草子書三十六人歌合	そうしがきさんじゅうろくにんうたあわせ		袋綴	1	26.7×19.1	21	BC	15-631	705
38	持明院37	源氏物語書法	げんじものがたりしよほう		袋綴	1	26.6×19.0	10	BC	15-632	706
39	持明院38	伊勢物語	いせものがたり	持明院基時書	袋綴	1	26.6×19.0	13	BC	15-633	707
40	持明院39	勅撰之法	ちよくせんのほう	伝持明院基定	袋綴	1	26.7×19.0	11	BC	15-634	708
41	持明院40	後白河院家康古今集御書法当流書法	ごかしわばらいんしんびつこきんしゅうごしよほうとうりゅうしよほう		袋綴	1	26.7×19.1	8	BC	15-635	709
42	持明院41	二十一代集表題	にじゅういちだいいしゅうひょうだい		袋綴	1	26.9×19.0	16	BC	15-636	710
43	持明院42	二十一代集巻頭和歌伝書合書	にじゅういちだいいしゅうかんとうわかでんしよあいがき		袋綴	1	26.9×19.1	14	BC	15-637	711
44	持明院43	十二月花鳥手鑑和歌色紙形	じゅうにがつちやうてかみわかしきがた		袋綴	1	26.9×19.0	16	BC	15-638	712

## (田安德川家旧蔵入木道伝書一覽(持明院家篇) 2 / 3)

通番	分類	書名	書名のよみ	編著者	装丁	数量	寸法 (縦×横 cm)	丁数 (紙数)	印記 (蔵書印)	請求番号	目録 番号
45	持明院44	衆空御筆写八景和歌色紙形 從持明院家到來	ぎょうくおんひっしやばっけいわかし しがたじみょういんけよりとらうらい	伝三条西実隆書	折紙双葉装	1	19.1×26.8	7	BC	15-639	713
46	持明院45	百体短冊散形	ひゃくたいたんざくちらしがた	持明院基孝著	袋綴	1	26.9×19.1	18	BC	15-640	714
47	持明院47	百人一首歌加留多 鳥丸光広 卿書	ひゃくにんいっしゅうたかるた からずまるみつひろしょうよ	伝鳥丸光広書	袋綴	1	27.0×19.0	30	BC	15-641	715
48	持明院48	持明院系因并相伝書	じみょういんけいずならびにそうで んしよ		袋綴	1	26.9×19.1	15	BC	15-642	716
49	持明院49	十二点使筆法	じゅうにてんしひつほう	伝持明院基時書	袋綴	1	26.9×19.0	5	BC	15-643	717
50	持明院50	世尊寺家入木道伝来持明院 家書約亭附女管約并置事	せそんじけいじゅぼくどうでんらい じみょういんけいせいやくのうつつげ たりおんせいやくならびにたかの こと		袋綴	1	26.9×19.0	27	BC	15-644	718
51	持明院51	後普光院御抄	ごふこういんみしょう		折紙双葉装	1	19.0×26.6	9	BC	15-645	719
52	持明院52	草朝十三箇条 尊鎮御消息	そんちょうじゅうさんかじょう そんちんごしょうそく		袋綴	1	26.7×18.9	8	BC	15-646	720
53	持明院53	持明院百体色紙散形真本	じみょういんひゃくたいしきしらし がたいほん		袋綴	1	26.5×19.2	50	BC	15-647	721
54	持明院54	基規卿散形三十六人歌合	もとものりきょうちらしがた さんじゅうろくにんうたあわせ	伝持明院基規	袋綴	1	26.8×19.2	20	BC	15-648	722
55	持明院55	花月恋五十体色紙	はなつきこいごじったいしきし		袋綴	1	26.9×19.1	28	BC	15-649	723
56	持明院56	短冊題書法	たんざくだいしよほう		袋綴	1	26.8×19.0	3	BC	15-650	724
57	持明院57・ 58	持明院書捨女房儀紙	じみょういんかきずてにようぼうかい し		折紙双葉装	1	19.0×26.6	9	BC	15-651	725
58	持明院59	持明院入木道色紙形	じみょういんじゅぼくどうしきがた		袋綴	1	26.9×19.2	26	BC	15-652	726
59	持明院60	持明院女房儀紙色重	じみょういんにようぼうかいしいろがさ ね		折紙双葉装	1	22.3×30.6	6	BC	15-653	727
60	持明院61	詩歌色紙形	しいかしきがた		折紙双葉装	2	19.0×26.6	21 38	BC	15-654-1 15-654-2	728
61	持明院62上	自讀和歌集	じさんわかしゅう		袋綴	1	26.9×19.1	28	BC	15-655	729
62	持明院62下	持明院色紙ちらし	じみょういんしきしらし		袋綴	3	26.6×19.1 26.6×19.0 26.7×19.1	41 39 41	BC	15-656-1 15-656-2 15-656-3	730
63	持明院63	女御入内色紙形ちらし	にようごじゅだいしきがたちらし		袋綴	1	26.5×18.9	22	BC	15-657	731
64	持明院64	持明院歌賀留多	じみょういんうたかるた		袋綴	1	26.7×19.0	26	BC	15-658	732
65	持明院65	歌嘉類多	うたかるた	伝世尊寺行房・世尊寺行多 伝持明院基時	袋綴	2	26.6×19.1 26.6×19.0 26.7×19.1	25 26	BC	15-659-1 15-659-2	733
66	持明院66	宇多加留太の写	うたかるたのうつし	伝持明院基時	袋綴	1	26.7×19.0	31	BC	15-660	734
67	持明院67	入木口伝抄	じゅぼくぐでんしやう	世尊寺行房・世尊寺行多 述	袋綴	1	26.6×18.9	59	BC	15-661	735
68	持明院68	当家の問書	とうけのききがき	持明院基時伝	袋綴	1	26.8×19.0	38	BC	15-662	736
69	持明院69	金森經時朝臣問書	かなもりよりときあそんききがき		袋綴	1	26.7×19.0	37	BC	15-663	737
70	持明院70	曾谷長順問書	そたにながとしきがき		袋綴	1	26.7×19.0	23	BC	15-664	738
71	持明院71	大沢家問書	おおさわききがき		袋綴	1	26.7×19.0	25	BC	15-665	739
72	持明院72	他家問書	たけききがき		袋綴	1	26.7×19.0	20	BC	15-666	740
73	持明院73	高階經和問書	たかしなつねかずきがき		袋綴	1	26.8×19.0	33	BC	15-667	741
74	持明院74	大沢基珍朝臣問書	おおさわもとよしあそんききがき		折紙双葉装	1	20.3×29.4	24	BC	15-668	742
75	持明院75	明題抄	めいだいしやう		袋綴(仮)	1	26.8×19.3	82	BC	15-669	743
76	持明院76	持明院殿御家伝 等無軒問書	じみょういんどのごかでん とうむけんききがき		袋綴	1	26.7×19.0	16	BC	15-670	744
77	持明院77	入木道古抄	じゅぼくぐこしやう		折紙双葉装	1	19.0×26.7	23	BC	15-671	745
78	持明院78	入木道伝統	じゅぼくぐでんとう		袋綴	1	26.7×19.0	7	BC	15-672	746
79	持明院79	持明院入木道口授	じみょういんじゅぼくぐくじゅ	持明院基定伝	袋綴	1	26.8×19.1	14	BC	15-673	747
80	持明院80	和歌食式	わかかいしき		袋綴	1	26.7×19.0	11	BC	15-674	748
81	持明院81	入木抄追加	じゅぼくしやうついか		袋綴	1	27.0×19.1	15	BC	15-675	749
82	持明院82	教長卿口伝	のりながきやうぐでん	藤原教長伝	袋綴	1	26.7×19.0	23	BC	15-676	750
83	持明院83	藤状書様	ちやうじやうかきやう		袋綴	1	26.9×19.1	9	BC	15-677	751
84	持明院84	持明院二十八ヶ条口伝	じみょういんにじゅうはちかじやうぐ でん		袋綴	1	26.7×19.1	16	BC	15-678	752
85	持明院85	三十六人歌合集	さんじゅうろくにんうたあわせしゅう		袋綴	1	18.2×13.5	80	BC	15-679	753
86	持明院86~88	源底集 以呂波伝授	げんていしゅう いろはでんじゅ		袋綴	1	26.6×19.0	17	BC	15-680	754
87	持明院89	持明院源底集	じみょういんげんていしゅう		袋綴	1	30.6×22.3	31	BC	15-681	755

## (田安德川家旧蔵入木道伝書一覽(持明院家篇) 3 / 3)

通番	分類	書名	書名のよみ	編著者	装丁	数量	寸法 (縦×横 cm)	丁数 (紙数)	印記 (蔵書印)	請求番号	目録 番号
88	持明院90	色紙形	しきしがた		袋綴	2	26.9×19.1	27 22	BC	15-682	756
89	持明院91	勅点百人一首	ちよくてんひやくにんいつしゅ		袋綴	1	26.7×19.1	22	BC	15-683	757
90	持明院92	持明院扇面書法	じみょういんせんめんしょほう		折紙双葉装	1	22.5×30.7	23	BC	15-684	758
91	持明院93	持明院色紙切形	じみょういんしきしきりがた		折紙双葉装	1	19.0×26.6	11	BC	15-685	759
92	持明院94	持明院形之物	じみょういんかたのもの		折紙双葉装	1	18.9×26.7	16	BC	15-686	760
93	持明院95~98	持明院花色紙短尺	じみょういんはなしきしたんざく		袋綴	1	26.8×19.0	29	BC	15-687	761
94	持明院99	持明院色紙形散極秘	じみょういんしきしがたらしごくひ		袋綴	1	26.7×19.0	30	BC	15-688	762
95	持明院100上	持明院無羅名色紙形	じみょういんむだいめいしきしがた		袋綴	1	26.7×19.0	15	BC	15-689-1	763
96	持明院100下	持明院色紙形	じみょういんしきしがた		袋綴	1	26.7×19.0	52	BC	15-689-2	763
97	持明院101	持明院数能志起紙形	じみょういんかずのしきしがた		袋綴	1	26.8×19.1	65	BC	15-690	764
98	持明院102	画賛	がさん		袋綴	1	26.7×19.2	8	BC	15-691	765
99	持明院103	持明院古人筆跡	じみょういんこじんひっせき		袋綴	1	26.8×19.0	61	BC	15-692	766
100	持明院104	溪雲院内大臣 入木道口授	けいうんいんないだいいじん じゅぼくどうくじゅ	中院通茂伝	袋綴	1	26.7×19.0	10	BC	15-693	767
101	持明院105	法印亮孝口伝亮意聞書	ほういんぎょうこうでんぎょうえきき がき		袋綴	1	26.8×19.1	15	BC	15-694	768
102	持明院106	持明院短尺夜鶴	じみょういんたんざくやかく		袋綴	1	30.6×22.2	24	BC	15-695	769
103	持明院107上	持明院色紙夜鶴抄	じみょういんしきしやかくしょう		袋綴	1	26.7×19.0	20	BC	15-696	770
104	持明院107下	持明院色紙	じみょういんしきし		袋綴	1	30.5×22.3	54	BC	15-697	771
105	持明院108	持明院家より到来 額法写	じみょういんけよりとうらい がくほううつし		袋綴	1	26.8×19.1	5	BC	15-698	772
106	持明院109	古懐紙	こかいし		折紙双葉装	1	19.0×26.7	20	BC	15-699	773
107	持明院110	定国朝臣基教朝臣 入木問答	さだくにあそんもとあつあそん じゅぼくもんどう		袋綴	1	26.9×19.1	21	BC	15-700	774
108	持明院111	異本百体散形	いほんひゃくたいちらしがた		袋綴	1	26.8×19.2	51	BC	15-701	775
109	持明院112	異本女房三十六人歌合	いほんにようぼうさんじゅうろくにん うたあわせ		袋綴	1	26.5×19.3	38	BC	15-702	776
110	持明院113	和歌書法指南	わかしよほうしなん	武者小路実隆記	袋綴	1	26.8×19.1	14	BC	15-703	777
111	持明院114	三十六人哥合	さんじゅうろくにんうたあわせ		袋綴	1	26.4×18.0	18	BC	15-704	778
112	持明院115	古歌散形	こかしらしがた		袋綴	1	28.8×20.2	12	BC	15-705	779
113	持明院116	女房三十六人歌合しきし書法	にようぼうさんじゅうろくにんうたあ わせしきしよほう		袋綴	1	26.8×20.0	18	BC	15-706	780
114	持明院117	中殿御会部類	ちゅうでんごかいぶるい		折紙双葉装	1	19.0×26.6	14	BC	15-707	781